94-3194
1200501336780
94
91

94
319

單伝法著
茶禪一味

工ト2T56

田中仙樵著

茶禪一味

大日本茶道學會出版部

昭和七年一月二日 帝國圖書館

一味禪

啓秦

得庵

愛雲隠

元来迂納ニ来ル茶禅一味ノ会部三百三十三ベーレ中徽現徽
尾間拝スベキ有所ナキノミナラズ拝閲ニ毎ニ醜玉ノ林ニ入ルガ
如キ心地ヲシ且ツ之ニ伴フ拝覧茶会ハ殆ンド贅沢ニ堪ヘザルモノニ拘ラズ
庭裡一宇ノ未ダ極カラサル有リトハ雖モ那ノ一宇ノ元ヒシ
モノヲ此ノ一棟ニ茶禅一味会倫ヲ離レテ左倫ヲ離レザルヽバ
恒リ法句ニ等ベベキ花句ニ有ルモノヲ匂シ
斯クハ申スモノヽ変ハガ去嘉迂納一場ノ一棟ヲ今以テ志シズ二百何
十何畳ノ事京マデモ堂トセズセタラ買ハレテ数ケ月数十朝間ニ直チニ
死工夫ヲ凝ラサレシハ遠ナ以来納傳ノ標榜ナリ居士身トメ其志ノ
優且笑ナル天下ノ納傳ヲ愧死スルノミ

九月九二日午後三階ノ東窓下ニ於テ

左遷庵、黙宥

仙孤居士

孔小

94-319/1

舊著再版に就て

本著は明治三十九年の發行に屬し、今日の研究より顧みれば、學說に於て多少變更を要する點もあり、後編の茶禪錄に至つては更に附加す可き多くの材料を有すと雖も、現今予の多忙の身を以ては、悉く是れを改善するの餘暇も無く、諸方より舊著たる本書の名前を聞き傳へて、頒布を求めらるゝこと切なるを以て、遂に茶道學會より舊著のまゝ再版發行することゝせり。

本書發行の當初に於て、建仁寺管長故竹田默雷禪師より『冷煖自知』なる題字を賜はりたれども、出版書店の都合にて之を省略し、鳥尾得庵居士の題字を以てせり、今は曩に賜ふ題字も紛失したれば、其後本書に就て過賞せられたる墨蹟中私信に屬する前後を略し、本書に關する一節のみを寫眞版に附して題字に代爾云。

昭和六年五月

小石川音羽山翠竹靜處に於て

田中仙樵居士識す

自序

抑我國之茶道者。始于珠光。中興于紹鷗。大成利休。遂以至成一種之國粹的道學矣。本來茶道於深味也。起自禪。資理於易。定禮於曲禮。夫然而大之則涉六合。而不可窮盡。小之則爲修身齊家治國平天下之基。豈不復廣大哉。然而星移物換。茶道之弊有名無實。化成一種之遊藝爲婦女子之所翫弄。熟視今之茶人者。往々蒐集古器物。以誇示衆人。或表面正襟巧言令色。而裏面誹謗嘲笑遷時。其甚者爲庭園數奇結構。至于蕩盡家產。於之乎爲識者之所擯斥。僅留其形跡於逸遊者及婦女子間耳。嗚呼茶道之衰亦一至此乎。

茶聖宗旦翁茶禪論曰。愛奇貨珍寶。擇酒色之精好。或結構茶室。翫樹木泉石。爲遊樂設者。違茶道之原意。只偏甘禪味爲修行。是吾道之本懷也云々。由之觀是。可識茶味與禪味同一味也。不肖曩興立大日本茶道學會。聊唱導禪的茶道矣。今更錄茶禪一味焉。讀者請誤無爲附會之戯論私說。則幸甚也

於三德庵

田中仙樵識

凡例

一本書題して茶禪一味といふ。元是茶道の禪的趣味を唱道せんと欲したるが爲めなり。將に出版せんとするに際して、光融館主人更に禪を說かむことを請ふ。咄嗟筆を呵して前半稿を奔らす。故に名實相添はざるの觀あるのみならず、文字も亦相接續せずと雖も、今や全編を補筆するに遑あらず、看者之を諒せよ。

一本書は、前半に於て禪を說き、後半に於て茶を說き、以て茶禪一味の實を擧げんことを期せりと雖も、遂に支離滅裂の體裁に終る。然れども前編は自ら信ずる所を吐き、敢て諸書を涉覽して參書とせざるを得意とす。又一人の知己なしとせんや。

一卷末載する所の利休論は、畏友星野天知君の舊稿に屬す、請ひ得て附錄とす、同氏の爲めに玆に其厚意を謝す。

明治三十七年臘月除夜前一日

著者又識

茶禪一味目次

前編

一緒論……一
一哲學と佛教との關係……三
一佛教と一元論……六
一佛教的物質觀……八
一エネルギーと四大說……一二
一六大と物質……一五
一物質の本體……一七
一物質の靈動……一九
一物質の自存力……二二
一物質と因果律……二五
一草木國土悉有佛性……二七
一佛教の宇宙觀……二八
一因果の法則と宇宙……三二
一動の大原則……三八
一宇宙の心靈……三八
一佛教の人生觀……四一
一佛教の生死觀……四四
一靈魂とは何ぞや……四五
一死後靈魂の狀態……四八
一死後の實驗法……五〇
一佛教の倫理觀……五二
一因果律の例外……五七
一禪宗の因果觀……五九

一禪の處世觀……六一

後編

一緒論……六五
一茶道病論……六八
一茶道體用論……七一
一茶禪論……七九
一茶道の沿革……九二
一茶道の興立……九三
一茶道の分派……九四
一茶道の大成……九五
一茶道の本旨……九六
一誰か茶道を怯惰の法と謂ふ……九七
一點茶は禪法なり……九九
一懷石の文字……一〇一
一數奇の文字……一〇三
一露路の辨……一〇五
一茶の湯の文字……一〇六
一草庵の意……一〇八
一四疊半は茶席の根元說……一一〇
一捨虛取實傳……一一一
一意進理進業進……一一二
一點茶は無念無想の法……一一四
一主客氣位の事……一一六
一丹田の養成……一一七
一點茶體用辨……一一八

一無賓主の茶……一一九
一和敬淸寂の解……一二〇
一茶道は不立文字以心傳心の法……一二二
一茶道は草より入て草に終る……一二三

△喫茶法語集

一澤庵和尙示茶人某書……一二五
一語錄四則……一四四
一南坊錄拔粹……一四六
一利休一枚起請……一六三
一小堀遠州公書捨文……一六三
一澤庵和尙壁書……一六四
一光廣卿御壁書……一六五
一夢庵戲歌集の一節……一六五
一無難禪師法語の中道歌……一六七
一大心和尙の記……一七〇
一珠光古市播磨法印への相傳の畧……一七一
一茶話抄附錄……一七二
一壺中爐談……一七三
一和漢故事談……一七四
一一問故實……一七四
一露地淸茶規約……一七五
一吸江の齋號……一七六
一茶話眞向翁……一七六
一不言亭禪話……一七八
一珠光問答……一七九

一澤庵和尚茶亭の記……一七九
一茶道安心論……一八一
一又玄夜話……一八二
一茶禪同一味……一八三
△禪茶餘韻集……一九二
○附　錄
利休居士の悟道に付て……一九六

茶禪一味目次終

茶禪一味　前編

田中仙樵著

一　緒論

近頃、禪學の流行盛なりと謂ふ者あり。予其何の意味なるを知らず、其流行するてふ言葉さへ、甚だ奇しく思ふ程なれど。子細に考ふれば、別にあやしむに足らず。畢竟、科學の進歩は、哲學の發達を促し、哲學の隆盛は、宗教上の疑問を哲理的に解釋せんと試むる者を續出せしめ、從て宗教中、特に不可知的の禪宗は、其教義に於て、到底學者の窺則すること能はざるものあるが故に、競て此門に蝟集するに外ならず。然れども予を以て之れを見れば、眞正に禪風盛なりと云ふにはあらずして、禪を口にする、所謂ひやかし者多きに過ぎず。元來禪とは、實驗的法門にて、書籍や言句を以て擧示し能ふ可き性質のものにあらず、晉座禪の法に依て實修し、以て自得すべきのみ。座禪の法は、普勸座禪儀、座禪用心記、六祖檀經杯讀む時は、其如何なるものなりやを

知ることを得、禪宗の道場に於ける、宗匠に接する消息法式等は、百丈清規一見するも了知することを得可し。或は又公案の解釋法の消息を知らんと欲せば、佛光錄、臨濟錄等の提唱を聞きて、多少這般の樣子を窺則し能ふものなり。近來禪學と名づけて、如何にも一讀、大悟し得る妙法を傳ふる如き書、汗牛充棟も啻ならずと雖も、畢竟以上の書物抔の講釋に外ならず。予是れを一讀する度に、世に不親切の者多きを感せざるはなし。禪とは曩に述たる如く、修す可き法にて讀み、聞き、習ふ可き法にはあらず、故に只禪の宗門は實參實究の外、決して他に傳法あることなし、然るを通俗禪とか、平易禪とか、特に文字禪抔唱へて、文字を以て禪を傳へんとするものありと雖も、是れ人を僞るに非ずんば、自ら禪の禪たるを知らざる野狐たるを斷言して憚らざるなり。寔に禪は、人を愚弄するに都合よき法なり、隨分遁辭も多き宗旨なり。人あり佛を問ふ。忽ち一掌其面を喰はす。痛を忍で禮拜す。掌する者其意を知らず、禮拜する者も亦其何の故たるを解せざるが如き場合屢々之れあり。而して玆に他を顧て曰く、以心傳心敎外別傳なりと。咄々かゝる輩を指して野狐禪の徒と謂ふ。近頃此流行の輩を以て充滿す。予は斷じて云はんとす、禪を以てかゝる弊害多き翫弄物と成さしむるは、其罪賣禪の人にありと。禪は書籍言句を以て賣る可からず、買ふ可からず、宜しく一切實參實究によりて工夫し、一と先づ身心脫落の大禪定に入りて自得す可きなり。夫れ然り。而るに玆に禪書を編むの理由は甚麼、曰く、予の玆に論ずるものは、決して禪を傳へんとの目的にあらず、禪學の理論を解釋して、現今の哲學と背馳するや否を判じ、彼の學者が禪を目して一の意識作用とし、更に宇宙の哲理に合せずと稱ふものに、聊か答へんと欲するのみ。而して禪を實地に修する便法としては、古來風雅の道として傳はる、茶道の法を以て之れに配し、俗人の爲めに窮屈なる座禪に代へしめ、聊か前半に於て禪を理論的に證明し後半に於て茶を禪的に修せしめ、究極二者合して一味となり得可くんば、學者をして茶道研究の趣味を發意せしめ、遊藝として埋沒せる茶道を、玆に復活するを得可きにはあらずやとの老婆心より、是れを茶禪一味と名づくるのみ。

一　哲學と佛敎との關係

吾人の仰で見るところ、俯て考ふるところ、無意味に看過すれば夫れ迄なりと雖も、之れを子細に疑ひ來れば、悉く是れ疑問の種ならずや。學者は忽ち答へて謂はむ。天體は之れ現今天文學の

進歩によりて、其原始より運行の法則に至るまで證明せられ、地上は是れ動植物地文地質の諸學之れを講究して餘蘊なきにあらずや。宇宙の間夫れ何物をか疑はむ。たとひ、今日疑問とす可き點あるも、明日は科學の進歩を待て、忽ちに氷解す可きのみと。然れども、此輩は未だ疑ふ可きを疑はず、究む可きを究めざる、所謂井蛙の管見のみ。古來如斯學者多きが故に、茲に少しく宇宙の疑問を摘指して、其反省を促すの必要あるなり。

疑ふ可し、吾人の過去を、未來を、又現在を、吾人は何れより來りて何れに去るか、問旨は父母より生じて墳墓に去るの謂にあらず、吾人の靈魂の去來を謂ふなり、禪的口調を以て謂はゞ、汝の生れぬ先の親の顔を見たりや否や、其死し行く先は何れなりや否や。疑ふ可し、吾人眼前の世界を、吾人眼前の現象は、是れ果して虛なりや實なりや、若し之れを實在と假定すれば、何れに生じて何れに行くや、或る宗敎家は、直ちに神の造る所と謂はむ。然らば神の存在を之れを如何にして知れるや、又其神は如何にして生じたる乎。疑ふ可し、吾人は何故に社會を存し、而して其社會を維持するに、道德の法則を守らざる可からざるか、學者或は之れに對へて謂はむ、社會の必要上而かくせざる可からざるなり、所謂方便のみと。然れども何故に其人爲的法則は、世界符節を合して行はるゝ乎、又其賞罰、何ぞ夫れ正しく行はれて漏れざるや。以上の三疑問は、古來種々なる解釋を以て迎へられ、今日に至るも未だ歸一せりと謂ふ可からず。學者互に爭ひ、宗敎家各〻相鬪ふ。畢竟此疑問の解釋を異にするに起因す。其狀恰かも百鬼夜行を演ず。若し夫れ誰れか大偉人物の出現して、一大解決を與へば、白日東天に上りて迷雲茲に晴れ、眞如の明月皎〻として、群星光を失するに均しく、百鬼の醜も忽ちに退散す可きものを。

如上の疑問に對しては、哲學語として、之れを、宇宙觀、人生觀、倫理觀と云ふ。而して此解決を與ふ可き任務は、實に哲學者宗敎家の責任にかゝれり。世の宗敎家哲學者は、宜しく宿積の迷夢を醒覺して、萬代不易の眞理を悟り、快刀乱麻の斷案を下さゞる可からず。徒らに雲を攫み、影を捉らへ、囈語を吐き、迷信を抱くが如きは、所謂一盲衆盲を導くの譬に均しく、社會の進歩を妨げ、害有て益なきものと排斥せらるゝに至る可し。夫れ如斯、職責を有する哲學者と宗敎家とは、相互に提携し、科學者とも並行せざるべからざるに、二者共に科學を非認し、互に駁論するが如き有樣なしとせず、然れども既に廿世紀の科學は、到底一片の空論を以て非認すべくもあらず、必らずや、哲學及び宗敎は、其基礎を科學に採て建設せざるを得ず。科學に背馳せる宗敎

は、所謂迷信宗教たる邪教にして、科學を否定する哲學は、既に社會に存在を許さゞるなり。故に曰く、科學と哲學と宗教の三者は、相互に接續關係して、暫も離るべからざるものなり。決して矛盾あるべらかずと。予の宗教を論ずるに當て、特に哲學を引證して其說明の材料とするも、蓋し論據を玆に酌むが故なり。古來禪を以て、佛教より除外せんとする者無きにあらずと雖も、是れ他の佛教と同一理論を以て解釋し能はざるに起因す。

予の所見によれば、禪も亦凡ての佛教に背馳せざるのみならず、眞理は以て、他宗派に超然とし、是れを研究して最新哲學に符合し、之れを實地に修しては安心立命を得、實に世界宗教の首位たるを信ず。以下神秘を漏らす所三十捧敢て甘受す。

一　佛教と一元論

古來哲學として研究するところ、其種類甚だ多しと雖も、究極するに、一元論と二元論のみ。其內容は神心物の一元、物心物神の二元に分岐するも、其以外には說ある可からず。近來唯物唯心等の一元論、稍吾國に迎へらるものゝ如し。然れども、其所說古人の糟粕にあらざれば、即ち燒き直しのみ、更に創見と認む可きものなし。予の玆に紹介せんとする一元論と、亦二千有餘の星霜を經たる、最陳腐に屬する佛說なり。然れども吾人は、決して羊頭を揭げ狗肉を賣るの學問的詐欺師にあらず、故に、自己の創見なりと皷吹する膽力を有せずと雖も、佛教徒の多くは勿論、他の哲學者の佛教を視ることの誤解多く、全く佛教は、科學と哲學を無視すると考ふるが故に、玆に釋迦の骨髓、忌憚なく解剖して、佛教の所說、殊に禪宗の教義は、上宇宙の眞理に叶ひ、下科學の最新步せる說と合し、之れを倫理に應用して悖らず、宗教として能く解脫を與へ、安心立命せしむることを、自己の所信に基きて證明せんと欲するのみ。然れども、豫め注意す可きは、予の所說は、或は佛教の所說と矛盾するの觀あること是なり。否。佛教家特に禪派の徒は、擧て之れを否認し、外道なりとて採用せざる可し。元より禪は修す可くして解す可き法門にあらずと雖も、第二義に下りて之れを哲學としては解說し難きにはあらず。故に之れを、禪學或は禪宗哲學と稱へば可ならむ乎。如何に之れを修するも、理論に合せざる宗教なれば、既に哲學上に建立する廿世紀の宗教にあらず。禪は既に、之れを修して頓悟の法門となり、是れを哲學的に解して千古不滅の眞理として信ず可きが故に、玆に潛越を辭せずして布演する所以なり。斯く佛教の眞

理を、哲學として露出すれば、大に宗教の價値を損ずるに似たり。如何にも斯くては、佛像を莊嚴の須彌壇上より下して、其金質を分拆するに均しき感ありと雖も、予は佛教所說を不可思議的神秘的に附するを快とせず、禪を以心傳心に密封するを、却て不忠なりと信ずるが故に、玆に啓發的に說明せんと欲するなり。

吾人の玆に一元論と稱するは、唯心的一元を指すなり。故に唯物論を破るなり。然れども其唯心の所說たるや、舊式の唯心論、即ち、心の外に何もあるにあらず、物が實在せりと思ふも心の現象なり。物が決して實在するにはあらずと云ふ抔の陳腐說にはあらざるなり。物質は物質として其實在を認めつゝ、而かも唯心なりと謂ふ、聊か古來の所說に異なる感あり、是れが果して佛說なりや否やは後に論ずる所を待て識る可く、縱しや萬一、佛說にはあらずとするも、予の佛教、特に禪學の眞理と認むるは玆にあるを如何せん。

一　佛教的物質觀

夫れ物質の存在は是れを否定す可からず。又物質の不滅をも否認す可からず。何となれば、廿世

紀に於ける科學の立證は是を打破し得ざればなり。既に物質の存在及不滅を認めつゝ、而かも唯心論を說く、既に相容れざるの觀念にあらずや。曰く然らず。此反問に對しては、吾人は先づ物質の本體、即ち物質の過去を說かざる可からず。現在目に見え、手に觸れ、活動し、成長し、凝て山河となり、集て大地となる物質と、目に見えずなりたる物質の變化せる狀態と、物質の現出し來りたる以前の本體とを區別して認めざる可からず。物質の過去、現在、未來に於て、幾度其形態を變ずるも、尙是れを指て同一の物質と云ふことの不當ならざる事、恰かも、後に詳論せんとする靈魂が、現在の靈魂と、未來及過去の夫れと同一なりとは云へ、現在、此痛痒寒暑を感ずる靈魂と、未來の幽界に去れると靈魂とは、狀態に於て變化ある可きは、何人も疑を容れざる所にして、而かも靈魂不滅なりと說くと、其間に何程の差がある。更に反面より觀察して、同一論鮮を以て之れを云へば、吾人は靈魂なるものゝ存在を認め、且つ其不滅を認む。而かも現在に於て思慮し想像する此心靈と、過去に於ける心靈、即ち此精神の前身と、此靈魂の未來、即ち此肉體の朽ちて後の靈魂とは、同樣の有樣にはあらざる可し。何となれば、現在の靈魂は肉體を有するが故に、能く苦痛を感じ、眼は見、鼻は臭ぎ、舌は味ひ、耳を聞くを得と雖も、此肉體を脫した

る霊魂は、如し斯作用を爲さざる可し。而かも、過去の霊魂が現して現今の吾人となり、去て未來の霊魂と變化するも、過去、未來、現在と、霊魂が一貫終始、同一本體なれば、之れを霊魂の存在霊魂の不滅と稱するも、何等の沒理あることなかる可なり。扨て以上の物質觀、霊魂觀にして誤なしと假定し、前提して、次に其去て變化せる物質と、依て來りたる物質の本體と、去て變化せる魂霊と、依て生じたる霊魂の母體と、偶然にも同一母體に生じたる雙子にして、同一家に歸る可き性質のものならんには、予は是を分身の兄弟、即ち其源始も一にして歸屬も一、一歩進では現在身とも不二、哲學上の學語を以て謂へば、是れを一元論なりと名くるも、敢て牽强附會の臆說にも非ざる可し。果して然らば、此二者の關係、全く一體なるの立證責任を有す　請ふ次第に之れを解かむ。

現今學者の說く所の物質論を觀るに、予は其眼孔の狹少なるに驚かずばあらず。其所說悉く相對を基礎として、限界的即有始有終の實在中に座して、萬象を判斷するが故に、例令物質の無始無終を說明するも、現在の物質無始無終を想像するに過ぎず。語を替へて之れを謂へば、物質は到底有形的ならざる可からず、有形より無形に入ることを想像し得るのみ。故に物質は幾百萬分

するも、分子を幾萬分するも、元素は委然として存在し、肉眼或は顯微鏡に影せざるに過ぎずして、矢張物質として現在すと論ずるに外ならざるなり。故に元素の依て生じたる根元なる物質の依て來りたる本來の面目を知らず。良しや一二の學者は茲に考慮を回らすことありとするも、形而上の學は既に科學の領域を脫するものとして、元素の無始無終に說を止むるものならん。然れども最近の科學者は、理論上かゝる不合理を墨守するを欲せずして、進でエーテルを論じ、ラジームを發明し、エネルジーを考究し、今やエネルジーは物質を造る母體なることを說明するに至れり。ラジームは元素の元素にして、物質の一元を證明し、更にエネルジーは既に物質には非ずして、ラジームを造るの力なりと謂ふ。力より物を生ず。物の前身は力なりとすれば、勢ひ唯物論は進で唯力論たらざるを得ざるなり。かゝる說は科學者に依て唱導せられ、哲學者の容るゝ所となり、滔々として今や宇內を席卷して、物質論者をして顏色なからしむ。而るに何んぞ知んや、かゝる眞理は、既に業に三千年の以前釋迦の發見する所となり、千古不滅の議論として觀破せられ居ることを。予は曩きに廿世紀の宗敎としては、科學哲學の上に建立せるものならざる可からざるを謂へり。夫れ然り、玆に說明せんとする佛敎、特に禪學上の眞理に於ては、決して以上の

唯力論を根本的に排斥せざるなり。否寧ろ教理の根本は玆に存するとを識らざる可からず。然るに却て佛教家は是れを自覺せずして、斯の如きは外道なり、第二義なり、哲學上の戯論にして宗教上の眞理と全く沒交渉なりと。平然遂に功名を他に奪ひ去られんとす。燈臺は夫れ本の暗きもの乎。

一　エネルジーと四大説

看よや經典を、何れの佛教を問はず、四大を説く。四大とは、地水火風にして、地水火風は物質を指す。是れに空を加へて五大となす。畢竟四大の物質變化の循環を示すものにして、空は其物質の歸着を謂ふなり。換言すれば物質は滅して空より更に物質の生じたる理を示すに外ならず。是れを常住壞空と云ふ。常住とは物質の存在を謂ひ、壞空は滅却して空に歸するを示す。蓋し佛教の所説は如斯、而して其空の本體こそ更に研究を要する一大怪物たり。空！。空と無とは全く別物なり。無より有は生ぜず、物質の出で來る空、其空は決して無的空にあらず。眼是れを看ること能はず、手是れに觸るゝこと能はず、而も一種の魔力あり、電氣の如きか然らず、エールの如きか然らず。ラジームの本體乎、然らず。

勢力！　大勢力にして一種の力是なり。此力は無始來の存在にして無終の恒存物なり。空氣は十八里氛氣外に存在せずと謂ふも、此勢力は是れ宇宙間に充滿す。佛教此れを譬へて三千大世界に瀰漫すと稱す。而も此勢力は增減なく生滅なし。般若波羅密多心經に、舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色云々と説くもの是なり。

科學者は、エーテル、エッキス光線、ラジームるなものは、各能く物質を透射するの力ありと説くも、此勢力たるや尙是以上の作用をなす。即ち物質を創造するのみならず、其物質中に勢力は存在す。換言ずれば、此勢力の結合する所物質となり、勢力の去る所忽ちにして物質集合力を失ひて滅失す。例令ば草木の枯れて土灰となり、人間死して土化するが如し。佛教は是れを四大分離と謂ふ。又其物質と勢力と二にして不二なるを、心經に舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色云々。又引寄て結べば草の庵にてほどけば元の野原なりけりと。予は此空を名げて勢力と謂ふ。學者の所説エネルジーなる可し。名は實の賓なり何にても可なり。此勢力は、單に物質を生ずる元子の元子たるのみならず、其物質を結合せしむる魔力を有し、玆に草木國土乃至虫魚禽獸人間として活

躍せしむ。即ち草木に花を咲かし、禽獸をして叫ばしめ、人間をして意思を相通せしむ。其靈妙なる動作は、畢竟此勢力の發露なり。人間は是れを靈魂と稱す。人間の此活動を靈魂と名くるならば、獸の吼へ鳥の囀る。草木の花を着け實を結ぶ等、之れを靈魂と謂はずして可ならむや。人間の作用は多少完全にして、他の木草禽獸は機器の不完全なるのみ。其勢力の發露する點に於て何の差別か是あらむ。佛說是れを形容して、草木國土悉有佛性と謂ふ。又草木國土悉皆成佛とも稱ふ。此佛性又は成佛の義解は後に詳論す可き題目なるも、兎に角、物質活動の原理は玆に根據を有す。以上の勢力が、實に魔的作用をなすとこは、次第に是れを說かむ。抑も此勢力は、創造する者無くして存し、始めもなく、終も無く、不增、不減、實に相對を離れたる絕對觀なり。古來是れを造物師と名づけ、神と謂ひ、不可思議となして、到底吾人の思想を以て此以上を研究することを能はずとす。只不可知的とせん。其不可知的こそ即可知的なり。佛教に於ては種々の名目を附す、眞如と謂ふもの此本體に外ならず。此勢力のは草木國土を生み、之れを活動せしめ、叫ばしめ、歌はしめ、舞はしむ。蓋し無より有を生じたるにはあらず。靜より動を起したるにもあらず。勢力は恒存なり。有より有を生ず。何の沒道理かあらむ。無形有形を現じ。有形無形に

入る。何の不思議か是あらむ。物質の元素更に元素に歸し、ラジーム終に勢力に歸するのみ。物質論者の所謂物は、幾百萬分しても物なりとの定義は、今や科學のエネルジー說の爲めに破られ、而て其エネルジー說は、更に佛教四大循環原理に依て、遠く證明せられし舊說たりしにあらずや。

一　六大と物質

說明の順序として、以下聊か佛教所說の六大を解釋せざる可からず。六大とは、地水火風空識是なり。佛教には是れを六大緣起論として說く。各宗派に從て、多少其見所を異にするも、六大の論理を否認するものはあらず。時に之れを四大五大と謂ふも、實は四大は唯物に流れ易く、五大も亦然り、六大說に至て始めて識の作用を謂ふを以て、玆に物心一元の哲理を證明することを得るなり。其物心一元の本體を指して、一如、如々、眞如、法界、或は大日法身抔、千種萬態の形容を附す。佛道の行者は、須らく先づ是れを看取するを要す。禪道の修業も亦、此境に同化し假りに死境に到るを試む。之を大死底の境とも、又涅槃の境に到るとも謂ふ。

予の佛教觀は以上の如くなるも、同一佛教中にも、俱舍論の如き物心二元を立て、一の業因力を其

根本に立つるものなきに非ざるも、畢竟是小乘にして、物心二元を打破して一如的に至るものにあらずんば、其實大乘佛説として、釋迦の眞理と觀る可からず。即ち物質の有を説くも不可、無と説くも斷見に墮す。各外道の邪説とす。眞如の實在を認めて以て中道の實相とす。倶舍論の如きも實は全くの二元説にはあらず。其業因力なる一種の作用を認め、其業因力は以て物心を創造すると云ふに至ては、其理論大乘の一元に歸す。畢竟方便的の所説と解して可なり。予は大膽にも、佛教は其の所説、大乘小乘の別なく、其眞理を同一にして、只所説の方便を異にするのみと斷言せんとす。本書禪を中心とするにも係らず、殊更に禪のみに偏せざるは、蓋し禪は禪として凡ての佛教々理を排斥す可き性質のものにあらず、否寧ろ悉く其教理を研究するの必要あるを以てなり。只禪家の宗匠たる者、教相上に工夫を求むるは、修行上に有害無益なるを以て之れを嫌忌するのみ。

夫れ物説は一元たり、然れども時に二元を説くとあり。是れを有爲法と名づけ、或は極端なる唯心論に傾く所説あり。之れを無爲法と謂ふ。二者共に偏見たるを免れず。倶舍の如きは此偏見に座す。即ち現在は有爲即色を以て説き、過未を無爲即心を以て解せんとす。されど是れ佛教解釋

の楷梯として、止むを得ざる所説と見る可く、大乘に至ては、天台、華嚴、禪の區別なく、均しく事々無碍、事理無礙の理を説き、物心一如　色即是空を觀破す。佛教に於ける物質觀は、以上の如く夫れ現實的なり。實在的なり。而かも唯物論にあらず、唯心論にあらず、二元論にあらず、實在にして而かも空なり。空にして而かも無ならず、一種の力的實在なり。力とは何ぞや。眞如なり、法相なり、法海なり、阿賴耶なり、識なり、大日なり。其力の働きの方面より見て、阿賴耶と名づけ、業因力と稱ふ。又其の實在の方面より、之れを法海、法相、眞如等と云ふ。通俗的に之れをエネルギーと名づくるも可なり。

一　物質の本體

是より更に、歩を物質界に轉じて、其本體を究めむ乎。吾人の眼耳鼻舌身に感觸する物體は、果して一の眩覺なりや、將た又實在なるやの疑問は、既に現今更に研究の餘地あらず。何となれば此現象は實在なり。夢にもあらず幻にもあらず、眞實なり。かゝる證明は哲學者を待たずして、科學の能く立證する所たり。佛教者亦之れを否認す可きにあらず。特に倶舍論の如き然り。科學

者又物質の不滅を説明して曰く、物質は、たとひ幾千萬分するも、終に、原子に達して止まざるのみと。科學者の研究範圍に於ては然らむ。何となれば夫れ以上に渉る時は、科學の域を脱して終に哲學的領城に侵入するを以てなり。然れども、最新科學者は其研究の結果、終に力的作用を認めて自己の領域とするに至る。ラジーム説エネルジー説の如き是なり。佛教の如きは、同じく物質の不滅をも説き存在をも認むと雖も、殊更に物質と名づく可き物と、勢力と云ふ物質の本體たる無形物の間に區別を認めずして、直ちに色即是空と解す。予は如斯物の存在を認むるも、其物の本體は勢力なり。心魂なり。不可思議なりと謂ふ。普通の二元論者は、玆に物なる永恒の存在物ありて、其他に尚一の造物的作用即ち神の存在を認めて、恰も人形師が人形を造るが如く、土は人形と現し、破壞して原土に歸し、始終循環して、其物質の恒存を説くも、蓋し之れ大なる謬見にして、世に人形師なるものあることなく、土なるものあることなく、又人形なるものあることなし。本來はの力的作用のみ。其力的作用が、土と現じ、人形と現じ、活動して吾人の眼に見ゆ。是れを譬へば、尚力は濕性の如き乎。濕氣は眼是れる見ること能はざるも、水と變ずる時は形態を具す。更に動を起して波となれば、以て或る作用を爲すに至る可し。本來は一物にして三者各別の物にあらず。佛教の所説中、天台宗の如きは、此力的作用を眞如とし、眞如は濕性の如く、心は水の如く、物は波の如しと説く。予の譬喩と大同小異其謂ふ意は一なり。色即是空空即是色と云ふも尚同一なり。蓋し凡ての佛教は説を玆に一致す可きなり。豈獨禪宗のみ此論理に反せんや。參禪の徒かゝる論理に妄念を驅らるゝ時は、所謂禪定を得るに難しと雖も、大死一番實究す可き玄海は玆にあり。今一層平易に之れを解釋すれば。物質は一の勢力の化合物なり、勢力化して物質となれるなり。勢力の他に物質のあることなく、物質は畢竟勢力の眼に見ゆるものなり。恰もか濕性集て雲となり、冷却して雨となり、洋々として注で大海となり、怒濤を起して岩石を碎くに至れるに均し。夫れ斯の如く、物質は勢力の固なり。勢力化して物質となりたるが故に、物質と勢力の二者並存するにはあらず、勢力と物質二にして不二、物質は色勢力は空、空即是色、色即是空、波即是水、水即是波、水と波とは別物にあらず。禪定百年たりと雖も、即身即佛の理、此意義を度外して他に求む可からず。されど注意す、禪は境を得るを以て目的とす。かゝる理屈を念頭に浮べては成佛するに難きを。

一　物質の靈動

説明の順序として、茲に物質の活動する大原理を説明せざる可からず。然らずんば、世人の多くが夢想せる、心靈は活物なるも物質は死物なり。死物を以て造れる人形に活靈を容る故に活くるなり。一度物質破滅すれば、忽ち靈氣遊離して所在を異にすとの論を打破すること能はず。古來哲學者、宗教家、悉く皆惑へり。獨り佛教の主義に於て、其誤謬に墮せざりき。殊に、禪定に依て得たる見界に從へば、打成一片、本來の面目に歸還するの自在を得るは、蓋し此理の實證なり。夫れ物質の活くるは、畢竟其根元活動せる勢力の結果なればなり。勢力化して物質となればとて、活動力を有する勢力が死物となるものにあらず。物々皆活く可き筈なり。抑も、勢力卽ち、眞如は宇宙に恒存する作用にして、其作用の一種として自動力を有す。換言すれば、勢力は自動を常になさんとするものなり。未だ物質として凝結せざる以前に於ては、其自動力を認むるに、立證の方法因難なりと雖も、勢力より生じたる物質が活動するを見て、其勢力の自動作用を有するを知る可し。是れ恰かも、地球或は大陽に引力なる力の存することの立證因難なるも、物の墜落するを以て之を證し、天體の運行するに因て其引力あるを知るが如し。斯の如く勢力は、自動力を有す。而して其自動力は種々たる靈妙不可思議なる作用をなさしむ。卽ち勢力の凝て人間となるや、意識として情的作用を呈せしめ、禽獸草木と變ずるや、各其特殊の作用をなさしむる類是なり。佛說、是れを阿賴耶識と別名す。蓋し、勢力の本體を眞如とすれば、阿賴耶識は其作用のみ。別に二物存在するにはあらず。然れ共、其不可思議作用と、自動力とは混ず可からず。自動とは、動靜の動にして、靈妙作用とは、活殺の活の字に當る。斯の如く、勢力は、活動作用と靈妙作用とを有す。故に、凝ては物質となり、散ては勢力に還元す。還元しては、永く潛勢力として活動し、集ては、物質として顯勢力として活動す。豈又不可知的作用ならずや。かゝる理は、天文學者、既に立證するに庶幾し。曰く、太陽先づ生じ、皮層散じて地球となり、月球となり、星辰と化すと。是れ眞理なり、事實なり、然ども、太陽は何れより生じたるやは、科學者の說明完全ならず。太陽として熱の生じたる以前は未だ說を聞かざる所なり。又太陽が自轉を始めたるは何故なるや、嘗て詳說あるを知らず。然れども、予は是れが解釋を與ふるに勢力の自動作用を以てせんとす。卽ち、自動作用によりて、凝て氣體を生じ、其氣體は自動作用によりて熱を生じ、熱は液體となり、液體凝結して固體となりたるなり。佛說の地水火風空の五大は、蓋此順序を說明せるものなり。科學者も亦謂はずや、地球、月界の、太陽系と分離せる時は未だ液體的のものなりしが、其表皮冷却して、茲に始めて、固體となりた

るなりと。予も亦此說を容るゝと同時に、以上の所說に符合して相背馳せざるなり、疑ふこと勿れ、勢力の物質と化するを、疑ふこと勿れ、勢力の自動作用を、疑ふこと勿れ、物質の更に勢力に還元するごとを。

一　物質の自存力

緣に應じて色と現じ、空と滅すること、恰かも電光石火、忽ちに生滅するが如し。然れども、物質の勢力より生じ、更に勢力に還元するの狀は、吾人、有始有終的の思考力を以てすれば、餘程の長時間を要するに似たり、されど、宇宙の絕對觀を以て之れを見れば、石火電光の一瞬間たる可し。彼の朝に生じて夕に死する蜉蝣を見ずや。彼れの終生たる十二時は、吾人の六十年間に價するに非ずや。吾人の終世たる六十年を、宇宙の絕對より觀れば、又復た斯の如きのみ。物質の生滅夫れ以上の如く速かなりと雖も、物質は、一度茲に生ずるや、更に緣に因て自存する性を有す。學者此の一端を以て、直ちに物質の不滅を云爲する所なり。されど、這は大なる誤謬にして、人形師の人形を造るや、其人形壞する時は、更に其土を以て、再び他の人形を製造するにあらず、土は終に勢力と

消へ終る。新たに人形を造るには、更に勢力もて土を造り、而て後人形を造るなり。曩の土と今の土とは別なり。かゝる觀念を根本的に會得せざれば、終に唯物的に流れ、或は二元論を立つるの止むを得ざるに至る。豈是れ佛說ならむや。又夫れ眞理ならずや。宜しく眼光を宇宙に放つ可し。宇宙は實に廣大無邊にして絕對境なり。其空間に羅列する辰星中の一點光を、地球なりと稱し、吾人の世界なりと誇る、豈大洋中の一孤島にも比す可けんや。其地球の表面に座して、宇宙の大部分は地球を以て滿されたるが如く考へ、自己に都合能き常識に任せて宇宙を解せんとする、唯物學者の眼光も亦狹小ならずや。又有始有終の相對觀を以て、其物質の本來を窮る能はずして、止むなく物質の存在を永恒なりと斷定する二元論者も亦哀れならずや。然れども、玆に實に奇妙なる道理が行はるゝことに注意せざる可からず。勢力凝つて物質となるや、其物質は可成的永久に存在を求むること是なり。是れ蓋し、科學者始め哲學者の大部分が、物質の恒存を夢むる原因なり。物質は夫れ永久に存在を求むる性質を有す。否物質自體にはかゝる性質あるに非ず。他の作用、即ち因緣の力は以て物質を其まゝ他に利用するを以て、物質は永く留まりて形狀を具するなり。證言すれば、物質は因果律の支配の本に集散するものなるが故に、其律にして行はれずして

止まんか、物質は終に物質として存在すること能はずして、終に勢力に歸らざる可からず、然れども、一方に於て勢力より生ずる物質あるが故に、物質が不增不減の如く見ゆると雖も、實は生滅時なく行はれて、其分量に於て常に同數量の感あり。されど子細に之れを測度するときは、必らず其分量に於て增減するものなりと謂はざる可からず。見よや吾人の身體は、或る緣によりて之れを子孫に傳ふることある可しと雖も、若し吾人何等の困も無く緣もなくむば、子孫として傳はる可きものなくて、玆に一段我と云ふ物質は終を告ぐ。肉體は終に元素に還り、元素は更に勢力に歸せむ。されど時として、別の困果關係は、吾が死體を支配することありて、猛獸の爲めに食はれて猛獸の肉體と化して存在することもあらん、草木の肥料となりて永く樹木となりて存在することもあらん。かゝる因果律が行はれて、物質が物質として循環して止まざることあるも、直ちに是れを以て物質は恒存なり、永久の自勢力を有すとは解す可からざるなり。何となれば、色は常に色として相續することあるも、亦空に歸することもあればなり。佛教語を以て之れを壞空と謂ふ。佛教に於て生滅と謂ふ字義は多く此意味に用ゐられたり、生とは、空より色の顯はれたるを指し、滅とは色が空となるを謂ふ。然れとも曩にも度々注意せる如く、生と謂ひ滅と謂ふも、

決して無より有の生したるにはあらず、空は實在境なり、無にあらず、色と現ずること、決して不思議にはあらず、是を通俗的に說明すれば、勢力は無形なり、空なり、而かも實在なり、畢竟勢力は物質の母にして、物質は勢力より生ず。佛教に於て不生不滅と云ふは、物質の不生不滅を指すに非ずして空を指すなり。其空が不生不滅なるを謂ふ事にして、勢力恒存の理を示すなり。然るを、佛教家にして、往々此理を悟らず、二元論に墮すもの多し。以上は說明上、便宜の爲め、平易に斯くは述べたるなれど、禪的に之れを謂へば、實は勢力と物質の二者ある可からず。生滅の事ある可からず。物質即勢力、物質と勢力は二にして不二、色即空、空即色、生死解脫の理論、抑も玆に理を酌む。

一、物質と因果律

夫れ物質の恒存力を有するは、一定の因果律に支配せらるゝものあるが故なり。因果律は、物質も、勢力も、皆一樣に之れを支配す。勢力の化して物質となるも、物質が物質として存在するも因果律なり。即ち、因果律は有形無形の上に行はる。其次第は、因果を論ずる機會ある可きを以て、後に

了解するを得可し。即ち物質が永久存在を求むるの性あるは、畢竟するに、此因果律物質を支配するが爲なり。因は果を生じ、果更に因となる。因果相續止む時なしと雖も、因果の關係は緣の結ぶ所となりて、連續するものなれば、其所一緣度茲に失すれば果はを因生せずして止む。此の時に於てか、物質は既に物質として存在すること能はざるなり。是れを實際に考ふるも其然るを知らむ吾人の人間といふ因は、或る所緣に從つて子孫といふ果を生ずる、或る事情の本に緣無きに至らば、茲に因果の相續絕斷せざるを得ざる可し。凡ての質物も亦又如し斯、されど吾人の目劇する如く草木禽獸、苟も現在する物質は、其有情となく、非情となく、其上に因果の運行絕へずして、次第に繁殖複雜に趣く如くれ丈け、緣は絕へず、因と果を結ぶことに勉むが故に、一度生じたる物質は、吾人の想像の及ぶ範圍に於ては恒存するものなり。是れを物質恒存の法則とす。誤解すること勿れ、物質は太始より物質として存在し、集散離合のみ是れ事とするものに非ず。物質は必ず勢力より生じて勢力に歸するものなり。只其道中に於て物質が他の因果作用の爲めに存在するのみ。因果の相續絕へて忽ち空に歸す。されど注意す、物質壞空の狀は、忽焉として滅するものに非ず、其の生ずるや幾千萬年を經て來るあらん、其滅するも或は同時間を要せん。生じつゝ

あるもの活くるなり、滅しつゝあるものは死せるなり。

一　草木國土悉有佛性

更に、茲に佛說の、草木國土悉有佛性なる文句を借り來て、物質の活ける理由を述ぶ可し。佛敎に於ける佛性の義は、是れを種々の解釋を爲し得可しと雖も、かゝる解說は之を措き、予の見界を以てすれば、佛性とは佛になる性質、即ち佛になる種とは、元の勢力に歸するを謂ふなり。平易に謂へば、草木國土は佛になる種を有す。即ち之の勢力に歸還するものなりとの義に外ならず。何等の有難き言葉にもあらず。草木國土悉皆成佛と謂ふも同一の義なり。若し夫れ、世間是れ以上の解釋を與ふるならば、只語の形容に過ぎずと知る可し。成佛の義既に然りとすれば、何時に於て成佛するか。曰く。物質の活動茲に靜止すれば、既に靈動作用茲に止む。否物質は活きるが故に物質として存在す。物質にして活動力を失へば、直ちに物質たる形を失ふて、元の勢力に還るものなり。只直ちにとは謂へ、千歲或は幾萬歲をも費やして還元することあらんも、這は宇宙の絕對時間より打算すれば、吾人の一瞬間の生滅なる可きは

既に是れを述たり。物質動靜、其理甚だ複雜なりと雖も、之れを要するに、物質には必ず自動力伴ふものなり。只各其位に住して活動するのみ。譬ば人間の人間として活動するは呼吸期間を指す。されど、物質の活動法則よりすれば、再び草木の肥料となり、禽獸の飼食となることあれば永く此世に活動するの時ある可し。是れを第二の活動期と名づけん。佛教に於ける成佛の義は、予の所謂る終極の還空にあらずして、其第一期の因緣を離れたる時を示す事多く、未來の再生を說くは、第二期に他の物質として留まる形變物を指す。世俗行はるゝ三世相と稱する書に、人間の過去を種々の木火土金水に比して、山の土、途の草抔取り留めもなきと記すれど、這理の消息を譬喩を以て漏らすと見れば、又多小の眞理なしとせんや。

一　佛教の宇宙觀

宇宙とは何ぞや、曰く絕對世界を謂ふ。即ち吾人の跨れる地球を、恰も波上の一葉舟の如く世界は其乘せる大洋に均し。而かも大洋は地球の表面に極限せらるゝも、宇宙は限界なき絕對界を指す。吾人生來より今日に至る迄、地球てふ一の極限せられたる相對世界に住するが故に、絕對と云ふ想象は容易に自得し難しと雖も、實際に於ては、十を三にて除るすも割り切れざるの數あり、此の理を推せば、世に無限大の絕對境あるを立證し能ふ可し。又仰で蒼々たる天を望むも、其際限無きを目劇するに非ずや。佛教に於て三千大世界と形容し、數の無窮なるを恒河沙抔と名づくるは、何れも無限大を形容する語なり。苟も、哲學者、宗教家を以て自任するものは、第一義として此絕對觀を悟らざる可からず、此絕對世界の存在を認めざる可からず。然る後に非ざれば、到底眞理を談ず可からざるなり。

想へ、吾人の跨れる地球は、實に天界に一異彩を放てる、一の糟星に外ならざるに非ずや。心を地球以外に放ちて、宇宙を一瞥せよ、仰で大となし俯して廣しとする太陽地球、乃至月世界其他の星辰は、實に是れ大洋上の一孤島にも價せざる、一黑子點にあらずや。物質中に頭を挿入して、其研究に齷齪たる者は、物質を以て宇宙の大部分を構成するの觀をなす、斯の如きは、恰かも濟水に寄生せる微菌が、自己の周圍を以て宇宙なりと考ふるに異ならず。豈小天地を夢むるものにあらずや。科學者は、吾地球の、太陽系より分離せる以來、歷數を以て算す可からざるものとなし、太陽の光を失するの時も亦曆數を以て數ふ可からざるものとす。然れども宇宙の絕對觀、即ち有

始無終觀を離れて之れを見る時は、蜉蝣の旦に生じて、夕に死するの短日月を、彼れは永久なりと考慮するに均しかる可し。太陽地球の生滅も亦然り。嗚呼人間一生五十年、斯く考へ來れば、夫れ蜉蝣と何ぞ撰ばむや。是れと同じく、吾人は此雙手の掌を以て掩ふ可き大の、頭骨中に包藏せる腦力を以て、宇宙の眞理を自得せんとす、即ち不完全の腦力を以て、宇宙の眞理を探らむとする、夫れ難い哉。されど某博士の所謂神は人を最後に造りて、此一大著述を讀了せしめんと欲すとは眞乎。吾人は、此秘書を讀む可く眼鏡を附與せらる。明歷々として讀了すること容易なり。其法二あり、一は結跏趺座を以て一隻眼を以て觀るなり。又一は推理腦力の判斷に依るもの是なり。前者は禪を修ずるの外無きが故に、文字を以て一語を着するに由なし。寧ろ第二の法に依らむ。蓋し歸する所一なり雖も、安心立命を得る法門は前者に優るものあらず。請ふ實參實究、此秘書を讀め、吾れは以下第二義門に下りて宇宙の秘を啓かむ。

抑佛教に於ける哲學觀は、是れを宗派の上より見れば、其所說各異なるが如き觀あり。即ち、俱舍宗、成實宗、華嚴宗、天台宗、三論宗、法相宗、日蓮宗、禪宗等、實に多樣多觀にして、各自其所見を眞理として、互に相駁論すと雖も、予を以て是れを見れば、畢竟一にして、決して眞理に於て矛盾するものに非ず。唯其所說の方法を異にするのみ。即ち眞言の六大に重きを置きて眞如を說くあり、俱舍の現世界の實在を認めて、五蘊十二處十八界等の論に重きを置くあり、其他有爲を主張するあり。無爲を出張するあり。現象を說くあり。實在を說くあり。千態萬狀、恰も別宗教の如く然り。されど之れを子細に研究し去り、考案し來れば、是れを統一して、釋迦牟尼佛の一音聲に歸するを得、要するに實大乘の眞理に到達して、全く以上の偏執を離れ、中道の實相を看破する時は、玆に眞如の明月一切の迷雲を排せん。若し然らざらんか、單純なる一宗教としては、効力を有することある可きも、哲學的に佛教の眞價を顯はすべき、文明的宗教とするに足らざらむ。

子の觀る所の佛教は、其宇宙を論ずる最も精にして、古今の眞理を觀破し、最近西洋哲學の所說に符合す。即佛教には眞如の實在を說く。眞如とは何ぞや、曰く勢力即エネルギー是なり。エネルギーの宇宙に充滿する如く、眞如は宇宙に瀰綸して餘空あることなし。山河大地草木禽獸、悉く是れ眞如の發露なり。禪的口調の生れぬ先の親とは、蓋し是を謂ふなり。又眞如は、其作用實に靈妙にして、自動力を有するが故に、自ら物質となりて活動し、或は更に種々の靈動作用を與

ふ。佛教の八識と稱ふる作用の如き是れなり。八識とは、眼耳鼻舌身の作用を五識とし、第六意識、第七未那識、第八阿賴耶識是なり。八識の解釋の如きは、今玆に略す。普通佛書之れを詳解せざるはなし就て看る可し。其八識の作用中、殊に阿賴耶識と名くる靈動作用は、是れを宇宙の心靈とも稱す可く。或は大我とも名づく、此阿賴耶識は吾人の心靈と宇宙の心靈と共通す、禪學者の天地に參同すると謂ふは、畢竟此小我と、大我の同化せる境を謂ふなり。

佛教家、此識を以て眞如に對立せしむる者ありと雖も、是れ其本體を辨せざる誤解にして、實は眞如の働きに過ぎざるなり。八識以下の識の如きは、此阿賴耶より來る作用なれども、之を竊かに研究すれば、肉體なる物質の作用にして、直ちに眞如の作用とは見る可からず。佛教家特に禪家に於ても、六識以下を以て妄想なりとす。自覺す可きは宇宙の心靈なり。宇宙の大我なり。宜しく小我を捨て、大我に同化せよ。宇宙の心靈に歸りて永く生きよ。生死解脫の法門、此以外に是ある可からず。

一　因果の法則と宇宙

既に宇宙の勢力作用を觀たり。眞如の實體をも聊か研究したり。是より以下因果作用を說かむ。

甞て述たることあり。因果律は眞如の作用にはあらず、眞如は此因果律の作用を受くと。實に然り、宜しく眞如と因果とは是れを別々に考究す可き作用なり。

嗚呼釋迦一世の大發見は、夫れ此因果律の法則にありと謂ふも過言にあらず。因果の法則は單に眞如を左右するに留まらずして、宇宙の道理は悉く皆此法則に漏るゝことなし。是れを倫理觀を以て抽象すれば、後章述ぶるが如く、道德法則となり、物理的に說明すれば、科學の原則となるが如し。扨て因果は何れの時に於て始めて行はるゝに至りしか、此問に對しては、佛教は無始來の因と說く。即ち因果は無始終なり。因の因、果の果を求むるも、終に極む可からざるを謂ふ。斯の如き觀は、實に彼の絕對的思想を以て考究するに非ざれば、到底能はざる所にして、相對眼を以てすれば或は云はむ。是れ無始無終にはあらずして、人知の達せざるが故なりと。然れども是れ絕對境を悟らざる幼稚觀たり。因果の無始無終なるは以上の如し、而して其因果法則は甚麼曰く因果は互に相續して其終る時無きは、草木果實の互に因となりて窮極なきが如し。佛教之れを因果相續、又は其連續の狀態を看て、結鎖聯環と謂ふ。結鎖聯環とは、環狀のもの二あり、相

互に連鎖をなすが如きを、因果の連續に喩ふなり。因は因、果は果として二物なり。故にこの環球とす、相互に緣によりて連續す、然れども緣を離れては是を分離す可し。是れ又この環球あるが如し。譬ば玆に一の栗の實ありとせんに、此實は萠芽を生じて樹木となり、遂に果實を生ず。曩の栗は因にして後の栗は果、樹は緣なり。種子と果實とは別物なれども、緣によりて連續す。佛說に常に因緣果の三體を說く。蓋し此意味なり。人或は誤解して、因あれば必らず果あり、果あれば必らず因となると信ずるものあり。因ありと雖も緣なくんば果の發することなく、因果玆に絕ゆ。恰かも玆に生類あれば子孫と云ふ果次第に相續す可き筈なるも、所緣無くして止まんか一子を得ずして止む可きのみ。されど因は常に果を生せんことを求む是れ因果の特性なり。恰かも物質に自存の性あるが如し。否物質の自存力も、畢竟物質を支配する因果に相續の特性あるが故なり。夫れ然り因は常に果を得んと欲すと雖も、果を得るには須らく緣に椽らざる可からず。緣は畢竟偶然の出來事のみ、因に必らず伴ふものに非らず。俗に偶然の遭遇を因緣と謂ふも蓋し這般の解釋なる可し。因果の道德を如何に支配するかに就ては、予聊か腹案を有す。後に述ぶることゝせむ。

因果律以上の如しと前提して、聊か宇宙の因て生じたる所以と、其未來を詮究せんとす。抑も宇宙の因て來りたる所、其去る所甚麼、此大疑問に對しては古來一大快斷を下せるものあるを聞かず、先づ科學者の說を見よ。科學者は物質の存在を前提として、其太始に瓦斯を認め、次に火熱を生じ、飛散する所日月星辰なりと說き、其物質互に引力ありて自轉公轉の作用をなすと。其所說敢て不可なるに非ずと雖も、疑問の解決としては、他に幾多の未解決の問題を殘留す。即ち先づ、物質の存在を前提とすること、及び熱團は如何にして生ずるかを說かざるにあらずや。予は此問題に對して左の如く答へんとす。

曰く、勢力なるものは自動性を有す。即ち勢と動とは常に相伴ふものにして、動と勢とは一瞬間も離る可らず、動は勢力の固有性なり、勢力の潛む所動必らず是れに伴ひ、動の發する所勢直ちに是れに附隨す、勢力の靜かなる時は吾人の眼之れを見る能はず、手是れに觸る、こと能はずと雖も、自ら發する所の勢力は、即ち凝て山河大地となり、動ては萬物を活躍せしむるの作用を呈す。今顯勢力の一班を銃砲に試みよ。砲丸元より死物なりと雖も、之れを發砲すれば以て鐵板を貫く可し。何が故に一箇の鉛丸能く剛鐵を貫くか、只一の勢力なる無形の力只是れに敵するのみ、

然らば其勢力は何に依て起るか、只一の動あるのみ。動愈々急なれば勢益々急なり。動と勢の關係夫れ斯の如し。然れども此場合の動は火藥なる他動的の動なり。故に宇宙の理を是れに比す可からずと雖も、勢力に自動力あること、地球天體の自轉公轉の原始に遡つて考ふれば思半に過ぐるものあらむ。玆に注意す可きは、以上只勢力と謂へるもの、曩に所謂エネルジー、或は眞如と名づけたるものと、聊か趣を異にせること是なり。前者は宇宙に彌綸せる實體空を指し、後者は其潛勢力の發現せる抽象的の作用を謂ふなり。

科學者も尙如上の原理を否認せずして曰く、宇宙の原始は先づ活動して、始めて玆に空氣即瓦斯を生じ、此物質の活動は遂に熱力となり、液體となり、太陽地球月界と次第に分離せりと。佛敎の六大も、亦地水火風空識の順序とす。常住壞空は、物質の到來及還元を謂ふなり。科學者も亦天體地球破滅の期ある可きを說く、全く根據なき說にもあらざる可し。

以上の所說を約すれば、宇宙は一の眞如の實在と、因果の法則の支配に外ならず。換言すれば、眞如即勢力は因果の支配を受けて活動す。其活動に自動と他動とあり。其自動は終に宇宙の物質を創出せり、其順路は、勢力の自動に始まり、瓦斯即ち佛敎の風を生じ、熱之れに加はり、液體を變じて固體として、玆に現界の發現となれり。宇宙の物質は夫れ斯の如くにして來れり、而も動は益々盛なり。動の加はる所勢玆に集まり、勢の集合する所熱度を加ふ。而て熱は更に動の原動力となり、互に相循環す。即ち動は熱を生じ、熱は動を起す。動く所熱あり熱ある物必らず動く。熱度の冷却すするに從て動亦緩ならざるを得ず。動の緩なる所熱亦冷却す。科學者の曰く。地球の動くは地熱による、地熱は地の動に依て冷却せず、されど熱は種々なる事情の元に飛散して減退するが故に、動力自から緩ならざるを得ず、地球全く盡くる時地動も全く玆に止むと。夫れ然り、動力の盡くる所勢力玆に休す。勢力の潛む所物質空に壞す。即ち宇宙の物質活動を休止せば、眞如に還元す可きは嘗て屢々之れを說ける如し。然れ共、更に或る緣に應じて眞如の自動を始るや、再び物質を造る可し。物質の生滅は宇宙の自存と何等の關係なし。物質の生滅は幾轉變あるも、宇宙の宇宙たるは無始來より無際限に至る迄委然たり。宇宙は時間に於て永恒、空間に於て無量なり、佛說の生滅の根據は、其原理を玆に採る。吾人幾生死の循環あるも、我は宇宙と共に永久に生く可し。換言すれば、吾人の小我に幾集散あるも、宇宙の大我は、委然として存す。我等の未來は此絕對境なり。

動に一定の原則あり。古來學者の說かざる說にして、予の創說たるを憚らず。又佛說に何等の關係あるに非ずと雖も、聊か其是非を世の識者に問ふのみ。曰く勢力に二あり、顯勢力潛勢力是なり、此顯勢力は發して動となり、潛勢力は潛みて靜かなり。動に二の進路あり、左旋右旋是なり右旋は積極的動の行路にして、左旋は消極なり。進む。發す。飛ぶ等の動は積極にして、其反對は消極なり。請ふ是れを日月星辰の運行より、天然自然の作用たる風水電氣の活動を始めとして宇宙一切の事々物々に試みて、其眞理なるを悟る可し。

予は斷言す、宇宙間凡そ動く者の法則は以上の二作用に歸せざるなきを。其陰陽の螺旋に轉回する詳細の說明の如きは玆に論ず可き性質のものにあらず。只動を論ずるに際して、筆端岐路に趣けるのみ。又此眞理は現在世にもあれ、或は未來世にもあれ、豈一人の知己なしとせむや。

一 宇宙の心靈

宇宙に一大心靈ありや、蓋し千古の一大疑問なり。同じく宇宙に大心靈ありと說くものと雖も、其心靈の見界を各異にす。或は其心靈は吾人の意識の如きものなり、自觀して後是れを識る可しと。蓋し有神論者、無神論者を抽くこと數等なり。然れども心靈を吾人の意識の如きものなりと謂ふに至ては、蓋し大なる誤なり。此說は、恰かも法律上法人は人格あり。法人の人格は吾人に人格あるに均しと謂ふに仝し。而るに何ぞ知らむ、法人の人格は擬制的附與なるを。良しや或る論者の如く、法人に人格自然的存在すると假定するも、國家なる法人は吾人と同じく、喜怒哀樂の情あることなく、意識あることなきにあらずや。吾人の意識と宇宙の意識とは猶斯の如き乎。

次に、吾人の靈魂は吾人の意識と別なることを悟らさる可からず。佛教に於ても旣に第六意識と謂ふ。實際の靈魂は第八阿賴耶識なりとす。意識とは、喜怒哀樂を司る煩腦妄想に外ならず。明鏡臺裏の塵點に均し。かゝる妄想を除き塵點を拂ふて而て後、皎々皚々として明月の如く淸淨無汚のものあり、是れを實際の心靈となす。何等の作用をなすものにあらず、此靈魂と宇宙の靈魂とは、同一根元なり、母子の關係あり、否同一物なり。曩きに小我と名づけたるものは吾人の心靈にして、大我と稱するものは即宇宙の心靈なり。共に八面玲瓏なり。さりとて淨と名く可からず、垢汚と稱す可からず、心經の不生不滅不垢不淨とは此謂なり。佛敎は此吾人の心靈と宇宙の心靈と同化するを、涅槃とも、寂とも謂ひ、其境を淨土とも極樂とも形容す。夫れ、宇宙の心靈

吾人の心靈と同一體同一根なる者を說けり。されども、宇宙の心靈は吾人の意識の如き作用を爲すものに非ざるは、上來の說明によりて判斷することを得む。

即ち吾人の意識は、肉體と云ふ物質の反射作用によるも、宇宙には吾人の如く肉體に比す可き機關なし、尙吾人の心靈は肉體あるが故に宿ると考ふるは不可なり。吾人の心靈は、肉體の存不存に因て何等の影響なし、宇宙の存在せん限は無窮に存在す。是れ恰かも、籠鳥は籠の破滅によりて死するものに非ず、寧ろ廣大なる天地に飛躍するに均し、吾人の肉體と共に滅するは意識なり。是等の詳細は後に述ぶることある可し。夫れ宇宙は意識なし、故に宇宙に喜怒哀樂の感情なく、只一定の公平なる因果律によりて自動するのみ。活動するのみ、之れを是れ宇宙の心靈と謂はゞ云ふ可き乎。宇宙の心靈夫れ斯の如きのみ。而るを神を說き天を說く、名は實の賓たり其本體を見ること、果して斯の如くなりや否や、恐らくは予の心靈の如きものに非ざる可し。蓋し其說の來る根元は、因果律の行はる、法律と眞如の作用の靈妙なるを考究せざるに起因す。嗚呼宇宙本體は夫れ眞如たり。之れが作用は即ち心靈たり。吾人の根元又眞如たり。之れが靈魂亦宇宙の心靈と同根なり。同體にして同根の吾人歸する所夫れ其本乎。吾は故鄕に還りて永く梵天に生き死せざるなり。亦一大樂土ならずや。極樂淨土とは爰なり。西方十萬億土豈遠きに求めんや。

一　佛教の人生觀

吾人は何れより來りて何れに去るものなりや。是れ千古の疑問にして、凡ての宗教は此疑問を根據として起ると謂ふも敢て過言に非ず。基蘇督一派の宗教は之れを神の造るところにして再び天國に去て永く生くと謂ひ。佛教は前世より來りて、末來極樂淨土に去ると謂ひ、儒教は生を知らず何ぞ死を知らむと謂ふ。其神とは如何なるもの、前世とは如何なる所と詮究して行けば、千言萬語を闘はすと雖も、終に不得要領に歸す。さりとて儒教の如く、生死を知らずと遁辭的に說かざるも本意無けむ。請ふ暫く之れを說かしめよ。吾人の肉體は父母なる緣によりて生じたるには相違なしと雖も、其父母の父母は如何と次第に推究し、進化論者の說も容れ、生物論者の說も容るゝ時は、玆に猿猴時代ある可く、「アミーバー」時代もある可し。斯くて次第に其原始に遡れば、實に單純なる一物質に外ならざる時代ある可し。吾人は是等の科學家の說を是認せざる可からず、故に吾人の祖先は單純なる一物質たりしに相違なし、然れども其物質は如何にして活動

を始めたる乎。是原因に就ては聊か語を費さざる可からず。

吾人が我なりと名づけて、常に喜怒哀樂を逞ふしつゝある者は、抑も是れ何ぞや。猿猴時代にありては一猿猴、「アミーバー」時代にありては一の「アミーバー」なりしにあらずや。其物の向上したる今日より見て、吾人を萬物の靈なりと自尊し誇と離も、「アミーバー」時代の吾人として考ふる時は、一の無機物に髣髴たる一非情物に外ならざりし。斯く隔絶せる物に譬喩せざるも、吾人骨て竹馬の友として交遊せし者に、偶々相會することありとせん、其凡てに於て多少懸隔なき能はずと雖も、彼れは目に丁字なく吾れ少しく學ぶの差あるのみ。其幼稚の時代に於ては今日の田夫野人と何の差違ある者ぞ。實に吾人は、犬猿と兄弟なり、虫魚と姉妹なり、草本と從兄弟たり、博愛平等主義亦是より起る。

囊きに述たる如く、草木國土として現せる物質は、活動力を有するも、組織に於て有機物の如く、其機關の不完全なるが爲め情的作用を有せず。故に此點を比較し來れば、吾人と同朋たりとの語多少不可思議に聞ゆ。されど人間に賢愚の差別あるのみならず、甚だしきは白痴不具者にして多少人間に遠きものありと雖も、是れ吾人の同朋にあらずや。草木國土は吾人の同族としては血緣

遠きのみ。

吾人は自觀して以て我なりと謂ふ。然れども其出生の始に遡つて考ふる時は、未だ肉體として認む可きなく、生命として感ず可きなく、禽獸なく草木なし。只一の宇宙あるのみ。勢力あるのみ。所謂眞如の外一の物質あるなし。眞如より物質の來る理は既に宇宙を論ずる時に詳述せるが如し。吾人父母未生前の本來の面目とは、畢竟此心靈即ち此一大眞如海を指す。物質は夫れ此心靈の抱合せるものなれば、客觀に於て物質と心靈とは別なるに似たり、されど此心靈以外に物質と名づく可きもの無き筈なり。物質生じたりとて、宇宙に一物を添へたるにあらず、心靈の一部減少せるにもあらず、心靈の本體たる眞如は、不增不減の恒存物なり。譬ば花瓶に押む木に、花を着け實を結ぶことあり、花と實とは別に增加したるにはあらず、花瓶の水と木の一部の變化したるのみ。物質又斯の如く花となり實と變ずる毎に、其名稱と形狀を異にするも、實は水の一部と木のに一部外ならざるなり。

眞如は、夫れ活物にして能く自動す。其自動の結果たる物質も自動活動するは當然たり。其有樣より見て是をし生命と云ふ。生命を有するもの豈有情物のみならん、非常的無機物亦活動せざる

ものあらんや。只發露の上に於て其趣を異にするのみ。是れ嘗て物質の活動を說くに當て說ける所なり。人間は夫れ斯の如くにして來る、其去る所亦同一ならざる可からず、眞如に還元す。彼の生は寄なり死歸なりとは偶然の語にあらず、能く這般の消息に通ずと謂ふ可し。

佛敎に於て過去現在未來を說く。過現未の三世は、別に三所の空間にあらず、恰かも明日今日昨日と別日の到來に非ず、同一太陽の同一地球を照すのみ。時の觀念る以て三世、或は昨今明日と稱ふるのみ。吾人は此三世を通じて無窮に存在して滅せざるなり。眞如に生じ眞如に座して眞如に歸る。何れの所にか又死後生前の場所かあらん。宇宙以外に宇宙なく、現在以外に三世なし、吾人滅して只涅槃の空海に入り永く生くるなり。是れを成佛と云ふ。草木國土、凡そ物として夫れ成佛せざるものあらむや。

一　佛敎の生死觀

吾人の生と謂ひ死と稱するものは抑も何ぞや、曰く一言にして之れを謂へば、肉體の生滅のみ。其母體より分離するを生と名け、呼吸の靜止を以て死と謂ふ。人間として此世界に生ずる以上は

此二の兩極を有す、生死とは此二の關門に向て名けたる語なり。然れども子細に研究すれば、人間の生死と生滅とは、是れを區別せざる可からず。生死は、有始有終の兩極、殊に人間を以て之れを謂へば、五十年間意識作用の動靜を指すが故に、到底吾人遁る可からざる關門なるも、生滅といへば、吾人生するものにあらず滅するものにあらず。吾人の小我は永く大我に歸して亡せず吾人の肉體は出生以來既に物質として存在し。滅後更に緣を求めて現世に永く留まることあらん。何れの所にか生滅あらんや。佛敎は此後の意義を觀破して、以て人生の慰藉安心を敎ゆる法門たり、只凡夫をして導き易からしめんと欲して、其形容潤色に過ぐることあるのみ。識者は此理を看取して直ちに解脫す。禪は更に之れを實見的に修じて、先づ心身脫落に始まり復活に終る。理と事と、更に相碍ぐる無きに於て確信更に大なるものあり。是を見證の士と稱す。

一　靈魂とは何ぞや

靈魂の本體に向ては、今日尙種々なる空想を以て迎へられ、未だ何等の答案を與へたるものなし。予は此大問題を解決するに佛敎の眞理を以てせとんす。されど佛敎の小乘敎義に於ては、多少說

を異にするが故に、或は予の說を以て大に誤謬なりとする者無きを保せずと雖も、眞理は是れを曲ぐ可からざるを如何せん。人常に想像すらく、靈魂とは人間の智情意の作用なりと、而て靈魂の人體に宿るは、尙旅客の宿泊するに等し、人體玆に生ずれば靈魂直ちに宿り、滅すれば去て空中に流離し、或は天國に或は西方十萬臆土に、全く別天地の境に浮遊すと。斯の如きは古來今日に至るまで唱導迷信せらる、所にして、此思想を根據として凡ての宗敎起り、哲學布演せらる。然るに近世に至て唯物論者は、靈魂を解すること全く機械の反射作用とし、機關の破損は直ちに魂の靜止となること、猶時計の機械の憂々として運動するに均しと。此說は吾人の意識を以て靈魂と解せば或は可ならむ。されど如何せむ靈魂は意識にあらざるを。

試に思へ、吾人は此肉體を有し、眼は見、鼻は嗅ぎ、舌は味ひ、身は觸るの用具となし、耳に音樂を聞て樂み、舌に美食を嘗て美味を感じ、皮膚に刺劇を受けて痛痒を感ずるにあらずや。若し此機械にして破損することあらむか、忽ちにして何等の感を起すこと能はざる可し。況や吾人の腦髓は、至て微妙なる作用によりて、種々なる思考力を有す。喜怒哀樂の情の如きは、此肉體の反射作用にして意識と謂ふもの畢竟此作用に外ならず。依之看之、肉體の滅する何等の意識作用

あらむや。若し夫れ智情意の作用を靈魂なりとすれば、予は斷じて謂はむとす、即ち肉體の滅する時は靈魂亦滅する時なりと。此說果して是なるや否や、予は斯の如き單純の理論に安ずること能はず、意識を目して靈魂なりとは佛敎に於ける敎義に反す。古來此種の誤解絕へざるが故に、參禪の徒をして第一着に戒むるに此差別を以てし、是れを煩腦と名け、妄想と呼び、悟入の妨碍物となして蛇蝎視する所以なり。

然らば、靈魂とは如何なるものなりや、曰く一言にして是を云へば、吾人を活動せしむる勢力是なり。吾人の活動作用は此靈魂の作用なり。死とは活動を靜止することなり。勢力無き所活動なし、活動なきが故に靈魂と名く可き作用去るなり、去て何れにか往く、何れにも行かず宇宙の勢力に同化するなり。然らば宇宙の勢力と吾人の勢力とは別物なりや、曰く吾人の肉體を支配する上より自觀して我と云ふ。自我小我とも名づく。吾人より見れば客觀なるも、宇宙を心として自觀すれば主觀的なり。禪の禪たる此大我に同化するに始まる。三界我有。三界唯心抔。這箇の消息のみ。果して然らば、吾人の靈魂は吾人の專有物にあらずして宇宙の靈魂なり。宇宙の靈魂の借用物なり。肉體も又宇宙の物質の借用物なり、吾人或る因緣の到來に依て、以上の借用物を返

濟す可き義務を有す、是れを假りに死と云ふ。

一　死後靈魂の狀態

死とは、即ち小我の大我に歸するを謂ふ。古來總ての人の誤解するは、吾人死後靈魂の狀態是なり。即ち甲乙丙丁死して自我を離るゝ時、甲乙丙丁の靈魂は幽界に浮游して別所に散在して、容易に散消せざるものと爲す。蓋し或る小乘佛敎の方便說に基くものならむ。

若し夫れ、斯の如く靈魂は自由に吾人の肉體を出入するものとすれば、人間の死亡數と、出生數とは常に平均せざる可からず。出生數多きを加ふれば、其不足數の靈魂何れに之れを供給す可き乎。豈斯の如き奇怪のことあらんや、迂說信ずるに足らず、佛敎の眞理は實に千古を照らす、吾人の心靈は、宇宙の靈に歸するのみ。天に參じ地に同ずとは、宇宙一體を謂ふのみ。涅槃に入り、法海に寂すとは、蓋し是れを謂ふ。常住壞空も時に此義に解せらる、佛敎の第一義、只箇中の消息を說くのみ。

吾人の肉體は、物を說くに當て、其勢力より來りたるを說明せり。勢力は物質と變じ肉體となりて活動す。活動の方面より見て靈魂とし、物質の方面より見て肉體とす。肉體と靈魂とは決して別物にあらず、故に禪に於ては即身即佛と謂ふ。即も此身此肉體が、直ちに佛なりと謂ふ。以上の見界の他解す可からず。又是心是佛と謂ふも、即ち此靈魂たる本心、自我、勢力の活動（意識にあらず）が佛なりと謂ふなり。他義ある可からず。即身即佛と、是心是佛とは別にあらず、肉體と心靈と別にあらざるを云ふのみ。平易に云へば、物質は勢力の凝結物、勢力の本體は靈妙の活動力を有す、故に物質は活動力を有するなり。吾人の小我と名づくるものは此活動を指す。吾人人類の小我自我と名くる靈魂も、此肉體を離れては末那識を通じて、意識の活動を始むることを能はず。末那識とは第七識にして、第八阿賴耶識と第六意識との交通を司る識を指す。故に肉體無き所宇宙の大我の外小我あることなし。夫れ小我は、既に肉體を以て本據とすれども、大我は即ち然らず、大我と名く可きものは、宇宙の心靈、詳く謂へば勢力の作用を謂ふ。不生不滅不汚不淨を以て體とす。吾人は此大我を以て吾人の心靈とせざる可からず。否吾人の心靈は此以外に決してあることなし。佛敎に大我を水とし、自我を水上の波に譬ふ。本心を玆に認むるを悟と云ふ。悟るものは本心を知る。本心を認むるものは自我を輕んず。自我は肉體と生滅を同ふすと雖

も大我は然らず、無始來より無終極に涉て恒存す。之れを不死の本體と云ひ、是れを不滅の境と云ふ。生死解脫は蓋し此以外にある可からず。

一　死後の實驗法

死後の靈魂は、果して上來說くが如きもの乎。佛敎に於て是れを實驗的に立證するの方法あり。單に立證方法のみならず、自認自得して以て、轉迷開悟の手段とし、安心立命を得せしむ。禪即ち是なり。座禪とは何ぞや、是れを平易に謂へば、肉體を生きながら殺すにあり。即ち自殺を試むるにあり。死して而て後の靈魂の本體を認むるにあり。其方法は座禪儀抔に述ぶるが如く、結跏趺座することなり。結跏趺座とは、先づ右の足を以て左の股の上に安んじ、左の足を以て右の股の上に安んず。半跏趺座は、但だ左足を以て右の股を壓すなり。寬く衣帶を繫けて齊整ならしめ、次に右の手を左の足の上に安んず。左の掌を右の掌の上に安んず。兩大母指を面へて相柱ふ、乃ち正身端座なり。左に側り右に傾き前に躬り後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と對し鼻と臍と對せしめんことを要す。舌は上腭にかけて脣齒相ひ着け、目は須く開くべしと。是れは之れ座禪の形式にして、斯くすればとて、直ちに見性し能ふものにはあらざれど、此方法を以て煩惱を遮斷するに最良手段たればなり。詳くは座禪用心記普勸座禪儀抔に就て見るべし。斯の如き法は如何なる目的を以て爲す可きや、曰く吾人の肉體は地水火風の四大の凝結物なるを以て、一々之れを其元に還す法なり。而して後如何なる境界に座するや、禪語に四大分離の時甚麼、或は大死底の時甚麼抔、畢境這箇の消息に向て問ふの語なり。其境界は其實驗を待て後知る可く、一語の添ふ可き辭なしと雖も、秘密なく謂へば、凡ての煩惱を絕息し靜かに座する時は、思慮なく分別なく苦なく樂なく、虛念悉く去て實念玆に現じ、天地に參同して宇宙是我なるを覺ふ。是れを之れ大死底の境と云ふ。此大死底は實際の死境と何等の差別あることなし。死後の淨土は是なり。死後の極樂は爰なり。古來死人死境を說かずと雖も、吾人は生きながら、以上の法に依て死境を驗するを得、彼の睡眠中の夢境や、眩瞑者の半死とは聊か其趣を異にす。佛敎殊に禪宗に於ては如斯實驗的に死後を立證して以て空論空想を排し、眞乎に安心せしむ。故に此境界に出入自在を得るの士は、實際の死に臨でも遲疑の念生せず迷想の起ることなく、莞爾として敢て狼狽あることなし。生死を離るゝとは此義なり。永く生きて死せざるの法只此一あるのみ。千言萬語は一の

實驗に加かず、禪の禪たる特徴は蓋し玆に存す。即ち禪は只悟を得るを目的とす、學ぶ可き法なく教う可き手段なし、要は結跏趺座して自得するにあり。以心傳心、教外別傳、不立文字とは此語なり。

一　佛教の倫理觀

吾人は何故に惡をなす可からざるか。聖人の教へあるが爲か、然らば聖人は何を標準として教ゆるか、人或は曰はむ。畢竟是れ方便のみと。夫れ或は然らむ、而かれども、時を異にし所を異にするも、其道德の方針大凡一定し居るは如何。蓋し多少の根據無きを得ざるなり。他は暫く措く、佛教上の倫理觀を以て之れを解せば、慈悲觀と因果律の二法則に從ふのみ。前者は他に向て施す方針にして、後者は自己の爲めに守る可き準則たり。勿論佛教の最大目的としては、卽ち轉迷開悟、安心立命の手段たり。然れども以上は箇人主義、即ち各自の幸福を目的とするものにして、人と人の關係、即ち社會主義にはあらず、語を替へて之れを謂へば、倫理とは現世に於ける平和を目的とする、吾人の行爲の標準なれば、箇人の安心立命のみに關する問題は生せず、只倫理は何を標準として之を遵守す可きやに歸す。於是予は、是れを慈悲と因果の眞理に遵ふ可しと云ふ。佛教に於て吾人に示す所の倫理觀は、畢竟此二法則を出でざるなり。此二法則を以て演繹すれば宇宙の一大法則となり。之れを歸納すれば吾人の行爲の一大準則となるを斷言す。

然らば、吾人は何が故に此慈悲主義を守らざる可からざる乎。曰く、慈悲の念は博愛より起る。博愛とは、自己を愛すると均しく他を愛し、自他の間の差別なきの謂なり。然り。其博愛の念は平等より來る。平等は差別に對する語にして、宇宙一體主義に歸因す。宇宙一體の主義は、勢力一元說に基くなり。勢力の一元論は、既に物質論に於ても、宇宙論に於ても既に詳論したるが如く、「エネルジー」即ち眞如の一元を指す。吾人は此眞如に來りて眞如に去る。而て其去來するや、因果律の法則に遵ふことも既に之れを述べたり。因果律は、宇宙に存する確定不動の眞理なり。吾人の先づ確信せざる可からざる眞理は、眞如の實在と因果律の存在是なり。

夫れ眞如は平等なり、吾人の來るも去るも此空海なり。吾人のみならず、宇宙の萬物は、均しく是れ吾人の同母兄弟のみ。吾人の分身のみ。顯れて斯く差別となるも、潛みては無差別たり。宇宙萬物夫れ既に一體なりとすれば、吾人と他人との間、乃至宇宙萬物との間に於て何ぞ差別の觀

を以て不公平のことある可けんや。此一體の宇宙觀を法海とも、佛海とも、又佛陀とも云ふ。故に此佛陀より見れば、一切の有情非情は皆是れ赤子なり。基蘇督教の神の宇宙の萬物を見る猶斯の如くならん。故に萬物は神の子なりと說き、博愛主義を皷吹す。佛教は夫れ形體的神を認めずと雖も理は一なり。基蘇督教の博愛佛教の慈悲主義偖に眞理なり。佛教中此佛海を靈的に說く小乘教ありと雖も、畢竟方便說のみ。名稱が大日如來、又は不可思議光如來抔附して、其靈妙作用を信仰せしめんが爲めなり。吾人の過去は佛陀なり。未來も亦佛陀なり、現在豈佛陀ならざらんや。佛陀とは謂へ、彼の神的靈物にあらず、眞如のみ。勢力のみ。「エネルジー」と名くるも尙可ならん。此平等觀は、要するに博愛主義、慈悲主義の根底なり。

次上因果律に向て少しく研究する所ならむ。釋迦牟尼佛の一大發見は、蓋し此因果律の法則ならむ乎。吾人の倫理觀として遵奉す可きは此因果律なり。又畏怖す可き法律は此因果律なり。因果の存在と其法則に付ては、旣に是れを說けり。玆には只倫理觀として聊か述ぶる所あらむ。吾人の此世界に出現したる以上は、其一擧一動因果の支配を受けざるはなし。玆に出するも因と緣あるに依る、死する亦然らざらむや。行爲にして善因とならば、結果に於て善果なる可く、惡因なれば惡果なる可きは、炳焉火を視るより明かなり。未だあらず、惡を爲し其惡報を受けざるもの、未だあらず、善行を爲して善報を受けざるものは、故に曰く、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃ありと。又曰く、天網恢々疎にして漏らさずと、眞理なる哉語や。然れども熟々世間の狀態を視るに、實際に於て惡人榮達し、善人却て苦腦を受くることあり。因果若し斯の如く歷然たらば、天何故にかゝる沒理をか爲す。此問題に對して、古來快斷を與へたるものなし。西哲「ライブニッツ」氏曰く、『此世界に罪惡の存するは、此世界をして善に進ましむるの要具なり。且つ吾人日常經驗する所によれば、惡人却て善果を得、不正の者却て幸福を得、善人却て罪禍にかゝるが如きことあるは、現前の短かき時間に於て考ふる時は以上の現象あるも、哲學或は宗教等によりて、永遠無窮の時間の上に是を推究せば、此疑問忽ち氷解することを得可しと』。然れども、現在の狀況を以て未來を推測する時は、或は未來と雖も現在の如く、善に禍し惡に幸するが如きことは決して之れ無とも謂ふ可からず。何となれば、若し末來氏の云ふ如き神あらんて、善惡公平の賞罰あるならば、神は未來のみならず、現世と雖も同樣に神の監督する世界にあらずや。されば、現世に於てか、る不公平の賞罰なりとせば、未來も亦同樣の不公平に墮することなき乎の

疑を生せん。氏は更に此疑問に對して曰く、『現世に於て、善に災し惡に幸することなきに非ざるも、惡人幸を得るものも、善人幸を受くるものと比較する時は、惡を爲して幸を得るもの、數極めて少かる可し。故に人は善をなすときは、之れに應ずる善果あることを豫期して、其心に安ずることを得可し。且つ世界は何ぞ此一小世界に限らん、世界は無數なり。其無數の世界中には、寸善必らず其賞を得、尺惡必らず其罰を得ることあるを想像することを得可し。其想像は以て吾人の心を安せしむるものなり。故に善人は賞せられ、惡人は罰せらるゝことは、實に世界普通の道理にして吾人は善を爲すと同時に、其心に不期の安逸を得、惡をなすと同時に、其心に他人の知らざる不安を感ずるは、亦賞罰の一部と謂ふ可しと。』予は此論の一部は眞理なりとして是認するもなり。即ち、其惡果なるものは必らずしも是れを客觀的にのみ想像す可からず。語を替へて之れを謂へば、惡報とは肉體的苦痛のみによりて測度す可からず、財寶の富貴以て幸福とは爲す可からず。宜しく「ライブニッツ」氏の如く、主觀的に苦悶する所を以て惡報なりとす可きことあり。人爲的の法律に於ても、刑罰時效、即ち公訴の消滅、或は期滿免除を規定するは、一種の主觀的苦痛を以て、既に刑の執行に優れる故なりと說明する者あり。亦如上の主義に說を同ふするに似たり。又時の永久的觀念を以て說明するに、幽界に涉ての未來は予直ちに首肯する能はざるも、之れを肉體的系統によりて考ふる時は、一の因を生ずる數世の後に、果を生ずることあり。譬へば茲に癩疾の血統をもち子孫に殘すことありとせんに、數代の後に於て必らず發生することあらむ。是れ惡因の惡果、永遠の後に來るの一例とするに足る可し。斯の如き自然の道理は、到底之を否認すること能はざる所にして、神の賞罰に歸すと雖も、神佛に於てかゝる裁判權の行はるゝものにあらず。畢竟因果律の作用のみ。孔子も亦倆を造るもの夫れ後無からんと謂へり。是れ又、因果作用の子孫に傳はるを意味す。依之看是、「ライブニッツ」氏の永き時の觀念を以て結果を定むるも亦一の眞理たり。無論佛敎に於ては、此因果を三世に涉つて相續すと說く

一　因果律の例外

上來の疑問を解決するには、到底「ライブニッツ」氏の所說を以て滿足し能はざるものあり。何となれば、因果の正しく行はるゝは眞理なりと雖も、彼の惡人榮達して善人逆境に沈底することあるは、蓋し免れざる事實なればなり。予は此疑問に向て、到底佛說を正面より解釋しては、解決

に苦しまざるを得ず。何となれば、佛說としては、善因善果、惡因惡果に、例外を示さざればなり。然れども、裏面解釋としては、嘗て述たる如く、因は必ず緣に依て始めて果を得可く、何等の緣なき所果ある可からず。此始にたとひ善因ありと雖も、緣にして逢はざるか、或惡因なることあらんか、其果善なる能はざる可し。譬ば玆に善良なる種子ありとするも、之れを下すの地味惡く、或は倍養の法宜しきを得ざらんか、到底善果を得ること能はざる可し。況や風雨災害をや。此理は即ち、因果必然の一大例外を爲す所以なり。緣は偶然に遭遇するに限らず、善因にして惡緣に遭遇することも屢々之れあるを想像するに足らむ。然りと雖も、「ライブニッツ」氏の云へる如く、之れを善人の幸を受くると、惡人の幸を受くるとを比較すれば、善人の幸を受くるは、其數に於て夫れ多し。是れ恰かも、善良の種子は常に善良の結果あるは、統計の示すに等し。吾人は夫れ以上の如く、僅少の例外を除ては、常に此因果の法則に遵ひ、行爲の準則とせざる可からず。是れ佛敎の敎旨なり。勸善懲惡の方便說、又玆に原因を酌む。但し此因果の例外說は、予の私論に屬す。

一禪宗の因果觀

上來說く所、普通佛敎の說として、平易に之れを說明せり。されど禪上の見界は更に一步を進むるものあり。昔時百丈和尙談法の時、一人の老人ありて每に衆に隨て法を聽く。大衆の歸るとき老人亦歸る。或時此老人一人歸らず、師之れに問ふ。面前に立つ者は誰ぞ。老人曰、某過去に此山に住し、學人が問ふに、大修底の人は因果に落ちるや否や、之に答へて因果に落ちずと曰ひき。此見界に因て五百生の間野狐の身を受く。希くは和尙、一轉語によつて、此野狐身を脫せんことを。乃老人改めて問ふて曰く。大修底の人還て因果に落るや否や。師曰く、不昧因果と老人言下に大悟して野狐の身を脫し得たりと。嗚呼是れ何の謂ぞや。此不落因果と、不昧因果何ぞ其口調の相似たる。されど其意味に於て雲泥の差あるを含味す可し。不落因果とは、因果の眞理を無視したるの語なり。去れば五百生の野狐たる惡果に隨す。不昧因果は、決して因果を撥無しにる語にあらず。因果の法に通曉して味からざるの謂なり。因果に達曉して、解脫したる者は、因果も亦之れを束縛する能はざるの理あり。之れ惡因を轉じて善因たらしむるを得ればなり。畢

竟因果とは其標準主觀的にありて、客觀的に之れを求む可からざるものなり。譬ば、人を殺すは必ずしも惡ならず、正義の戰爭の如き寧ろ善事たる場合あればなり。

又小慈善必らずしも善因ならざる場合あり。昔時、梁の武帝、達磨大師に問ふ。朕寺を起し僧を度す、何の功德かある。磨曰く。無功德。帝曰く、何を以てか功德なき。磨曰く、此れ但だ人天の小果のみ。帝曰く、何をか大乘の功德と謂ふ。磨曰く、淨智妙圓にして、體空寂、是の如きの功德世に於て求められずと。帝語を他に轉せり。客觀的に是れを見れば、武帝の行爲は大なる善因なるが如し。然れども、達磨是れを人天の小果として、無功德何等の善果なしと喝破し去る。世之れに類したる行爲を爲し、其善果の到來せざるを以て世を憾み、因果信ずるに足らずとする者多し。何ぞ其因果觀の狹きや。

禪的に因果を觀れば、因果は善惡共に、自已に迎へ待つ可きものに非ず。仮令ば、玆に餓へたる乞食ありとせんに、通行者之に食を施すとせば、此施すと云ふ因は、忽ちにして、餓者死を免がるると云ふ果を得たり。因と果は、斯の如く歴然と即座に行はるゝものにして、玆に因果の一段落を告ぐ。何ぞ乞食よりの報酬を待たんや。强て其報酬と見る可きものを求めば、此慈善より感ずる心の愉快是なり。彼の佐倉宗五郎は身を殺して仁を成せり。故に佐倉の民は遂に塗炭の苦より免がれて、玆に、宗五郎の善因は、善果を得たるに非ずや。然るに、此善人宗五郎磔の刑を受く、其果の何ぞ惡なる。曰く是は、宗五郎の手段が、國法を破りたること、即ち時の法律を無視したる惡因によるものにして、一行爲が善惡兩面に觸れて居ることを知らざる可からず。更に又、今日に至る迄佐倉宗五郎が、地方の人より神として奉祀せらるゝは、地方人民の受けたる恩德が、一種の善因となりて、玆に此善果を生ずるなり。

予が曩に善因善果は、結鎖連鎖とて、因果相續する道理を說けり。即ち此理に因るなり。因果の法則は斯の如く解して、始めて殆ど例外と認む可きもの無きに至る。蓋し佛敎に於て因果必然を皷吹して、古來例外を認めざる所以亦玆に存す。

一 禪の處世觀

汎く佛敎と稱ふるも、多少其敎義を異にするものありと雖も、吾が信ずる禪に於ては、何等の儀式を要せず、禮拜を用ゐず、只眞理に向て參究するの一途あるのみ。偶々、寺院に法式莊嚴ある

は、此悟入の方便のみ。殊に在俗引導の手段のみ、禪を修する所何の木像かあらん。何の經典かあらん。禪の教説としては、死後に天堂地獄あるを許さず。別て意識的靈魂を認めず。されば幽界に苦もなく樂もなし。只此肉體の一部は眞如に還元し、一部は永遠他緣に導かれて現世に滯留せむ。其狀恰かも燈火の如し。明滅所に從て自由なり。「燈火の消えて何所にかへるらん暗きは元のすみかなりけり」と。暗きすみかとは果して何ぞ。曰度々説明せる涅槃境なり。無の境にあらず。眞如の實在空境なり。緣に觸るゝことありて再び火の點ずることあらん。然れども其時は既に今日の處にはあらざるなり。況や同一の人間たる形狀として生ずること蓋し窄なり。佛教に於ても是れ再び逢ふこと能はざるの生と謂ふ。吾人は、幸に生を人間に享有せるを偶然の緣として喜謝す可きなり。

吾人の去て空に歸するや、只子孫に肉體の一部を傳ふると、善惡の緣を殘すのみ。人誰か子孫を愛せざらむ。又名譽を希望せざらむ。此二者を愛するの念を全ふせんと欲せば、只因果の法則を遵守して、善因を積むにあり。吾人の宗教は玆にあり、何の儀式をか將ゐん。死後に天堂地獄を建て、人の恐怖心を利用して、小乘因果を説法するが如きは、既に今日に於ては、殆ど陳腐に屬す。

更に語を終に殘す。吾人世に處するの途は、慈悲の心を以て心とし、因果の法を準則として、善事是れ勉め、内には禪を修して、安心立命を求むる外是れある可からざるなりと。

嗚呼！記して玆に到る。吾は是れを以て禪書の一部たりと謂ふことを躊躇せざるを得ず。何となれば禪とは、實際斯の如きものに非ざればなり。禪は苟も一語を添ゆれば忽ち禪を遠ざかるを以てなり。然れども卷首に豫め述べたる如く、近來禪は宇宙の眞理に背馳する、只一種の空想にして、而かも釋迦牟尼佛の所説に反すと爲す者あり。予是を歎ずること久し。故に自ら其第二義第三義に下りて、聊か哲學的に是れを説明して、多少禪の消息を漏らせるのみ。禪は境を得るを以て目的とし、文字言語を以て之れを説くことを許さずと雖も、彼の古來の古則公案を無暗に拈提して人を迷はし、身其境に座せず、矢鱈に心頭を傾けて悟入を謀が如き、全く益なき方法に比較すれば、又多少の得る所なしとせむや。

茶禪一味前編終り

茶禪一味 後編

一緒論

予が僑居せるところは、畫さへいとも淋しきに、恰かも梅雨の半にて、庭前の小池には蛙蜺の呱々たる聲と、檐端には細雨の滴々たる音のみ聞えて、常にもまさる或心細き夜のことにてありける。只獨り爐邊に座し、松風の音をのみ伴として、孤燈の下に茶を喫し居りしが、茶筌の穂先にも劣らぬ程、數々の妄想湧く中に、懐ろに、浮み出づるはいつもの利休居士在世の時のこと共なりき。靜かに立ちて燭を執り、漸く探り得たるは、之なむ南坊宗慶老の記録なり。燈を挑みて讀み去り讀み來れば、三百年の往時のこと、今眼前に見ゆるが如く覺へて、轉た感慨は胸に迫り、雙眼は爲めに濕ひければ、竹檠にも同情ありと見へ、光りも頓みに衰へて、五彩の虹霓を放ち、松風の音も絶へ〳〵に、四隣寂として慘憺たり。今其一節を拔くに。

（前畧）球光の弟子此頃所々に蜂起し、樣々の莊りをして、主人は客を珍らしがらし、夫れを美目にし、誰は此莊をして客を得たるに、其客は何の某の弟子なるが、此手前を知らずして赤

面しつる。誰某は此莊をして首尾したり抔いふことどもあり。師をかへ再び出入を絶する類多し。夫故に師も亦思ひ〳〵樣々のことをたくみ出し、法に違へることを敎ふるもの、幾何と云ふ數を知らず、十年を過づして茶の道廢る可し。廢るとは、世間にては却つて茶の湯繁昌する時分と思ふ可きなり。悉く俗世の遊樂に成り行くことも、易に於ては廢ると云ふことなり。其時に至りて永らへたれば、易は獨り草庵の茶を樂む可し、誰問ふ人もあるまじ。かなしきは宗易漢和とも、古來なき草庵一風の茶の湯を工夫し、恐らくは彼の趙州の茶とも云ふべしと、自から悟ることなるに、世降りたる故、間もなく道すたる可きこと眼前なり。二疊敷も程なく二十疊の茶室に成る可し。易は二疊をしつらへたるさへ、道の妨げかと後悔せり。兎に角斯樣に思ふも茶道の墮落なり。時至て、道起り時衰へて道廢ること、佛界にても及ばざること、見えたれば、中々かなしむべからず。又未世に佛の再び生玉ふためしなきにあらず。此道に於て其心得の人後代に出來、御坊や利が志を感服することもあるべし。さやうの人に薄茶一服手向けられたれば、百年の後たりとも亡魂などか、請け喜ばざらむ。必らず茶道の守神となるまじき休にあらず、佛祖も力を添へ玉ふ可し云々。此坊もとより同心、其日は天正十七年二月廿八日、其夜和尙も御出にて、殊に御物語しみて闌夜に及びぬる。既に過ぎにし十八年同月同日横難に逢ひ玉ふ、悲歎するに堪へたり。この坊が回向日々の茶の湯、靈魂まことに請け玉ふべし。又この坊が無き跡も、忌日の茶の湯回向怠りなき樣、鑑板に殘し置なり云々〳〵。

又卷末に書して曰く。

文錄元年二月廿八日、先師利休宗易大居士三回日、香花回向し茶を供し、多年の夜話閑談を思ひ出し、灯下に涙を落して、つくつくと忌れぬ物語どもを、後と前さと書き付け、既に一卷に及ぶ。老や執筆の序、小偈成る。上に呈す。只是れ情を述ぶる而已。

孤燈油盡花纔白　一鼎水乾茶不青
師去草房三覺夢　東闌報曉淚空零

南坊拜

嗚呼〳〵、苟も茶筌を弄し、道の爲めに歩みを運ぶ者、誰か此物語を聞て、今昔の感起らざるものあらむや。蓋し利休は現世に死して、而かも未だ幽界に瞑せざるもの、又南坊は、集雲庵を去て今尙死せざるものなり。夫れ現今の茶道は、實に所謂茶の湯大繁昌の時、大流行の節にして而

かも其大繁昌大流行こそ、休の所謂茶道衰退の時期にあらずや。現今居士の靈、南坊の魂をして、滿足せしむるに足るの法弟、夫れ幾人かある。

予は是草庵の一農夫。一鄕里の寒居士たり。此農夫、此の居士の爐邊に現じて、訴ふる居士の靈が、不肖仙樵をして、聊か茶道に盡すことを促がす所以のもの、蓋し斯道の衰退を挽回せむことを、守護するなるべしと信ず。故に予は徹頭徹尾、積年來の舊習を打破し以て利休居士の遺志を發揚せむと謀り、大日本茶學道會を興立してより正に三十餘年、今復其茶道骨子を錄して、梓に上す。居士の靈をして、聊か慰むるを得ば、吾本懷達し了するのみ矣。

一　茶道病論

嘗て之れを醫に聞く。凡そ病の人身を冒すに五あり。曰く遺傳、曰く傳染、曰く感染、曰く流行。曰く特發之れなり。即ち是れ病の人身に侵入するの緣なるものにして、其結果人身を惱ますに三あり。曰く輕症、曰く慢性、曰く急性之れなり。而して其原因を尋ぬるに、遺傳は祖父母或は曾祖より、血統上病根を胎內に稟くるもの、即ち癩病肺病の如く、傳染とは黴菌の爲めに傳はるもの、赤痢虎列刺病等の如き、感染とは五感及び神經等に依りて、病氣に感觸するもの、假令ば飲食の嫌惡より起る、腹痛頭痛精神病等の如し。流行とは氣候の作用、或は時期によりて一般に流行するもの、即ち感冒眼病等の如き之れなり。特發は介するもの無きに、異狀を呈するを謂ふ。概ね此五病源を漏れずと。

以上の如く、人身を侵す病に其種類あること斯の如し。豈夫れ茶人にも病無きを得むや。抑も茶人の病氣に十數種あり。即ち文盲病、誹謗病、道具狂、庭園病、建築病、諂諛病、高慢病、道食病、理屈癖、手前癖、潔癖、吝嗇病、隱遁病、貧慾病、道樂病等なり。其內文盲病。誹謗病は、既に茶道中興よりの遺傳にして、殆ど慢性なるもの、又道具狂。庭園病。建築病の如きは、甲より乙に傳染するものにして、就中急性なる流行病なり。復諂諛。飲食。高慢。理屈。手前抔の諸病は、師匠より或は朋友よりの感染にして、既に慢性と化し居るもの、其他に吝嗇。隱遁。潔癖。道樂病の如きは、先天的の氣質によりて特發するもの、蓋し輕症と謂うべし。

以上列記したる、茶人の疾病の容體を述ぶれば、古來茶人文盲儒者貧乏とて、茶家の宗匠とか稱せらるゝ人に限り、概して無學の人物多し。假令ば茶席に古德の墨跡抔懸けあるも口の內でム

ニヤ〳〵と濟まし、年月日位見當に、お時候柄至極抔と挨拶する類なり。又誹謗病とて、利休在世の時より、甲論乙駁して、自己の流儀を立て、相反目せる餘波は、猶ほ今日に存し、客門を出づるやいな、軸物は贋物で、飯が硬くて汁が冷て居た。手前に落ちがありし抔と誹謗し始むるを、亭主は送り出で壁に耳を當て、聞て居ると謂ふ始末、是れ即ち古來の遺傳病、又更らに茶道の深意を解せずして、道具に萬金、庭園に珍木奇石、建築に華美を盡し、全く不釣合ひをして樂む者あり。此病氣は、競爭的に傳染するものにして、一旦此病に罹れば、其倒る者大抵十に八九、實に恐る可きものなり。次に詔訣病は、巧言令色實意無きもの、高慢は、自分免許の自尊强き人物、飲食病は、茶の湯の極意は懷石料理なりと心得、其取り合せと調理法のことのみを論じ、他の會に招かるゝも、懷石以外に着眼なき者、理屈病は、常に曰く手前は是れ手藝のみ、茶道の意に埋論にありとて、只書物或は故實のみ鑿穿する人。手前癖は、點茶法の外茶道を辨せざるものなり。當今以上の病人尠からず感染の懼れあり。其他小慾知足を誤解して、吝嗇と化し、茶は隱者の業と思ひて山陰に避遁し、或は、道具屋兼宗匠の貪慾病あり。癲症にて、茶は清潔を主とすとて、何もかも打ち捨て、一心に掃除に凝る茶人あり。此輩は却て山中落葉の自然てふ風情を解せず、又道樂にて、一向不潔を無頓着なる者あり。以上は皆先天的の性質より起る病氣にして、治するに難しと雖も、他に及ぼす弊害は、前者に比すれば即ち輕症なるものなり。

釋尊世に出現し給ひて、衆生皆病ありと曰ひしが如く、茶人夫れ皆病あり。又釋尊は四十九年の說法に依て、是れを濟度せられし如く、利休世に出でゝ茶道を中興し、大に斯道の爲めに力を盡したり。されど釋迦は滅盡經に於て、末世の比丘、白衣の居士に法を聽くべしと歎息せられしが如く、利休も、三百年を出でず茶の道廢る可しと叫びたり。飜て當今の茶家を顧よ、前述の病苦に七顚八倒し、且つ門外漢に馬鹿にらせるゝに非ずや。誰か大偉人の出でゝ之れを矯正治療せんとするもの無き乎。今にして之れを救濟すること無くむば、遂に道は墮落滅却し終らむ而已。

一　茶道體用論

凡そ天地の間に備はるものは、悉く陰と陽との元則に基かざるもの無きが如く、理論の上に於ても、實際に適用しても、必らず其體と用とを具備せざるものなし。去れば、其體のみありて用なきはなく、用のみありて體無きもなし。體と用とは、鳥の兩翼車の兩輪の如し。例令ば、體

は人間の精神の如く、用は夫れ五體の如きもの歟。人間にして、精神のみありて胴體なくばん幽靈に均しく、胴體のみありて、精神無くんば、人形に異らず。必らずや、體用相待て活動するこれ、恰かも精神の命ずる所足之れを運び、手之れに應ずるが如し。然れ共體と用とは、元來二にして不二、不二にして二、差別にして無差別、無差別にして差別なり。之れ人間の精神即五體、五體即精神なれ共、精神は矢張精神、五體は矢張五體と差別あるに似たり。若し道にしても、體と用と無く、物にしても、體と用と何れを欽くも、圓滿なる道完全なる物と稱す可らず。之れを人間にしては片輪と謂ひ、之れを物にしては、缺け茶碗の如しと稱す可きのみ。

茶道に於ては、殊更に體用の語を以て、一切に論及するを常とす。されば、元より其體と用とは、完全に具足し居らざる可らず。即ち完全なる體と、完全なる用とを具備し居らざれば、決して圓滿なる、完全なる、茶道と稱す可らず。既に茶道は圓滿なり、完全なりと稱する以上は、之れを歩むで危ふからず、之れを行ふて過たざる底の道ならざる可らず。請ふ試みに是れを茶家宗匠に質さむ乎。敢て問ふ、甚麼なるか是れ茶道の體用。宗匠泰然として答へて曰く、茶味は卽ち禪味なり、故に古來茶味禪味同一味と謂ふ。豈禪機を悟らずして茶道を語る可けむや。既に茶祖珠光始め、紹鷗、利休、劍仲、宗旦、各皆大德寺に參禪便道して、辛苦痛棒を喫し、漸く始めて茶道の體を了得したるものなり。本來茶道は、座禪工夫の手段に出でたるものにて、禪を修せざるの人に於ては、何の効果かあらむ。珠光が嘗て義政公の問に答へて、茶は遊に非ず藝に非ず趙洲是知已、陸羽豈佳境に到らむやと謂ひしも、蓋し此意なりと。喋々說き去り說き來る。

予曰く、高論聽くを得たり。然れ共、是れ彼の趙州が喫茶去、一休の茶禪一味論のみ。畢竟室內の工夫、自覺、獨樂の茶にして、是れを喫して衆と共に樂み、以て俗家に應用し、行住座臥に行ふ、所謂世間的の用を爲さず。又利休の和敬淸寂の茶意に適せず。如斯を體備はりて用に缺くと謂ふ。予を以て之れを觀れば、未だ圓滿なる茶道として首肯する能はず。試に之れを次に問はむ。

宗匠得々然として、聲に應じて曰く、茶味禪味抔謂ふは、彼の浮屠の我田引水的臆說の甚だしきものにて、茶道を方便にし、注入的に布敎せむと欲するのみ。其故は、珠光は元南都の禪僧、利休禪を好み法衣を賜はり、榮西茶子を唐土に齎らし、又有名茶家の墓所大德寺に在るを以て、牽强附會せるものなり。決して本朝の茶書にも、由來禪より出でたりと記せることなし。抑も茶の

道は、敬と禮とを尊ぶ。而して茶會は動作と容貌とを第一とする、是れ即ち敬禮の意なり。敬を以て内を正ふし、禮義を以て外を方にす。故に茶事は禮を第一とす。看よ服紗を腰に狹みて出で客を迎ふるは、佩玉に代ふるなり。佩玉鏘々玉を抱ひて掬躬如たりと謂ふも、是れ禮の容貌なり。又之れを大にしては治國平天下の基となる。禮記に曰く、「即ち禮を隆にし禮に因る、之れを有方の士と謂ふ。禮を隆にせず、禮に由らざる、之れを無方の民と謂ふ、敬讓の道なり。故に、以て宗廟を奉ずるには即ち敬あり。以て朝廷に入るには、即ち貴賤位あり。以て室家に處するには即ち父子親み、兄弟和す。以て鄕里に處するには即ち長幼序有り。孔子の曰く、上を安んじ民を治むるには、禮より善きはなしとは之れ此れを謂ふなり」と。夫れ又敬と禮の用大ならずや。茶は即ち敬禮に依て起る、故に茶道とは謂ふなり。茶禪說の如きは笑止に堪へたりと、喃々說伏す。余徐ろに、答へて曰く、如何にも茶道の、敬と禮との名論得て了解せり。甚だ當を得たるもの、如し。然れ共退て考ふるに、敬と謂ひ禮と稱するも、畢竟人に對して而して後、始めて玆に其用を生ずるなり。自から敬し自から禮することは、出來間敷に非ずや。まして茶は行住座臥の行ひと聞けば、明けても暮れても客を招きて、茶を樂むことは貧者の能はざる所なり。若し茶が果して、來客或は宗廟に奉る時のみに用ふる道具なれば、日々自己の役には相立たぬ道理ならずや。茶道も左樣なる日用不用の贅澤なるものにては無かる可し。先づ是れは極端なる議論としても、茶道が敬と禮とのみの道ならば、聖賢の敎へに、既に敬禮の法あり。又座作進退の法には伊勢小笠原の式もあり。殊更六ツケ敷茶の湯をかりて、敬と禮を學ぶに及ばむや。古來禮過ぐれば諂になると謂ふ。實に今時の茶家の内には、往々巧言令色して、裏面には動作を誹り、器物を嘲る人あり。只專一に敬と禮とをのみ說く時は、かゝる弊風を養ひ易し、豈之を圓滿なる茶道と稱す可けむや。請ふ更らに之れを次に問はむ。敢て問ふ、如何なるか之れ茶道の體用。宗匠欣然として衣紋を繕ひ、膝を進めて曰く。最前より玆に默聽すれ共、一つも其當を得たるものなし。請ふ暫く吾が說を聞け。茶道は豈禮にのみ關せむや。又禪にのみ與らむや。若し果して茶を禪とすれば、是れ禪學の專門家にして、常に禪三昧に入れる閑暇なる老人、或は僧侶の輩に非ざれば到底學ぶこと能はず。茶若し禮ならば、是れ貴人長者の翫弄のみ。何ぞ斯の如き狹き道ならむや。茶には、苟くも上王公より下は庶民に至る迄、是れを行ひ以て世に處し、一家團欒の内、安穩に身を終るを體とす。抑も愉快の第一は、一家平和に在り、一家の平和は、家を齊ふるを元とす。

家を齊ふるは國の因て治まる所、家を齊へ國を治むは財を以て基とす。財を蓄ふるは儉にあり。儉の道は茶に如かず、故に茶は質素にして儉約の親と謂ふ。利休嘗て佗茶を案出し、之れを四海に及ぼし、質素を旨として風雅の道を示す、卽ち小欲知足以て儉を守るの法たり。上は素朴を愛して驕らず、下は儉を守りて足ることを知る、こゝを以て上下一致樂みを同ふす。既に茶の十德にも上下親交と謂へり。茶道は物足らぬを愛するを元とす。卽ち數の調はずして、奇數の道具を使用する故數奇者又數奇屋と稱す。茶の道も亦世に益すること尠からずと。縷々陳述す。

予答へて曰く、卓說拜聽し、實に茶道の質素儉約を以て主意とすること、予輩の如き貧生に取ては、其恩澤に浴して、利益する所尠からず。されど、本來茶の湯の起原を考ふるに、義政公權威の餘波驕奢に流れ、既に樂み極まり遊技の道盡き、遂に物數奇の結果、茶法を能相珠光に學ばれしなり。故に當時は檜造作の書院金銀縷めたる座敷を設け、三幅一對四幅一對に、五具足の莊嚴を盡し、眞の臺子に依て唐土より泊戴せる名物を玩び、點茶の式を定められたるに始まる。而かも利休の佗茶を以て、四海に普及せんと謀りたるは蓋し中興のことなり。其法たる眞の臺子を略して臺目疊に改め、缺け茶碗を以て名器に代用せられたり。依之觀れば是、佗は末にして眞

の式は元なり。今日と雖も貴人長者は宜しく、眞の臺子に基きて點茶を樂しむ可く、貧賤は宜しく草庵一風の佗茶に安んず可し。各其本體の主旨は異ることなし。若し儉過ぐれば吝となり、佗過ぐれば染み垂れとなる。宜しく其分に應じて中道を步む可し。貴說の如く、單に質素儉約をのみ茶道の本體と守れば、客者を出し、濡ぼつき茶人を養成するの弊あり。茶道豈斯の如き無風流、殺風景の道ならむ。

上來三宗匠の說、未だ以て、吾が識認する茶道と其軌を一にせず。予元より茶道を悟りたりと謂ふにてもなく、只幼より茶を好み、茶道の眞理を愛し、聊か佛敎の糟粕を嘗めて、以て兩々共に日々參ず。されば共性來菲才にして且つ寡聞、到底大道を判斷する抔謂ふ程の卓見も無しと雖も、妙なるもので、一枝々凝視すれば木の幹を認むる能はず。山に登れば其全體を見ること得ざるが如く、茶道に執着すれば、茶道の體には眼の着かぬものなり。聊か執着を離れて、出沒活殺の自在を得れば、一目瞭然に識別することを得ると信ず。因つて、此眼光に照影する前三者の說を評せば、

以上皆各眞理あり。御尤の說なれ共、悲ひ哉、茶道の體とす可き一部分、或は用の一部分を說

き得たるに過ぎずして、未だ圓滿に及ばず。予をして是れを評せしめ、忌憚なく語を下さしめば三者の說は皆片輪茶人と名づけ、茶道の切り賣說と評せずんばある可からず。何を以て然るか、曰く甲は禪にのみ偏して茶味を說く。之れ大乘妙理解脫門の法話にして、世間的の茶事に暗き論なり。全く茶道の用を捨つ。即ち體用完備せざるの道は末だ圓滿の茶道と稱す可からず。乙は敬と禮とを說く。是れ用にのみ偏して、彼の和敬淸寂の、和と敬とを悟りて、未だ寂なるもの、何たる事を識らざる、所謂世間的小乘なるものなり。決して圓滿と稱す可からず。丙は處世的經濟に重きを置くの論にして、茶道の最下位なるものにして、未だ茶道の體として論ずるに足らず。何となれば、茶は經濟に應用し、家を如何程富有にするも、禮儀を飮き、心身の解脫を得ずんば愚痴の間に生涯を終らざる可からず。是れ圓滿の定義と許す能はざるなり。

以上の辨疏を再び翻覆するに、何程禮義作法點茶等の法に堪能なりとて、肝心の一雙眼、即ち禪道の悟りに暗くしては、茶を以て安心立命することも出來ず、さりとて、又禪智識方は、茶道を習はずして獨り上手に出來るかと謂へば、禪は禪の法、茶は茶の法にて、禪者必らずしも茶人と稱す可からず。茶には禮あり作法あり故實あり。一々皆世間的の應用を爲さざるものなし。果して然らば、予の所謂圓滿なる茶道とは、以上の三者を具備して、更らに其一方に偏せざる底の人にして、玆に肇めて其體と用とを識るものと斷定せむと欲す。然るに方今の茶家を見るに、多く其用に偏して其本體を解せざるものゝ如し。予之れを片輪茶人と名づく。本書は專ら其體を說くのみ。儻し夫れ誤解して、茶道とは如斯ものかと早呑込して、客觀的用を顧みざるなくんば、著者の意を了とする活眼の士歟。

一　茶禪論

本書は專ら、禪を基として茶道を說く。故に茶禪一味と名づく。然れ共、直ちに是れを以て、茶道は禪に外ならず、禪茶以外に茶道あらずとは早合點す可からざるなり。何となれば、禪的茶道は、實に利休居士的傳の神髓にして、茶道の妙味効能も決して此外に出づ可くもあらねど、茶道は後にも述る如く、而かく狹く解す可きものにあらず。中々廣き方面に涉りて研究を要するものあり。假令ば、曲尺割の故實、點茶の作法々式、料理懷石の業抔は、一向禪とは關したるものにはあらねども、是れを除外しては茶にならぬを見れば、茶即禪とは一概に稱ふ可からず。され

ど、以上の諸法を一切離れて禪的に看破し終る時は、又別に一風の禪的、茶道なるもの生ず。利休居士も、其眞意を了悟せられたるは、至て晩年のこと、見ゆれば、他流の茶人が、禪茶を以て外道視するも無理ならず。夫れ以上の如く、茶道必らずしも禪を以てのみ解する能はざるも、禪的、茶道は一切の法則を打擲して、世間法を離れ、禪學修行の爲めに、座禪工夫の方便となり、行住之れを執行して、煩腦を消却するの樂地を得。古來難行苦行を以て修行せざれば、到底得道開悟する能はざるの行爲を、易々樂々の間に透過し得るの兩得法なり。是れ予の多年茶禪を主張する所以にして、且休居士の遺志を發揚せんと欲する次第なり。利休の

茶の湯とは只湯を沸かし茶を點てゝ
呑むばかりなる本をしるべし

と云へる。其本とは何ぞ。此第一義を研究して後に非ざれば、其末葉は如何に巧なるも、茶道の宗匠とは稱す可からず。其本とは、是れを一言に謂へば、茶に依て、安心立命せん爲めの業なれば、本來の面目の究盡は、茶道茶の湯の本來ならむ。決して之れ茶湯興立の沿革を尋ねよとにもあらず、曲尺割臺子の根元の故事故實にもあらず、實に茶湯は禪的趣味を以て其生命とす。是れを禪的に考究するに非ずんば何れの所にか本を識べき。又曰く

打ち惠みし佛ならでは一枝の
荷葉の花に朝顏の花

釋尊の拈花微笑に依て、正法眼藏を傳へたる摩訶迦葉に比するに、茶道的傳の心法を以てす。嗚呼茶道も亦、八萬四千の大衆啞の如くにして、一人の迦葉を得ること夫れ此の如く難き乎。或は夫れ然らむ。其南坊に語る所を見るに、

休ノ玉フハ我モ七十ニ滿ル齡ナレバ堅固ナリトテ賴カタシ子供モイマタ茶道未熟ナリ今ヨリ二十年モットメタレバ器用次第ニテ茶ニモナルベシ其時此大事相傳ヲイッレノ子供ヘナリ所傳ヘ玉ヘトテ印可ノ一卷取出シ云々

聰利休に數千の未弟あり。十哲と稱する達人あり。而かも眼中十哲なく、末弟なく、肉身の子孫さへ無く、只一の迦葉としての南坊宗啓あるのみ。當時に於て既に的傳如此。三百歲の後に至て、果して傳燈滅せざるや否や。今の世の茶の湯とて翫ぶものは、一種の謔樂にあらざれば、婦女子の遊藝に外ならざるにあらずや。休曰く

露地は只浮世の外の道なるに
心のちりを何散らすらむ
三界の火宅を出てゝ白露の
かゝる所は松風そふく

とかゝる境界を設けて、茶三昧に入るにあらざれば、何とかして其元の研究をなし得らるる可き。されど予は、三界の火宅を出でゝ、山中に入て仙人氣取の茶人になれ抔の、迷はせを薦むるにあらず、只茶室の如きは車馬往來の街にても可なり。居室の一隅に爐を打ち開きたるにても可なり。只自己の心裏を別天地に遊ばせざれば、到底茶道の修業とは謂ひ難し。故に曰く

引かこふ籬屏風の只一重
浮世はさてもへだてられけり

とめ得れば心の奥の草の庵を
山深くとはなにおもひけん。

居士は更に又曰く

かへりみよ己が心の鑑板
本の心のありやなしやと

吾人は茶室に入て、研究一番す可き第一義は是なり。本の心、其本の心の有無の探索は、禪定の要素なり。次に一休は

寒熱の地獄に通ふ茶柄杓の
心なければ苦しみもなし

と自白せり。嗚呼果して本の心は無に歸せりや否や、一休の自白は正直なりや否や。吾人此自白を更に研鑽するの價値あるを信ず。茶室に入て茶柄杓を執る度に起る可き疑問は是なり。

居士又曰く

潔きよきいさぎよからぬ皆人の
心のうへの掃除なりけり
庭の面は拂ひもあへぬ松の葉に
中々塵のみへずも有哉

此道に交はる人の心をば
ふくさものにぞ成すへかるらん
何となく打ちこぼしたる水の音に
心のあかや除とるらむ
けがれたる心の塵の底とりて
人をもしめす和灰巾かな
羽箒に目に見ぬものゝかゝれるは
殘る心の塵やあるらむ
手をぬぐひ器を拭ひ〳〵とも
心の内の不淨なりせば

以上の道歌の、何ぞ夫れ深切なるや。吾等日々此考案に向て自問自答せざる可からず。心の底に塵埃の積むことなきや。身是菩提樹、心明鏡臺なりや否や。或は又菩提樹明鏡を破却し去て、一點の塵埃の附す可きなき境なりや否や。口にこそ謂へ、大方の道士たりとて、塵の上から敷松

葉、中々塵の見えずもあるかな。故に居士は

結びよる垣根の清水影みへて
心の底の恥かしきかな

と觀破せられたり宜しく居士の

軒端漏る天照月の御影にも
心晴れては耻へくもなし

と謂ふ境に達したる、世の僞りの茶人ならで、まこと得道解脱の宗匠こそ得たきものならずや。されど、昔より世に迷ひといふもの絶へずと見へて、利休居士も

折ためてすくはざりせば如何ばかり
世に迷ひなん罪の人々

數々の穗先に人や迷ふらん
茶筌の竹の本を忘れて

と示されたり。茶の湯の道は仕業事多ければ、其仕業の手先に迷ふて、其本を忘るゝこと、丁度

今の世に、大方の僧侶が、其法式にのみ迷ひ、其根元を忘れて教義を詮究するものなきに均し。見よ今時の茶人は、懐石は流れて酒食會となり、道具の品評會となり、互に悪口の穴探し會ともなりて、其交會するの意何れにありや、知り難き程なり。されば居士は

我庵は來らぬ人も來る人も
　親し疎きをいふ事もなし

何をかな饗應す可き奥山の
　ましらに頼む菓ならでは

簞にもり瓢に汲みたる物〳〵を
　唐の大和の饗應なるらん

露路數奇屋客もあるしもお茶ともに
　振やわらけて隔心もなし

懐石の通ひ口にも及ぶ可き
　物こをなけれ折敷一ひら

と誓め置かれたり、此歌意にてこそ懐石の本意たる可きを、又數奇屋露地の風情は、只佗を以て主とする、利休一風の別天地なるを、今の世、只佗を眞偽せる贅澤三昧の、茶人多きこそ片腹痛からずや。居士も其佗の眞意を漏らして曰く、

黒木もて建る心の中はしら
　居るにもあかぬ草の庵かな

埋火の置加へつる籠にこそ
　わらやの内もすみよかりけれ

棚一つ壁の隅なるつり竹の
　世は只假に佗てこそすめ

腰張に勝手障子も自つから
　有るにまかせる反古張かな

佗ぬればま來せて告けん方もなし
　心あれなと思ふばかりに

右の心持てこそ、佗の佗たる本旨に叶ふべけれ、然るを人は只、ひねくり返りたる木の柱に、何か意味有りげに思ひ、わざ〳〵南天の床柱を探し廻るおかしさよ、げにまことの佗茶人には、來ませて問ふ人なくて、僞せ者同志はうまの能く合ふこと笑止やな、まこと茶の湯をせん人は、先づ第一に心の業なることに心を留め、行住座臥の侶伴とす可きなり。三界出離の人は、却て其三界に安居す可きであるを以て。決して出家遁走、世俗を遠離せんことを欲し、或は、佗茶は斯樣なりとて、一向世務を怠りて、朝から晩迄茶三昧に入ることも、無用の迷ひなり居士は

呉竹の其浮き節をすた〳〵に
引切てこそ茶の湯なりけり

と歌はれたり、此斯觀破してこそ茶人なり、一日の内一時たりとも、本來の面目に向 詮索する茶をば飲みたきものなり。飲むならばついでに、三千大世界を一口に吸盡したきものなり。居士も

たゝへたる茶の色のみにか一口に
空のみとりも海のみとりも

と何ぞ其聲の壯なる、茶の道禪の法只是のみ。かゝる難有き茶湯ならで、只手業の傳授や、曲尺割等のみを秘傳抔思ふも、いまだ皮相の見たるを免れざる小乘底の茶なり。故に居士も一と先は

さま〴〵の仕業事わざ中々に
口を結べる袋棚かな

と曲尺割の秘傳、此袋棚に包含することを漏すと同時に更に

大方の數の外なるかねの音に
霜夜の覺る曉の空

と觀破して、曲尺にくゝらるゝも悟に遠きを示されたり。されどかゝる消息は到底、師傳による可きものにあらず、所謂以心傳心の法則、教外別傳、不立文字の心法たり。されば居士は

岩つたふ苔の細道あとたへて
問ふ人もなし待人もなし

住や誰れさ山幽にほのめきて
曉すごき燈火のかげ

目にかけて分越山の嶺の松
陰ふむばかり成にけるかな

と其修行の有様を實驗的に示されたり。是とても其道に入らぬ人は、一向何等の意たるを解するに苦む。されど

何方も定めて明けしまどもなし
月と雪との影にまかせて

閉ひらく心のまゝに成にけり
開は千々の里の山風

山遠き道の往來の中宿とり
心止べきぬしもなければ

雲滿る洞のうちなる松風の
聲ばかりして夕暮のそら

あかつきの窓の嵐音さへて

殘るも細き燈火のかげ

水指のさすかにすめる心とは
汲まむ先より人やしるらん

野も山もひたし入たる筒の中に
花は心と生出にけり

朝な夕な吾が白露地の玉箒
有とは見えて逢人もなし

抔と一々工夫の結果を示して、見る物觸る器によせて、自由自在に說明せば、聊か這般の消息を窺ふに足らん乎、嗚呼茶道とは、かゝる面白き心の業なるを、手先の業や器物の品評、料理の巧拙にのみ心を寄する迷ひ者よ、夫れ故にこそ居士は

釜一つあれば茶の湯はなるものを
數の道具を求むつたなさ

茶なくは鍋湯なりともすくなれば

夫こそ茶には日本一なり
手や口で茶をする人は多からん
心の茶の湯する人そなき

と親切に訓示ありき。予は固く信ず。茶は禪法と離れては、到底利休居士の流儀にあらざるを、實に禪は茶道の命脈たり生命たり、予の本著ある蓋し故なきにはあらざるなり。

一　茶道の沿革

夫れ喫茶のことは、既に支那にありては、盧仝陸羽の煎茶法あり、本朝に於ては、榮西禪師明惠上人茶種を唐土より齎らしたる歴史ありと雖も、這は只其物を喫したる事實に止まり、未だ茶を喫するの法を以て、道を說きたるに非ざれば、之れを茶道の起原とは稱す可からず。抑も茶道の起原は、足利義政公時代に於て、南都稱名寺と云ふ寺院の禪僧、珠光なる者、京都紫野大德寺宗純一休和尙に從ひて、出塵悟道を工夫しけるに、珠光結跏趺座の間、常に睡眠禁じ難ければ、之れを某醫に質すに曰く、睡眠を自除するは茶に加かずと。珠光是れより、常に喫茶を以て座禪

するに、果して効驗ありければ、夫より以後、行住座臥喫茶を怠らざりけり。此頃大德寺に臺子なるものあり、誰ありて其何の具たるを識るものなし。傳へて謂ふ、是れ禪家の淸矩に基く點茶具にして、禪僧の唐土に齎らし、筑前博多の崇福寺に在りしを、遂に大德寺に傳來せるなりと。珠光是れを見て、此器決して他具にあらず、點茶の用に供す可しと、種々工夫考案の結果、茶を細抹にし點茶すその法を發明し、之れに加ふるに、禪家の淸規に基きて、主客の禮、座作進退法に至る迄、法式を制定し、又た曲禮の書に鑑みて、規に中し矩に叶ふ組織を完成せり。於レ之か、益々喫茶を以て且座に比し、二六時中點茶三昧に入るに至る、或る時一休之れを見て、珠光に問ふて曰く、喫茶旨無の時甚麼と、珠光無言にして去らむとす、一休更らに喫茶去の時甚麼と、珠光答へて曰く、柳は綠花は紅の眞面目と、更に珠光の喫茶了せんとするを見て、一休鐵如意を振つて茶碗を破碎す、珠光自若たり。一休始めて茶味の禪味なるを知て、珠光に印可し、且つ圓悟の墨跡を與ふ。是れ吾が禪的茶道の起原なりと。

一　茶道の興立

時の將軍慈照院義政公、應仁の兵戰平定するや、國家の太平を機として、東山に銀閣寺を建立せし抔、驕奢に耽り、唐倭の重寶招かずして集り、歡樂願ふて叶はざる事なきに至りて、遂に遊樂の道盡く。時に世に茶道なるものあり。以て遊具となす可きを聞き、其堪能の名ある珠光を召して其法則を問ふに、珠光其本旨を以てす、即ち珠光茶論に曰く。

將軍義政公召レ光問曰茶事可二得聞一耶。光曰。一味清淨。法喜禪悅。趙州是知已、陸羽豈得到其佳境一耶云々。源公忻然恨二逢之晩一云々

義政之を能阿彌相阿彌の徒に傳習せしむ。能阿彌より珠光に傳ふとの異說もあり。然れ共、未だ當時は、充分點茶の法式完備せざるが故に、是等の諸人と相協議して、上中下八段の臺子を撰定せしめ、曲尺割の法則を定め、始めて點茶の法則確定し、尙書院飾の法則を定めて、珍器重寶悉く集め、玆に將軍の玩具としての法則は、漸く完成を告げたり。

一　茶道の分派

茶道既に完成を告げたれば、義政公も深く珠光の道を信じ給ひ、能相の徒と共に之れを行ひければ、上の好む所下之れに倣ふの諺によりて、時の大小名を始め、都鄙遠近に及ぶ迄、風流慰翫の具とし流行せり。然れ共、義政公は其身天下の權を掌握するの所を以て、前に述べたるが如く、希ふて成らざるなく、招て集らざるなく、八疊の座敷に玉璫の唐八景の八幅對を掛け抔して、書院に古今の名器を陳列し、驕奢其極度に達したれば、爭でか下之れに模せざる、上下遂に其分限を忘れ、珠光の制定せる禪的茶道の本旨も、あたら其影跡を止めずなりぬ。纔に其本意を傳承せる者、引拙、其哉、宗把、宗陳、宗悟、紹鷗の一派あるのみ。然るに一方に於ては、義政の顧問とも稱す可き、能阿彌相阿彌は、將軍の權威に因て、彌々其勢力を增し、之れを宗海道陳等に傳へて、其名四海に震動す。於レ是乎、珠光一派の主觀的茶道と、能相一派の形式的茶道の兩派、自づから分立の萠芽を生せり。

一　茶道の大成

夫れ茶道は、一休和尙の敎化と、珠光の工夫に成れるは旣に述べたり。然れ共、其事たる遠く義政公時代に在りて、其後引拙、其哉、宗把、宗陳、宗悟、道陳等の輩、幾百人の茶家續出し二百

有餘年の後、織田信長の時代には、茶道は既に、能相派の末流、即ち東山流なるものと、珠光の末流なるものと、兩々其趣を異にし、各々混乱し、何れを正と定め難きに至れり。其間に於て、田中與四郎即ち千宗易なるものあり、東山の末流なる北向道陳と、珠光の末流なる紹鷗の兩家に就て、斯道の蘊奥を極め、之れに加ふるに、大德寺古溪和尚に參禪して、遠く珠光老の茶法に直入會得したりき。然るに、織田信長公亦茶道を好まれければ、此茶道の混乱を觀て、千宗易に命じ、之れが改正を爲さしむと雖も、遂に成就するに至らざりき。豐公の天下の權を掌握するや、其志を繼ぎて、再び茶道の改正を千宗易に命ず。於レ之宗易、山上宗二藪内紹智等と謀り、古今の過不及を調査し、上は王公貴人の嘉子より、下は庶民の佗茶に至る迄、悉く改正訂定を成就しければ、豐公之れを城内山里の茶屋に於て講述せしめ諸大名高家を始め、小名都鄙遠邇の隱者閑人に至る迄、悉く神誓を呈して拜聽を許す。（藪内流山里棚は當時の紀念物なりと）於レ之、積年の茶弊混乱は一掃せられて、茶道の完成は全く玆に告げられたりといふ。

一　茶道の本旨

千利休一度世に出づるや、既に述べたる如く、傳を北向道陳武野紹鷗に受け、其蘊奥を極め、又古溪和尚に參じ、大悟徹底するに迫び、益々珠光の茶禪一味を了得し、茶道を一切禪門の法式に象り、古來の關門を悉く打破し、奢侈的をして質朴的にし、貴族的をして平民的にし、複雜的をして單純的ならしむる抔、一切間然する所なきにおよびて、上は豐公を始め、大名小名、下は庶民に至るまで其門に入り、天下の茶道は呼ぶ者なくして利休流たらしめ、全く茶道を統一す。而して其說く所、風流慰藉の娛樂者を以て外道とし、此道に安んじ、性を全ふし、行を修め、禮を知り、天に參じ地に同するを以て本旨とし、謙虛以て家に居り、簡約以て身を保ち、嗜好を儉にして情慾を恣にせず、言語を愼みて交遊を濫りにせず、處世の始終一點の私を容れず、從容として道に中する底の大丈夫を以て、眞に斯道に參究せる人と稱す。然るに今や、世間の茶道は、その本旨を失ひ、利休の所謂外道に墮し終らんとす。留意せずんばある可からず。

一　誰か茶道を怯惰の法と謂ふ

怯惰とは元來勇武强膽に對する文字にて、所謂無膽力の義なり。茶道は、果して人を斯る軟弱無

膽に陷るの法なりや、請ふ少しく之れを述べむ。抑も怯惰の因て起る所は、心理上の恐懼驚愕に誘導せられて、神身に激動を與ふるの謂なり。而して、神身の激動するは、蓋し肉體的膽力の缺乏に原因す。彼の武藝の極意と謂ふも、畢竟劔術の手段に依て膽力を養成するものにして、如何に其術に妙なるも、膽力の缺乏する時は、之れ全く一種の手先の技藝に陷り、未だ以て武道の達人とは稱す可からず。茶道も亦然り。其極意を極めず、末熟の手先の技術と心得る者には、到底其眞意を語る可からざるも、前説に述ぶる禪法の一端を了悟せば、思ひ半に過ぐるものある可し。既に茶道は武道に均しく、膽力養成の法たるを説けるを以て、是より聊か其實例を示さんに、彼の柳生但馬が澤庵和尚に參究して、劔道の極意を悟り、山岡鐵舟居士が、滴水獨圓禪師に參じて無刀流の蘊旨に達せるが如きは、蓋し膽力養成に効あるを證するに足れり。之を茶道にしては、珠光が點茶し將に喫せんとする一刹那、一休鐵如意を掉つて破碎するに、從容として自若たりしが如き、或は利休の點茶中、加藤清正試みに長穗の鎗を不意に眼前に擬したるに、更に猥狽の色無かりしが如きは、今日尚逸話に殘遺する所にして、甚麼に劍道と、其膽力の養成法に於て相伯仲するかを證す可し。論者或は謂はむ。説聞くことを得たり。然れ共、其何が故に點茶は膽力養成の一助と成るかを識らずと、予之れに應へて曰く、茶道は既に述べたるが如く禪法にして、喫茶且座の間、無念無相氣海に氣を込め丹田に力を養ふが故なり。蓋し丹田は膽力の潜む所たるは、古來既に定論あり（丹田のことを詳細に知らむと要せば白隱禪師の夜船閑話を一讀す可し）夫れ然り、而るを論者尚茶道を以て怯惰の法と謂ふ乎。

一　點茶は禪法なり

和漢共に、禪家と喫茶の關係を離れざるは、其因緣を知るに由なしと雖も、趙州は悟道と喫茶去と説き、或は百丈の清規に茶禮の法則あり、又本朝に茶種を擠したる榮西禪師は、喫茶養生記を著はし、拇尾明惠上人は、茶の十德を説く等、擧て數ふ可からず。夫れ斯くの如く、茶は禪家に依りて世間に紹介せられ、以て今日の傳播を見るに至りたりと雖も、此事に依りて、直ちに點茶の法は禪家に叶ふとは稱す可からず。而して點茶の術も、支那に於ては陸羽蘆仝によりて研究せられ、其未流我國に於ては、賣茶翁、近くは小川可進等に因りて行はれ、現今に至りて、益々文人墨客の賞翫する所なれ共、煎茶のことは暫く措く。玆に點茶と稱するは、抹茶手前の事と知る

可し。曩きに述べたる如く、我國に於て、點茶の術を以て禪法に叶はしめたるは珠光にして、禪法を茶道に遷したるは、蓋し紫野大德寺一休禪師の敎化なり。論者或は曰はむ、禪家既に禪定のことあり。以て悟道を得可き法則完備せり。何を好みてか之れを茶法に托すると。蓋し是れ座禪を實修したることなく、又茶法の妙域に達せることなきの語なり。夫れ禪法とは、自性を了解する術なり。本分を證得するの觀法なり。妄想を退轉するの方便なりと雖も、元來此座禪たるや、大上根大上智の士に非ざるよりは、彼岸に達すること難し。古來幾百萬の禪僧中に於て、解脫の智識宗匠と稱せらるゝ名僧は、實に曉天の星も啻ならざるを見ても、座禪の甚麼に致難の業なるかを證するに足る可し。既に佛道專門家にして爾り。然るを俗人に於ては、到底爲す能はざるの難道たり。實に天竺に於ては、維摩居士、支那に於ては龐居士あるを聞くも、本朝未だ大解脫の居士幾何もあらず。抑も斯の如く、座禪の至難なるは其理多しと雖も、要するに妄想臆念の爲めに三昧の境に入り難きに在り。故に禪家にては考案なるものを師に授かり、其考案三昧に入るを以て方便なとす。蓋し考案其物は、戶扉も開くの瓦礫なり。一休の考案に成れる點茶は、實に此趣を遷したるものにて、茶器を扱ふ三昧に入りて、本性を觀ずる修行と爲したるに外ならず。

珠光は實に之れが實驗家にして、茶に依りて一休に印可を得、利休は古溪和尙に參じ、茶禪の體を得たり。若し茶道の點茶にして、禪法に叶はざらんか、余は何の爲に、窮屈なる手前を爲すかを知らざるなり。而かも、點茶は空寂として觀法するの苦痛に代ふるに、最も趣味ある作法を以て、樂々たる愉快を得つゝ、之れを修ずる便法なれば、老若男女之れを爲す可く、貴賤貧富道を求む可し。如斯茶道は、單に禪理に起因するのみならず、茶道の法式、一切禪家の法則に倚り又容器を始め、無寶主の茶。體用。露地、數寄。懷石等の名義に至る迄、悉く禪家の用語を因襲したるを考ふるも、茶道と、禪の關係の一班を窺ふに足る。詳細は、章を追ふて述ぶる所あらむ。

一懷石の文字

抑も茶道に於て、茶の湯に出す料理を、古來懷石と稱する理由を考ふるに、蓋し多少の沿革を有す。即ち懷石の文字、元と茶會に起る。何れの時代より、懷石と改めたるかは攻究するに由なきも、喫茶往來中、掃部助氏淸の尺牘に、昨日、茶會無二光臨一之條。無念之至怨恨不レ少云々は、是

れ茶會の權輿と謂ふ可く、其返書彈正少弼國能の尺牘中、御札之旨委細令二披見一候、訖度抛二萬障一可令レ參會一之由相存候處、不慮之外客以來之處、兼日之蓄念一時相違、對二彼賓客一徒雖レ企二諸談一、心者在二御會席一云々。此御會席の文字は共に茶會に對して亦權輿なり。而して其茶會の狀を記して曰く、（前略）亭主之息男獻二茶菓一梅桃之若冠通二建盞一、左提二湯瓶一右曳二茶筅一從二上位一至二末座一獻レ茶、次第不二雜亂一、茶禮將レ終則退二茶具一調二美肴一勸レ酒、飛レ盃先三云々と。編者案ずるに、是れ當今の茶禮に非ずして、所謂古代の茶禮なれ共、其今日の茶事に同じきは明かなり。蓋し此會たる非常の華美なる盛會なりしは、仝書に載する所なれば、今日の佗的茶會と其趣を異にす。故に後世此奢侈的會席に區別せんが爲め、懷石の文字を撰み、音相通せしめたるものならむ。而して其懷石の文字は禪林に出づ。即ち禪堂に於て、朝の食事を藥湯或は施粥と稱して粥を喫す。晝飯は齋又之點心と稱へ、晩餐を藥石と謂ふ。抑も何故に晩餐を藥石と謂ふかを原ぬるに、佛教の源地たる印度支那に於ては、一日に二食なり。然れ共夕刻に至れば聊か空腹の感あり、此時溫石を懷中すれば、溫氣腹部に生じて、漸く其期を凌ぐことを得、故に藥石といふなりと。反レ之我國に於ては、古來三食習慣あるを以て、二食にては堪ふることを能はず。こゝを以て纔かに空腹を凌ぐ可き食を喫して、溫石に代用するを以て藥石の名あり。然るに茶事に進むる料理は、必らずしも晩餐に限らざるも、利休の所謂、食は餓えぬ程との語に基き、腹八分目の粗末なる料理を進むるの意にて、之れを禪林の藥石に比したること、恰かも俗家に於て、粗末なる料理を晩菜と謂ふが如し。而かも之れを藥石と稱へざるは、茶の湯に晩餐に限らざるが故に、客に對し卑下を以て、溫石を懷にせらるゝ代りに、粗飯を獻ずるの謂なり。

一　數奇の文字

凡そ茶道に、數奇者と謂ひ、數奇屋と稱する其文字、數奇或數寄と書す。果して何れが眞なる。之れを諸書に詮索するに、其所說粉々にして歸一せず。其二三を錄して後、之れが斷定を下さむに、先づ數寄と書するは、茶會には名墨珍器の類を、數多寄せ集めて以て樂しむの道なるが故に數寄の名ありと謂ひ、之れを藏する人を數寄者と稱すと、蓋し東山流の所說なり。一說に曰く。佛法は自己心性の奇妙に參じて解脫す。茶道も亦禪法に起り、珠光一休に參究し、茶道の數〻此奇妙の道理に叶ふの法門なればこそ、數奇と名づくなりと。是れ理無きに非ざるが如しと雖も、

附會に過ぐ。又凡て物を好むを、俗にすきと謂ふ。即ち嗜むの意にて好き嫌ひのすきの義なり。古物を好む人に好事家の稱あり。別けて茶家は道具好き多きが故に、數奇の文字を無意味に附會せるなりと。更らに一說あり。奇は陽數にて偶數に對す。即ち調半の半にて、物の對せざるの意彼の佗茶人の萬事調はずして、半數なる所謂物足らぬを表し、數奇屋は物不調の家屋の稱にて、數奇者は小欲知足の人を指すなりと、就中此說隱當なりと覺ゆ。故に拙著茶家鑑定便覽自序にも數奇一作レ寄又通二于器一。指下安二淸貧一而樂二器物之不偶一茶家上謂二數奇者一。寄二集數多器物一喜レ之人即謂二數寄者或數器者一。和音相近而其意懸隔甚矣云々と錄し、最後に斷案を下して曰く、要するに、數奇と數寄何れにしても、自己の器量と分限に應じて、甚麼に解するも可なり。文字上に於ては悉く一理あり。卽ち數寄は萬葉假名にて、嗜の謂なれば何にても物を好むをすきと稱す。茶を好む人は茶好き、酒を好む人は酒すきにて可なり。又道具珍寶を數多寄せたるを道具數寄、奇妙を悟るも數奇者、佗人にて物足らぬ道具を愛し、小欲知足に安せば、數奇と稱するも尙可なり。要するに、暫らく文字の葛藤を離れ、其分に應じ、宜しく茶道の本旨に向て工夫し去れ、文字以外に於て、數寄の本體を自覺することを得可しと。蓋し著者も亦說を好む人なる哉。

一露地の辨

茶席に附屬して、露地と稱する物あり。飛石を以て步行の路とし、蹲ひを設けて手水を遣ひ、或は待合を設け中門を造り、樹木抔植込みて、自然の景を作爲せる所の總稱なり。抑も露地の名稱を案ずるに、元是れも佛說に出づ。法華經譬喩品の卷に、長者子三界の火宅を出でゝ露地に座すとあり。又同卷に白露地の字多く散見す、蓋し一身淸淨にして、無物底の境界を指すなり。即ち在家の俗塵に居りて、煩惱の火焰を火宅と稱し、之れに對する出世間の山中淸淨の地を露地と稱したる迄なり。又有露地無露地の稱あり。一休和尙の名の依て起りたるも、「有露地より無露地にかへる。」と休み雨降らば降れ風吹かば吹け」の道歌に基づく。皆佛法の悟りにも別に仔細あるにあらず、故に在家の泉水、及び庭園を露地と云ふことなし、庭外或は面砌など辭書に見えたり。古來寺院には、露地の號ありたりと雖も、考ふるに茶道興立以來の稱なる可し。何となれば、寺院には多く結構の書院の設けありて、緣先きにも之れに準じたる庭の設けあり。一風の露地的質朴の庭抔は、古寺院に見受けざる所なればなり。茶席は露地を附屬せしめ、兩々相待て、世間

の塵界を離脱せしむる方便となせるは、休利居士の創意にかゝる所ならむ。即ち利休の歌に、「露路は唯浮世の外の道なるに心の塵を何に散らすらむ」とあり。此文字こそ能く露地の本意を説きたるものなりと謂ふ可し。

一　茶の湯の文字

茶の湯の文字の、禪家に始まりしは、百丈清規を繙く者、點茶、點湯、茶湯、燒香、拈香、喫茶等の文字、全卷に有るを以て知る可し。點茶、喫茶、茶湯等、皆原字の儘採て今日之れを茶道に用ふ。文字上深き意味あるに非ず。只茶を點じたる湯と云ふ迄の義なり。故に薄茶一服は無論晩茶の煮出し汁亦茶の湯なり。然るに今日にては、茶の湯茶事と云へば、單に薄茶一服を意味せず。少なく共懷石を出して、濃茶薄茶を振舞ふことをのみ指して、茶の湯と稱し、薄茶一服の如きは、殆ど茶の湯とは稱へざるものゝ如し。是れ今日のみならず、古來其別ありたるものと見え利休居士も「茶の湯とは只湯をわかし茶を點て、飲む斗りなる本を識る可し」と敎へられたり。蓋し其當時に於ても、茶の湯の枝葉に奔りて、本を忘れ居る者に示されたるなり。又宗旦翁は、

茶の湯は平常に在りと說かれ、行住座臥是れ茶の湯なるを敎へられたり。予は曩きに體用を辨じたり。今更に茶の湯に於ても此兩儀を分たむとす。即ち今日の茶の湯は、只客觀的の儀式を指すものにて、利休の所謂、茶の湯の本とは甚麼なる意を謂ふにや、曰く圍爐裏に釜をかけて、間斷なく湯を沸かし濤らし、能く心を用ゐて油斷せず、其湯の清淨潔白なるの意を謂ふ。果して然らば、人々各其境界に應じ、士農工商其職業を圍爐裏となし、以て其行ひを炭下火として、已れ之れが釜となり、心を湯とし、暫時と雖もぬるむことなく、行住座臥四方八面、二六時中心を濤らして、勉む可きを勉め、勵む可きを勵む。是れ茶の湯の本意、所謂主觀的の茶の湯とは謂ふかゝる道理を分別せずして、茶の湯とは只飲食することゝのみ心得、枝葉の末技に耽り、今日は茶事明日は茶の湯と、格別に事改めて隱者の眞似、老人の逸樂を以て、茶の湯の極意とし、遂には器物狂となり、飲食病となり終る。故に世間の活眼者の擯斥を受け、無用の長物視せらるゝ所以なり。畢竟茶の湯は其分に應じ、業務の餘暇薄茶一服を喫し、煩惱妄念を拂ひ、清淨潔白なる日常の行爲を謂ふなれば。別段に茶の湯とて、事改むるにも及ばざるなり。平素日々新たに清淨なる心を持つ時は、客有りとて、何ぞ必らずしも狼狽するを要せんや。餓し來りて茶を供し、餓

來りて飯を呈し、清談時を遷すこそ、是れまことの茶の湯なる。利休の言葉にも、茶の湯といへるは湯を沸かして心をたぎれ〳〵とあるのみ。

一　草庵の意

釋氏要覽に曰く、草を以て座を掩ふ、是れを菴と謂ふとあり。草菴は出世間の住宅にして。自然の妙所なり。茶道は世間的の觀念たる、四惡趣の煩惱妄想を出離するの內觀法なれば、之れを靜養するには、外界を寂境ならしむるを以て効あり。又茶は、質素にして儉なるを主義とすれば、自然其構造を、山林避邑の茅屋に模し、小欲知足身を安んずるの住所とす。故に草菴は露路の中にありて、其菴に入る者は、自づから神心清淨にして寂滅するの感あり。元より山間溪聲を聞く所なれば、其境相應ず可しと雖も、隱逸の仙士ならざるよりは得て望む可からず。されば、之れを住宅の露地に設けて其趣を移し、遠く歩みを山間靜地に運ぶを要せず。十字街頭俗塵を却けてこそ一段の面白味あり。「悟りなば四條五條の橋の上往來の人を深山木にして」といふ妙所に叶ふ工夫なり。かゝる次第なれば、竹の柱に茅の屋根、荒寸莎壁の不器用なる建築にてこそ面白け

れ、今日の如く、床柱は檳榔樹、天井は薩摩杉、茶道口が何寸で、此柱が何分と、八釜敷なりては、既に草菴の本意を失ひ、全く作爲物となりて自然の妙所に叶はず、予は京都滯在中此草菴の問に答ふには、常に庭前の山服にある傘席を實見せしめて、其意を語れり。抑も傘席時雨亭は嘗て豐公伏見桃山に、金瓦朱樓の玉殿を築くや、茶席を利休に命じたり。利休此積極的驕奢の普請に對し、消極的に質朴の席を好めるは此席なり。時雨亭は、天然木を以て構造せる高樓たり。床に圓窓を設けて、淀川の曳舟を望む可く、三方障壁なく、時雨來れば袖を濕す可し。蓋し其名ある所以乎。階を下りて廊は傘席に連續す。席に安閑窟の額あり。栗の皮附丸太を以て四方を結び、同じく栗丸太を横へ、其中央に一本の枝木を直立せしめ、其頂上より竹を傘の骨の如く、幾條となく四方に下し、之れに茅を以て屋根を葺く、內部より之れを見れば、恰かも大傘の裏に在るが如し、其名の因て來るも亦茲に存す。其不器用其無法、若し是れ利休の作に出ずんば、人以て何とか云はむ、必らずや下すに茶席の名を以てせざる可し。而かも之れ天下の名席、豐公の愛遺なりとす。果して其價値ありや無しや、曰く客觀的價値としては半文錢に當らずと雖も、其能く自然に出でゝ、草庵の主旨に叶ふに至ては、蓋し他に其比を見ざるものなり。斯く賞

嘆すればとて、世人直ちに之れを眞似し、贋せ茶人となる勿れ。

一　四疊半は茶席の根元說

本朝の茶席は、東山銀閣寺東求堂の四疊半を以て濫觴とす。蓋し古來各禪家に於て、方丈室あるより之れを茶席に移したるものなり。以來茶席は、此禪家に緣故ある、方丈の室を以て眞と定む。抑も禪家に方丈の室ある所以、及び茶室を方丈とせる次第、並に四疊半を方丈と謂ふ義に就ては、諸書其詳說を見ず、然れ共、聊か考證せる一班を記すれば、維摩經不可思議品に、維摩詰丈室に三萬二千の獅子座を設け、文殊菩薩を請す云々とあり。即ち四疊半裏に座禪して、三千大千世界を呑却して、自由自在の活達を得るの譬喩なり。故に禪家の住職は、常に此室に座禪し、大衆茲に皆入室するを法とす。禪僧を方丈と稱するも、常に此室にあるを以てなり。而して方とは天地の四方にして、一は萬物の始め、丈は長さを謂ふ。即ち一丈四方の略訓なり。然れ共此一丈四方は、室內の一丈四方に非らずして、地形を一丈四方に築き、其上に內則九尺四方の室を設け、其中に三尺四方の敷瓦を九枚並べたるものにて、日本にては、疊を四枚半敷く、蓋し疊一枚は三

尺四尺の瓦を二枚分にて、中央の半疊のみ古式を存す。(後世能阿彌臺子に基き一間を六尺三寸或は五尺八寸に改む)四枚の疊は東西南北に象り、中の半疊は中央を表するなり。即ち九枚の瓦を以て九天に配す。かゝる次第なるを以て、道に禪意を寄すると同時に、此四疊半を以て亭主の行住の室と定め、且座喫茶の間に大悟せしむる方便とは爲せり。故に方丈は茶席の根元にして、又眞の席とす可き所以なり。

一　捨虛取實傳

佛敎に於ても、四千餘卷の經文は、畢竟佛祖の涎唾に過ぎず。又聖賢の經典は、是れ悉く藥の効能書のみ。されば佛敎の要は安心を求め、聖賢の敎は道を行ふにあれば、悟入達道の曉は、經卷經典は既に其必要無きに至る可し。而かも如何なる金科玉條の寶典と雖も、悉く書を信ずれば書無きに如かずの語の如く、糟粕多きものなれば、宜しく之れを取捨辨別して、自己の營養に供せざる可からず。況んや人の言語に於てをや。故に茶道に於ても、古來其書に乏しからずと雖も、一卷中二三の粹を拔かば、他は悉く陳腐の糟粕たるを免れず。爾れば之れに依て後進者

を教導するの、宗匠家の說たる、利休の涎唾に非ざれば、自家の揑造說なり。されば此道に達せむと思ふの士は、古來の先輩の說を博く見聞し、一紙片言の取る可きは、悉く之れを求めて、其奧義を探究すること秘傳なりと雖も、其書籍の玉石混淆を鑑別し、師傳の誤謬を辨識する底の悟道を得ざれば、彼の經卷を以て佛敎の眞理を得たりとし、聖賢の經典を繙きて藥の効能書に均しきを解せざると何ぞ撰ばむ。道歌に曰「習ひをば塵埃とそ思ひかし書物は反古腰弘にせよ」と。余の捨虛取實傳、蓋し此意に外ならず。

一　意進理進業進

意進とは、凡て智力の感情に訴へて、自己を目的の遂行せんと欲する心理作用なり。理進とは、其目的を遂行するに當りて、之れを理論即歸納演繹の理法より推究して、確實なる實行を爲さむとする應用方法なり。業進とは、以上の意進理進の結果なりと先づ前提して、次に茶道を稽古せんと欲する人は、宜しく此順路によりて進むことの、最も捷逕にして且つ、確實なるを信ずるが故に、玆に聊か其理由を述べむに、先づ何事を習ふにも、此意進力に乏しければ、必らずや中途障碍の爲めに絕望するものなり。之れに反して、意識を皷舞して猛進せむか、常に活氣を帶び企望に伴ふ愉快を生じ、決して困難障碍に破るゝことなく、却て反對に意進力を勉むること、例へば炎々たる猛火は、風力の消す能はざる所にして、却て火勢を增進すること一般なり。然るを道に入るの目的薄弱にして、意進力なき者は、常に障碍を口實として中絕するものなり。若し道に熱すれば四圍何の障碍か之れあらむ。而して此意進に次て要するは理進なり。如何に目的希望强固なりと雖も、之れを究めざれば餓して食せざるに均し。何れの日か腹に滿つることやある。宜しく之れを自己の學識知識に訴へ、以て推理研究す可し。然らざれば、決して古今を凌駕する底の達人たるを得ざる可し。卽ち自から之れを研鑽したるに非ずんば、古人の糟粕今人の涎唾のみ。是れ凡ての事實を學ぶの秘訣なり。夫れ然り、以上の意進力に因りて理進むの結果は必然的業進むなり。然るに今日世間の凡ての事を稽古する有樣を考ふるに、少なく共三者の內二者の缺乏せるを見る。卽ち意進理進の二要素を飲き、漸くにして業進をのみ他人に模せむと欲す。先づ茶を習はんとする人曰く、我れ客になりたる時、耻辱を取らざれば可なりと。比々皆然らざるはなし。既に自から希望を捨つ、其達す可きの度知る可きのみ。佛敎に於ても、以上三要素は佛果を

得る必要條件なり。希望の强固を大願發心と稱す。故に此發心よりして大願を起すに非ずして、彼の親が數多の子供あるを以て、坊主にでもせむと云ふ。所謂でも坊主なるものは、自から發心したるに非ざるが故に、强固なる希望ある筈なく、從て佛果を得るに難し。又暗照として、佛敎の敎理を辨せず、只默然として座禪したるのみにては、到底佛果を得ず、必らず以上發心大願に伴ふ工夫によりて始めて安心を得、是れを大願成就と謂ふ。諸道理は一つなり、予が茶道に意進理進業進の順路を說く所以、蓋し此理に外ならず。然るに此三要素は、決して順逆あるに非ず。時として、業進理進意進と轉倒して上達することあり。即ち無意識に稽古したるに、次第に業進むに從ひ理進み、遂に意進みて妙所に達することを得ざるに非ず。例令ば彼の最初はでも坊主なりし者が、眼に一丁字無くして、座禪の結果悟りを得るが如し。然れ共、結極意進理進業進と循環して靜止すること無きものなり。即ち意進むに從ひ理進み、理進めば即ち業進み、業進む時は意從て進むが如く、終始循環すること幾度かにして、遂に大悟するなり。大惠禪師は大悟十八遍小悟其數を知らずと、蓋し此回數を謂ふなり。

一　點茶は無念無想の法

凡て點茶の秘事は、此無念無想の外なし。無念無想にして、一段の點茶出來得れば、是れを手前の達人と稱す。彼の異樣の點方を多く記臆したりとて、決して名人とは云ふ可からず。然らば無念無想とは如何なるか、何も思はぬ事なるか、即ち座して空々寂々眠れるが如く死するが如きものか、否然らず、死物となりては活氣なし、無心無意と混同せざることを要す。斯の如きを默照の禪と謂ふ。「念もなし思ひもあらぬ空々に有るは風勢の行衞なりけり」にて、例令ば仰で天を望むに空々たり、無一物か、否空氣あり。空氣を排除すれば甚麼、曰く勢氣あり。勢氣無くむば甚麼、眞如實在す。眞如も無くんば甚麼、是れ斷見の外道に墮す。人も妄想も臆想をも排するも、尙本來の面目其內に存す。本來の面目無くんば死物なり、故に曰く初心の無念無想は空々裡、寂々底の無心にして、達人の無想は空々裡中寂々底中の有心なり。是れを佛敎にて有心の心無心の心と謂ふ、「思ひもよらぬ巧みもあらぬ無想には虎さへ爪の置所なし」とは、劍客の口にする無念無想の傳法なり。茶道の點前も、六寸の寶劍を握て、主客共殺するの眞劍勝負なり。死物の體を以て能く當る所にあらず。上手ぶらむとも粗忽すまじとも、自慢巧者の妄想抔も排して、有心中の無心、即ち眞正の無念無想にて手前をなせば、五體の活氣客の氣を呑殺す。是れを氣位と謂ふ。

一　主客氣位の事

氣位とは、前節に説きたる如く、無念無想の自在を得たる時に於て、無象の活氣身體に生じて、對人を呑却する心地なり。彼の劒客が氣を丹田にこめて身を構ふるや、實に當る可からざるの氣位を生ず。是れを劒道に氣當りとも稱す。此氣當りを以て對すれば、身寸鐵を帶びずして敵の氣を奪却すべし。彼の荒木又右衞門が、奉書の紙を以て敵に對したる、利休が拵杓を構へたる時は一寸の隙もなくして、切り込む所なかりし抔の逸話も、皆此理に外ならず。點茶に於ても主客共此氣位を要す。是れを俗に客の氣を呑むとも、或は客に呑まるゝとも云ふ。試みに先づ自已の氣位を驗せむと欲せば、高臺に登りて幾百人に向ひ辯舌を弄せよ。初めは必らず聽衆の爲めに氣を呑まれ、言語澁り脚下震動し、心臟の皷動を高むるの現象あり。次第に熟練するに從ひ、例令幾千人の聽衆あるも眼下に瞰下して、先づ之れが氣を呑却し得るに至るは事實なり。又點茶に於ても、同輩の稽古人間に於ては、平然として手前し能ふも、貴顯に獻茶するか、或は自已より老練家の前に於て點茶する時は、周章混雜必らず平素に似ざるものなり。是れ即ち氣位の備はらざる

證なり。夫れ斯の如く、主客の氣位相互に優劣を生ずる間は、妄想臆念のある時にて、全く無念無想に成り能はざるが故なり。主客氣位互ひに一寸の弛みも無きを、間に髮の容れずとも、石火の氣とも稱して、上達の人にあらざれば能はざる所なれ共、其主客の間一髮を容れざる有樣こそ眞に點茶の妙所、即ち面白味の所にて、是れ以外に効能も無く愉快もなし。若し有りと謂ふ人あらば、畢竟手先きの藝に迷ひ、道具飲食の快を貪るのみ。然らば其氣位は如何にすれば修養し得るや。曰く丹田を養成するの外決して便法あることなし。然らば丹田の養成は甚麼にすれば可なるや、曰く只點茶あるのみ。

一　丹田の養成

上來幾度も翻覆して丹田を説けるが故に、更らに喋々するを要せざるが如しと雖も、點茶の秘傳とする所、及び其目的は、單に此丹田の養成に外ならず。即ち茶禪一味も詮ずる所、此丹田養成に歸するなり。點茶の時に於て、氣丹田に滿たざれば、全く拍子拔けて猿眞似に異ならず。抑も名人悟道の士となれば、劒道にても禪學にても點茶にても、鋭氣體内に充滿して、前後左右天地

六方に向て、一點の隙間なきが故に、劔道の名手たる、柳生但馬も澤庵には長穗の鎗も立たざりしとか、又利休の點茶中、不意に切り込まれたる太刀を、柄杓にてハタと受け留めたりとかの逸話は、眞說なりや否やは第二として兎に角其間髪隙なきに譬へたるものなり。佛敎に於ても、不動多聞天を信仰す。之れ迷信加護を祈るにあらず、其心の動かぬことを不動と稱するのみ。多聞天も武裝の嚴肅なるを懼れしむるにあらず、心意の勇猛心を表するなり。全く何れも寓意擬勢なり。點茶一手前中は、宜しく不動多聞天の如くならざる可からず。さりとて木佛金佛の如く、固くなるにあらず。氣を丹田にこめて、間髪のゆるみなきを云ふなり。而かも手足は自由自在なり。前節の氣位も畢竟するにこれより生ず。

一點茶體用辨

茶道に於ける體用の本旨は、既に總論に於て之れを述べたり。故に玆には、只點茶するに就ての體用辨を試みんと欲す。體用の語は曩きに述べたる如く、主客陰陽の意に當り、或は理論的事實的の意を含み、時としては主觀的客觀的の意味に適することあり。是れ畢竟時と所に應じて其意味を異にせるなり。卽ち主は體にして客は用なり。又陽は體陰は用、理論的は體にして事實的は用、又主觀的は體にして客觀的は用なるが如し。假令ば主人なる體ありて客なる用あり。水と謂ふ體ありて火と云ふ用を生じ、天地陰陽の體より動作して草木國土の用と顯はれ、主觀的に禪定を工夫して、客觀的に動作を成すが如きは、是れ皆體用の相照應せるものなり。而して其體用の變化より之れを觀察する時は、體は用となり用更に體となりて循環し、遂に體用一に歸し、實に體用の別つ可きものなきに至りて止む。卽ち亭主なる體ありて客なる用を生じ、客更らに體となりて數奇屋の用を生じ、數奇屋の體ありて茶の湯の用生じ、茶の湯の體ありて釜の用生じ、釜の體ありて茶碗の用生じ、茶碗の體ありて茶の用生じ、茶の體ありて茶筌の用を生じ、玆に點茶し始めて主客の用を生ずるに至り、幾回となく循環底止するを識らず。是れ差別門より觀察せるが故なれ共、元來體用は二にして不二なること、地球に於て觀測點を異にせるが故に晝夜の差別を生ずるも、地球其物に至りては晝夜の差別なきが如し。此理を悟入すれば主客なきに至る。斯くの如く主客無きを、佛道に於て無賓主といふ。

一無賓主の茶

前章に於て、茶道の體用に就て一言し、體用の詮ずる所無賓主なるを述べたり。抑も無賓主の語は臨濟錄に載する所なり。即ち無差別より觀て無賓主と謂ひ、差別より賓主歴然と謂ひ、或は更に之れを評解して四賓主と成す。即ち賓中の主、主中の賓、賓中の賓、主中の主是れなり。如レ斯四賓主を區別するも、畢竟無賓主に歸すること、體用一に歸するが如し。されば共此賓主の語は、古來禪客の難透とする所實參實究せずんば、主中の主賓中の賓を悟了するに難かる可しと雖も、茶道に於ては之れを實際に實行するに在り。即ち無賓主の意味は、主觀的に於ては、禪的工夫を凝らすにあれ共、平易に解釋すれば、只主人と客人との間に於て、心に隔て無く胸襟を開きて、一室に親交するの有樣を指して無賓主と謂ふのみ。然らばとて主客無作法に禮を崩すにあらず。其動作言語に於ては差別歴然たり。是れ體用の二にして不二、不二にして二なるが如く賓主歴然として、而かも主觀的に於て無賓主なるこそ、茶の湯の極意なれ。

一　和敬清寂の解

利休居士、始めて茶道は和敬清寂にありと謂ひしより、苟も茶道に入る者、皆口に此語を稱へて金言と爲す。而かも其之れを口にする者、必らずしも其義を解せりと許す可からず。請ふ聊か之れを辨ぜん、世に和敬清寂の文字を、和敬靜寂と書す者あれ共誤なり。何となれば和敬清寂は、一字々々の意味を四個集めたるものにて、和敬と靜寂の對句にあらざればなり。之れを一字宛の意味に考ふれば、靜と寂とは殆ど其意を同ふし、茲に此字句の用ふるの必要を見ざるなり。抑も和とは和融の意にして、夫婦好く和し、朋友相和合して親睦するの義なり。茶道は和を以て第一位とす。然るに茶人程表面相和するが如く見へ、裏面に人を誹謗し反目する者尠しとするは蓋し古來免れざる通弊と見え、今其一例を擧ぐれば、千利休と今井宗及は相反目し、千道安は古田織部に不和、千宗旦は實子宗拙を放逐し、山田宗徧をを破門し、藪内紹智は藤村庸軒に不快なりしが如きは著名のものたり。かゝる次第は、たとひ古人の事と雖も、決して後世の者の模倣す可からざることなるべし。

敬とは尊敬の意にして、主客は相互ひに常に敬禮を以て交はらざるべからず。若し此敬禮の法を乱れば、遂に茶道は客觀的に於ても廢絶するに至る可し。蓋し此意は專ら主觀的の敬意を謂ふなり。然るに現今客觀的の形式に於ては、敬禮の整然たるが如く見ゆるも、

主觀的に於ては、全く輕薄の觀なきを得ず。清とは、讀で字の如く、清潔を字句する意味にして器物萬端の洒掃は勿論、復主觀的の心の清淨潔白ならざる可からざるの敎へなり。彼の南坊宗啓の露地清規にも、「手水を遣ふは心頭を清むるにあり」とあるも此意なり。

寂は寂滅の意にして、全く身心の寂境を指して、妄想臆念の發せざることなり。即ち一と手前する間にも、無念無想の域に達して寂滅せざるべからざるの敎へなり。然れ共、此寂を只物靜かとのみ解し、心を大死底に措くものとのみ思ふも、未だ悟らざるの語にして、煩惱即菩提てふ境の活潑々地の妙所こそ本來の面目なれ共、かゝる事は禪學上のことにして、茶道に於ては、物靜かなる心を以て主客の意とすと解して誤りなからむ。宜しく一と手前の間にも此寂境を去りては、茶道に叶はざることを悟るべし。茶禪一味の極意は、只此寂の一字にあるのみ。以上の如く茶道は、和敬清寂の四字に一切の極意を含有し更に此四字に出づるの意味なし。茶人にして此四字を日常に實行し能ふ可くむば、茶道の大事了れりと謂ふも敢て過言に非ざる可し。

一　茶道は不立文字以心傳心の法

元伯宗旦翁の歌に、「茶の道は心に傳へ眼に傳へ耳に傳へて一筆もなし」と。蓋し此歌意は、能く茶道の不立文字以心傳心的なるを述べ盡したりと謂ふべし。本來茶道の極意は禪味を出でざることは、上來屢々記せるが如くにして、而かも其禪味は、言句舌頭の能く傳ふ可きの法門に非ざるをも說きたり。夫れ然り而らば茶道も、亦以心傳心不立文字ならざる可からざるの斷案を下すに憚からざるなり。宗旦亦此大乘的の茶道を觀破せりと云ふべし。抑も今日の人にして茶道が以心傳心なり、不立文字なりと稱すれば、殆ど奇異の感を爲す者なきに非ざる可しと雖も、試に思へ茶道本來の目的を、苟も茶道と稱へて之れを茶藝と爲さゞる所以のものは、畢竟其本旨、喫茶の點前、或は懷石料理の巧拙、客振如何を指すに非ずして、內には自己の面目を照見し、外は處世の活禪を試むるにあり。かゝる本旨に至りてこそ、耳の傳ふるものあらず。目の視るべき物紙の記すべきなし。故に余は之れを、不立文字敎外別傳の法と謂ふなり。

一　茶道は草より入りて草に終る

「稽古とは一より習ひ十を識り十より歸へる元の其一」と、世間百般の稽古は、悉く此歌意を漏

るゝことなしと雖も、就中茶道に於ては、最も此法則に適中するものなり。例令ば、最初は先づ薄茶の平手前より、濃茶茶の湯の傳授事を習ひ、遂には臺子の奥傳に迄進みて皆傳し、然る後に其行路を顧みれば、茫々として更に其足跡なく、元の薄茶は中々容易なるものにあらず。これ恰かも字を習ふにいろはより進みて、二體四體の筆法を習得するも、元のいろは假名の能書家たるの困難なるに等し。此故に利休居士も、「手前こそ薄茶にありと聞くものを粗相に思ふ人はあやまり」と敎へられたり。是れ單に手前作法に就きてのみならず、日常の起居動作に於ても然り、即ち茶席にての動作は、萬端規矩に叶ひ、又茶道に於ける理論は如何に研鑽すると雖も、平素の行爲にして道を脱すれば、未だ茶人として許す可からず。宗旦に因て實行的に紹介せられたる吾が利休流と、他の諸流と根元に於て其趣を異にせる所以も蓋し玆に存す。宗旦翁は、終生草より入て草に終られたり。草とは何ぞや、佗茶即ち是なり。彼の封建の時代大名小名華を競ひ美を爭ひ、他の流之れに阿るに關せず、一風の草庵中頑として茶禪一味の悟道を說法せり。能く一を悟る者は十を識るを要せず、十を識る者と雖も一を悟らざるものは、十を識らざるに均し。禪法は即ち一を悟るにあり。一を悟る者には八萬四千の經卷何の用をかなす。一切藏經を讀誦する雖も一を悟らざれば、未だ佛の位にあらず。茶道亦然り、一碗の喫茶の趣旨を會得せば、何ぞ珍器重寶を翫弄するを要せむや。又面倒なる作法を習得するに及ばむや。如何に吾れは皆傳したりとて氣取るも、一碗の茶味を理解せざれば、是れ茶人にあらず。さりとて草より進みて眞に達し、更に草に歸るにあらずんば、單刀直入的には悟り難し。世には茶は平手前にあり、何ぞ他の作法を識るを要せんやと早合點する者あり、是亦誤なり。故に茶道には草より進みて眞に到るの方便ある所以なり。宜しく十を識りて一に歸す可し。佛敎に於て萬法歸一といふは蓋し此義なり。一何れの所にか歸すと謂ふに至ては、予は茶道の範圍に於て答ふ可き詮なし。參禪便道大死底の士と共に談せむのみ矣。

○喫茶法語集

一　澤庵和尙示茶人某書

仙樵戲作

編者曰、故山岡鐵舟居士は、無刀流の達人にして、嘗て相國寺萩野獨圓老師に參じ、印可を得るに至りて、漸く劍道の極意を悟りたる人なり。居士常に門人に敎ふるに、劍は禪なりとの語を以

てせられたりとぞ。即ち「剣道の極意を何と人問はゞ墨繪にかき「松風の音」てふ歌は、居士の開悟的剣道の極意なり。實にや古來其例尠からずと見へ、勇士柳生但馬守が、大徳寺澤庵禪師に參じて、剣道の奥儀を初めて悟りたることは、諸書に散見する所なるが、近來澤庵和尚が柳生へ授けられたる、禪語を引きて剣道を論ぜられし不動智神抄錄と云ふ一卷を讀み、之れは是れ剣道のみならずして、其まゝ茶道に適中したる秘書なり。好し一番剣は禪なり、茶も亦禪なり、然らば剣も茶に均しかる可しとの、三段論法を以て斷案を下し、玆に澤庵禪師に代りて世の凡夫茶人に垂示を試みんと欲す。元より澤庵が柳生へ授けたる示諭書を、そつくり其儘文意さへ違へず、只例證を茶に改めたる迄のこと故、請ふ原書所持の士は宜しく比較對照せられ、甚麼に剣法と茶道と酷似せるかを悟り賜へかし。文字文章は前に述べたる如く、勉めて原文の儘を用ゐたるは、是れ燒き直して、反て意味の變せんことを憂慮すればなり。

一無明住地煩惱諸佛不動智　無明とは、あきらかになしと申す文字にて候。迷ひを申候、住地とは留まる位と申字にて候。佛法修行に、五十二位と申す事の候。其五十二位の内に、物毎に留るを住ゝと申候。是れとどまると申す義にて候。とどまるとは、何事に附ても其事に心の留まるを

申候。貴殿の茶道にて申候はゞ、客の模樣を見てそこに心が留まり、客に賞られんと思へば客の方に心が留まりて、手前の働が拔けて客に氣を取られ候。是れを留まると申候。客の容子を見ることは見れ共そこに心を留めず、釜の前に座すると均しく、上手振らんとも思はず、思案分別にも渉らず、柄杓をかちりと曳くやいなや心を卒度も留めず、其儘下腹に力を入れて氣を弛めざれば、客の氣を追つ取て、吾が氣客を呑むと謂ふ心地になり候。禪家にては把二鎗頭一倒刺レ人來と申候。鎗とはほこのことにて候。人の持ちたる刀を我が方へ追つ取て、相手を切ると申すことにて候。貴殿の無念無想と被レ仰候義にて候。客にも道具にも我が身にも卒度も心を留めば、手前の働きは皆ぬけて、客に氣を奪はれ可レ申候。客に心を置けば客に心を取られ、我が身に心を置けば、我が身に心を取られ候間、我身にも心を置く可からず。我身に心を引きして置くとも、初心の間習ひ入る時のことなる可し。茶杓にも心を置けば、茶杓に心を取られ、手前に心を置けば、手前に心を取られ候。貴殿御覺へ可レ有レ之候。佛法には、此留まることを迷ひと申候。故に無明住地煩惱と申候。

一諸佛不動智　不動とは、うごかずと申す文字にて候。智は智惠の智の字にて候。動かずと申し

て石か木の様に、無性なる義理にてはなく候。向ふへも左りへも右へも、十方へうごく可き時には動きながら、卒度も留まらぬ心を不動智と申候。不動明王と申して、右の手に劍を握り、左の手に繩を持ちて、齒を喰ひ出し眼をいからし、佛法を妨げん惡魔を降伏せんとて突き立て見居候。文字の様なる姿なるが、何國の世界に隱れて被居候にてはなく候。容ちをば佛法守護のかたちに作り、體は此不動智を體として、衆生にも見せらるゝにて候。一向の凡夫は恐れをなし、佛法に怨みを爲さじと思ひ、悟りにちかき人は、不動智を表したる所を悟り一切の迷ひを晴らし、即ち不動智を明らめ得れば、我身即不動明王なる程に、此心法を能く修行したる人は、惡魔もいやまさぬぞと知らせむための不動明王にて候。然らば不動明王と申すも、人の心の動かぬ所を申候。我が心を動轉せぬことにて候。どうてんせぬとは物毎に心を奪はれぬ事にて候。物に心を留れば物に心を奪はれ候。物毎に心の留まるを動と申候。物を一目見ても心を留めぬを不動と申候。なぜになれば物に心が留まり候へば、色々の分別が胸に出で候。胸中色々に働き候。留まらぬ心は、動いて動かぬことにて候。譬へば茲に茶を點つる節、先づ十種の道具を扱ひ候へば跡に心を留めずして、あとを捨て跡を捨て候て、夫れ〴〵道具に働きを缺かぬにて候。十色の道

具に十度心を動かせども、一品にも心を留めざれば、次第に次から次へと、働はかけぬものに候、若し又一品の道具ばかりに心留まり候へば、次の道具を扱ふに間がぬけて、手前の働らきぬけ可申候。千手觀音には手が千御座候。弓を持ちたる手もあり、鉾を持ちたる手もあり、劍を持ちたる手もあり、樣々の手御座候。若し弓を持ちたる手に心が留まらば、九百九十九の手は、皆用に立間敷候、一所に心留めぬに依り、千の手が一つも用に立たぬは無し。觀音とても、身一つに千の手が何しに有レ可レ之候や。不動智が開け候へば、假令身に手が千あるとも、皆役に立つといふことを、人に示さむ爲めに作りたる容ちにて候。譬ば一本の木に向て、其内の赤き葉一つに眼を留むれば、殘りの葉は見えぬなり、葉一つに目かけずして、唯一本の木に何心もなく打向ひ候へば、數々の葉殘らず見へ申候。葉一つに心を留め候へば、其一つに心を取られ候て、殘りの葉は見へず候。一所に心を留めねば、百千の葉皆々見へ候。此心得をしたる人即ち千手千眼の觀音にて候。然るを一向の凡夫は、唯一筋に身一つに千の手千の眼がよします、難レ有しと信じて、又なまもの識りなる人は、身一つに千の眼千の手が何しに有らん、戯事よと破りそしるなり。今少し く能く知れば、凡夫の信ずるにてもなく、又破るにてもなくして、道理を得て道理の上を尊び信

じ候。佛法は物に寄せ物に表して道理を顯はす事にて候。諸道共に箇樣のものにて候。神道なども別して其道理と見及び候。有のまゝに思ふも凡夫、又打破もなほ凡夫にて候。其中に道理ある事にて候。此道彼の道さまゞに候へども、極まる所は、一心に落着候。扨て初心の住地より能く修行して、不動智の位に倒れば、復た立ちかへりて本の住地の、初心の位に落ちつく仔細御座候。貴殿の茶道にて可レ申候。初心は身構へも、柄杓の持ち樣も何も知らぬものなれば、身にも心留まる事無く、只茶を品能く點つる斗りにて、何の心も無く候。然る所に樣々の事習い、歩み樣座り樣、柄杓の構へ心の置所、色々の事を敎へぬれば、色々の所に心を留め、斯の如くせばよからむが、彼の樣にせば如何抔、兎や角力みがへり、殊の外窮屈なることを、日を重ね年月をかさねて稽古すれば、後は體の備へも、茶杓茶筌の取扱いも、皆心に無くなりて、からりと唯先づ始めの何も識らず何心もなき時の樣になり申す可く候。これ初と終と同じ樣になる心持にて候。一から十まで數へまはせば一と十と隣に成申候。調子抔も一のひゞき、一越より數へて無上と申高き調子に行き候へば、一の下と一の上とは隣に成申候。づゝと高きとづゝとひくきとは、似たる物に成申候。佛法もづゝとたけたるは、佛も法も知らぬ人の樣に、人の見

なす程に、かざりもなく成物にて候。故に初の住地の無明煩惱と、後の不動智とが一つに成申候。智惠はたらきの分は皆うせて、無心無念の位に落着申候。愚智の凡夫は、一向に智惠無き程に無念なり。又づゝとたけたる智者は、早智惠が入らざるに依りて、一切無想なり。なまもの識りなるによりて智惠が顏へ出で申候。おかくし候。今時分の出家の作法共、嘸おかしく被思召御耻かしく候。

一理の修行事の修行と申事の候　理とは右に申如くにて候。至りいたつては何も不取合、唯々一心の捨樣にて候。毎々右に書附候如くにて候。然れ共事の修行を不レ仕候ては、道理斗り胸に有て、身も手も不レ働候。事の修行と申は、貴殿の茶道にてなれば、身の構へ主客作法の樣々の習ひ事にて候。理を知ても事を自由に働かねば不成候。茶杓茶筌の取廻し能くても、理の極りくらく候はゞ成間敷候。理事の二つは車の兩輪の如くたる可候。

一間不レ容レ髮と申事の候　貴殿の茶道に譬へて可レ申候。間とはあいだにて候。物を二つ合せたる間へ、髮筋も入らぬと申たるにて候。たとへば手をはつたと打つに、其儘はつしと聲出候。打つ手と聲の間は、髮筋程の間もなく聲が出候。手を打て後に聲が思案をして、間を置て出る

ものにはなく候。打つとその儘聲は出候。若し客の容子に心が留まり候へば、間が出來候て手前の働がぬけ申候。心がとゞまる故にて候。向の客の動作と我働の間へは、髪筋も不入程ならば、客の氣を我方へおつ取り候。禪の問答に此心ある事に候。佛法にては、こゝかしこ留まりて、物に心の殘ることを嫌ひ申候故に、留るを煩惱と申候。立切たる早川へ玉を流すが如く波に乘てぽつぽと流れて、少しも留らぬ心を貴び申候。

一石火の機と申事の候　是も前の心持にて候。石をはつたと打といなや、ぴかと出る火の如く、打と其儘出る火なれば、間も透間もなき事にて候。是れ心の留る可き間のなきを申候。早き事と斗り心得候へば惡敷候。心を物に留めまじきといふが專らにて候。心がとゞまれば我心を人にとられ候。早くせんとて思ひまふけてはやくせば、思ひまふくる心に心を奪はれ申候。西行の歌の中に

世をいとふ人としきけはかりの宿に
こゝろとむなと思ふばかりそ

と申歌は江口の遊女が讀みし歌なり。此歌を貴殿茶道の極意の相傳に被ㇾ成、我と獨り心得られ候はゝ可ㇾ然候はむ哉。心とむなと思ふ斗りにといふが、心得所なる可く候。是にて御合點可有候禪宗にていかなるか是佛と問はゝ、向の聲の未だ絶ざる先に、手をはつたと打つ可し。また如何是禪と問はゝ、拳をさし上ぐべし。如何是佛法の極意と問はゝ、其聲未だやまざるに、一枝の梅花となりとも、庭前の柏樹子と成とも云ふ可し。いふ事の由を答ふにてはなし、とゞまらぬ心を尊ぶなり。留まらぬ心は色にも香にもうつらぬなり。此移らぬ心の體を、神とも悅び佛とも貴び禪心とも至極とも、眞如とも本性とも、這箇とも本來の面目とも申候。とくと思案して後に云ひ出し候はゝ、金言妙句にても、住地の煩惱にて候。石火の機と申も、電光の機と申もぴかりとする稻光の間に働を申候。譬ば左衞門と呼かくるに、おつと答へたるを不動智と申候。左衞門と呼かけられて、何の用にて候やらんと思案して、後に何のぞといふ心は、住地の煩惱にて候。然らば、左衞門と申者の心得樣にて、物に留まつて物に動かされ、迷はさるゝ心をば、無明住地煩惱と申候。經に水よく物を轉ずれば、則ち如來に同じと有ㇾ之候。物を轉ぜずして、物に轉ぜらるゝは凡夫にて候。又左衞門と呼れて、おつと答ふるは諸佛の智なり。然れば佛と衆生二つなく、神と人とも二つなく候。此心の明なるを神とも佛とも申候。神道佛道儒道とし

て、道多く候へども、此一心の明なる所を申候。然れども力様に書附申候事は、唯言葉にて心を講釋したるにて候。此心人々我身にありて、晝夜となく善事惡事ともに皆此心の業により て、或は國を起し或は家を亡し候。其身の程々に隨ひて、よしあし共に心のわざに候へども、此心をば如何なる物ぞと悟り明らむる人なくして、皆心に迷はされ候。世の中に心を說く人不レ可レ有候。能明らめる人は稀にも有がたく見及候。たま〳〵明らめ知り候ても、又行ふこと成がたく候。此一心をよく說とて心を明らめたるにては有間敷候。水の事を能く講釋いたし候共、口はぬれ申さず候。火の事を能く說とても、口はあつからず、眞の水竈の火にふれてならでは、知れ不レ申候。書物を講釋したる迄にては知れ申さず候。食物をよくときても、ひもじき事はなほり申さず候。說人の分にては知れ申間敷候。世の中に佛道も儒道も心を說き候とも、その說く如く其人の身持はなく候間。書物の上斗にては心は明かに知れぬものにて候。人々我身にある一心本來の面目をとくと極め、悟り候はねば明らかならず候。又參學をしたる人が心明らかならば參學をする人も多く候へ共、それにもよらず候。參學したる人心持皆々惡敷候。此一心の明め様は、深く工夫の上より出で可レ申候。

一心の置所　心をいづくにおくぞ、客の身の働に心を置けば、客の身の働に心をとられ、客の動作に心を置けば客の動作に心をとられ、客に上手振らむと思ふ所に心を置けば、客に上手振らむと思ふ心に心を取られ、客に笑はれじと思ふところに心を置けば、笑はれじと思ふ所に心をとられ、人の構へに心を置けば、人の構へに心をとられ、我身の構へに心を置けば、我身の構へに心をとられ候也。兎角心の置所がないといへば、或る人の曰く、兎角我心を餘處へやれば、心の行所に心を取られて、客に氣をとられ候程に、我心を臍の下へ押圍ふて餘處へやらずして、客の働によつて轉化せよと云ふ、尤も左もある可き事なり。然れ共佛法の向上段よりみれば、臍の下に押圍ふて心を餘所へやらぬと云は、段がひくし、向上にあらず稽古の時の位也。敬の字の位也。又孟子が放心を求めよと云ふ段也。立上りたる向上の段にてはなし。敬の字の心持、放心の事は別の書に記し進じて候。御覺へある可く候。臍の下に押圍ふて餘處へやるまじきとすれば、やるまじきと思ふ心に心をとられて、先の用が闕けて殊の外不自由也。兎に角此心の置所がない也。或人問て曰く、心を臍の下に押かふて働かぬも不自由にして用が欠けば、我身の內にてどこにか我心を置可きぞと、答へて曰く、心を右の手に置ば、心を右の手にとられて、左の用闕る也

心を左の足に置ば、左の足に心を取られて、右の用が闕る也。心を眼に置ば眼に心を取られて耳の用が闕る也。どこ成とも心を一所におけば、餘の方の用は皆かくる也。或人の曰く、然らば即ち心をどこに置ぞ、我答へて曰く、どこにもなをさずどこにも置かねば、我身一ぱいに行渡りて全體のびひろがり大心に成なり。足の指鼻耳口、毛一筋の下迄行き渡らぬ所もなく、延ひろがりて有程に、手の入時は手の用をかなへ、足の入時は足の用を叶へ、目の入時は目の用を叶へ、其入所〳〵に行渡りて有様に、其入所々々に用を叶るなり。萬一もし一所に定て心を置けば、一所にとられて用は皆かくべきなり。思案すれば思案にとられ、分別すれば分別にとられる程に、思案にも分別にも渡らずして、心を總身にすぐ置き、一所にとゞまらずして、其所々〳〵に有て用はづさず叶ふべし。心を一所に置ば、偏に落ると云なり。偏とは一方へかたむく事をいふなり。正とはどこへも行渡る事なり。正心とは總身へ心伸びて一方へ遣はぬをいふ也。心の一所にかたつゐて、一方はかくるを偏心と申也。偏は嫌申候。萬事につき一所にかたよりたるは、偏に落るとて道に嫌申事也。どこに置かんと思ふ心なければ全體に延ひろごり、行渡りて有る物なり、心をどこにも置かずして、手前の順序に從ひて心を其所々々にて用ふ可し。心が總身に行渡

りてあらば、手の入時は手にある心を遣ふ可し。足の入時は足に有心を遣ふ可し。一所に定めて置たらば、其置たる所より引出して使はむとする程に、そこに留まつて用が抜け申候也。心をつなぎ猫の様に、餘所へやるまい〳〵として、我身に引とゞめておくは、我身に心をとらるゝ也身の内にも一所にとまらずして、心を一身の内に捨て置て、餘所へは行かぬものなり。唯一所にとめぬ工夫是れ修行なり。心をばどこにもなきそといふが眼なり。肝要也。どつこにも置ぬにどつこにも有ぞ、心を外へやりたる時も心を一方に置けば、九方はかくるなり。心を一方に置かざれば、十方に有ぞ。

一本心妄心と申事の候　妄心とは惡敷心にて候。本心と申すは、一所にとまらず全身に延びひろごりたる心にて候。妄心とは何ぞ思ひの結で一所にかたまりたる心にて候。本心を失ひ候故に、所々に集まりて、妄心と申す物に成て居申候間。本心はうしなひ候。本心が一所にかたよに用かけ候。本心を失はぬ様にするが專ら也。譬ば本心は水の如くなら一つ所にとまらず、妄心は氷の如くにて候。水と氷とは一つにて候へ共、氷にては手も顔も洗はれ不申候。氷をとかして水となし、いづくへも流したき様にながして手足をも洗ふ可し。人の心も一所にかたまり、一

事に留り候得ば、かたまりて自由に遣はれず候。氷にて手足の洗はれぬ如くにて候。心を總心へ水ののびたる樣にして用ゆる所へ、やり度きまゝにやりて使申候。是れを本心と申候。

一有心の心無心の心と申事の候　有心の心と申は、即ち妄心と同事にて候。有心とはある心と讀む文字にて候。何事にても一方へ思ひつむる所の心には、分別思案が生ずる程に、有心の心と申候。無心の心と申は右の本心と同じ事にて候。一所にかたまり定まる事なく、分別も思案も何もなき時、心は總身に延ひろごりて、全體に行渡りたる心を無心の心と申候。どつこにも置ぬ心なり。無心とて石や木の樣に有にてはなし、とゞまる所なき心を無心と申候。とゞまれば心に物があり、留まる所なき時は心に何もなし、心に何もなきを無心と申候。無心無念とも申し候。此無心の心に能くなりぬれば、一事にとゞまらず、一事をかく常に水のたゝへたる樣にして、此身に有て用の向ふ時出して用を叶ふるなり。一所に定まりとゞまりたる心は、自由に働かぬなり。車軸はかたよらぬによりて自由に廻るなり。内一所にあつまりかたまりたらば廻るまじき也。心も一所に定まれば働かぬ物なり。心の中に何ぞ思ふ事あれば、人の云ふ事をも聞ながら覺えとれぬなり。思ふ事に留る故なり。心がその思ふ事にあるゆへ、一方へかたよる、一方へ片

よれば物を聞とも聞えず、見れども見へず、是れ心に物の有故なり。物有とはとゞまり思ふ事が心に有なり。此有ものをとりぬれば、心無心にして唯用の時斗り働きて、其用にあたる可し。此心に有ものをさらん〳〵と思ふか、又心の内に有物に成程に、是れを去らん〳〵とも思はざれば獨り去りて自から無心に成なり。常に去らんとすれば行かぬものなり。古歌に

思はしとおもふも物を思ふなり
おもはしとだに思はしや君

一水上打二胡蘆子一捺着即轉　胡蘆とはふくべの事、捺着とは手をもつておすことなり。ふくべを水へなげておせば、ひよつと脇へのき、押せばひよつと退き、何として一所にとまらぬ物なり。至つたる人の心は、ちつとも物にとゞまらぬ事、水の上のふくべを押が如く也。

一應無所住而生其心　此文を訓にて讀候へば、まさにとゞまる所なくして、しかもその心を生ずべしと讀申候。萬のわざをするに、せうと思ふ心が生ぜねば、手も動かぬなり。心を生じてすればそのする事に心が留まるなり。然る間留まる所なくして、心を生ず可しと也。古歌に

水鳥の行もかへるも跡たへて

さすがみちをば忘れざりけり

心が生ずれば生ずる所に留まり、生ぜざれば手も行かず、ゆけばそこにとゞまる也。唯水鳥の跡なくして往來するが如くすべし。心を生じて其事をしながら、止まる所なきを諸道の名人と申し候。佛法にては、此留まる心から執着の心起り、輪廻も是より起り候。此留まる心を生死のきつなと申候。花紅葉を見ても、花紅葉とみる心は生じながら、そこに留まらぬ心を專らに候。

慈圓の歌に

柴の戸ににほはん花のさもあらばあれ
ながめてけりなうらめしの身や

花は無心に匂ひたるを、我は花に心をとゞめてながめけるよと、身の花に染みたる心をうらめしとなりながめたりとも心をとゞめずば、とがは有間敷候。見れども聞ども、一所に心をとゞめぬを、至極とする事にて候。又敬の字を主一無敵と注して、心を一所に取定めて、餘所へ散らさず一切のわざをするに、その業一つを司どりて餘所へ心をやらず、後より拔て切るとも切方へ心をやらぬを敬と云ふ。利休が點茶の折柄長穗の鎗を突き出したるに、ちつとも心を散さなんだ抔は

こゝの所にて候。尤も肝要の事にて候。殊に主君抔の御意を承はる事敬の字なり。佛法にも敬の字の心ある事にて候。一心不乱と說給ふも敬の字の心なり。敬白の鐘を鳴らすとて、鐘を三つならし手を合せ夫佛と唱へあげる、此敬白の心則主一無敵一心不乱と同義にて候。然れとも佛法にては敬の字の心は、至極の所にてはなく候。我心をとらへて乱さぬ樣にと、習ひ入る修行稽古の位にて候。此稽古年月積りぬれば、心を何方へ放ちやりても自由なる位へ行事にて候。右の應無所住の文の位は向上至極の位にて候。敬の字の心は心の餘所へ行を引とめて、やるまいやれば乱るゝと思ふて、卒度も油斷なく心を引締て置位にて候。是は當座心を乱らさぬ一段の事なり。常に斯くの如く有ては不自由なる儀なり。喩へば雀子をとらんとて、猫の繩を常に引締て置て放さぬ位にて候。我心を猫のつながれたる樣にして不自由にては、用が心のまゝに成るまじきなり。猫によつてしつけをしておゐて、繩をおつ放して行き度所へやりて、雀子と一つに居ても雀子を取らぬ樣にするが、應無所住而生其心の心にて候。我心を放猫の樣にして、打捨放ちて行度所へ行ても、心の留まらぬ樣に心を用候。一所に定めて置ては不自由にて働かれず候。貴殿の茶道に當てゝ申候はゞ、茶杓を持つにも茶筌を振るにも、其持手振る手に心なととゝめず、一切所作

をは忘れて茶を點て手前をせよ、客に心を置くな、人も空我も空、持つ手も振る手も空と心得よ空にも心はとめられまいぞ、鎌倉の無學祖元禪師の、大唐の乱にとらへられて切らるゝ時に、無學の電光影裏截二春風一と云題をつくられたれば、太刀を捨て走りたるとなり。無學の心は太刀をひらりと振り上たる電光の如くに、ひかりとする間、何の心も何の念もなひぞ、打太刀にも心はなし、切人にも心はなし、切らるゝ我も心はなし、切人も空打太刀も空、うたるゝ我も空なれば、討人も人にあらず、打太刀も太分にあらず、うたるゝ我も我にあらず、唯稲妻のひかりとする内に、春の空吹く風を切る如くになり一切留まらぬ心なり。風を切たらば太刀に覺へも有まいぞ、斯樣に心を忘れきりて、萬事をする上手の位なり。手前をするに、手に水指を持ち足を運ぶ時、其手足をよくせんと思へば、其手足水指を忘れきらねば上手とは申されず候。又手足に心が留まらば、わざは面白かるまじき也。悉皆心を捨切らずしてするしわざは皆あしく候。

一求二放心一と申は孟子が申たる事にて候　はなれたる心を尋ね求めて、我身をかへせと申す心にて候、譬ば犬猫鷄なとはなれて、餘處へ行ば尋ね求めて我家へ返す如くに、心は身のあるじなるを、惡き道へ行きて物にとゞまり迷ひあるくを、何とて留めかへさぬぞと云也。尤も斯樣に可有儀なり。然るに又邵康節と云者は、心は要レ放と申候。はらりと替り候。かう申たる心持は、心とらへ結て置ては、つながれ猫の樣にて身が働かれぬぞ、物に心がとゞまらず染まぬ樣に、よく遣ひなして心を捨て置て、いつくへなりともおつはなせといふ儀なり。物に心がしみとゞまるにより、しまるなとまらすな、我身へ求めかへせと云は初心稽古の位なり。蓮は泥にしまぬ物なれば、泥に有てもくるしからず。能くみがきたる水昌の玉は泥の中に入てもしまぬ樣に、心をはなして行度所へやれ、心を引結では不自由なり。それも初心の時はさも有可し。其分にては上段にてはなし。至極の心持は邵康節が心を放たん事を要せよといふにて候。中峰和尚の語に不レ覺二放心一と云ふの意は、邵康節が心は放たん事を要せよと云たると一つなり。はなつ心を近くに引とめ、一所に置なと申儀にて候。又覺不二退轉一と云は、之れも中峰の言葉なり。退轉せず常にかはらぬ心を持てと云儀なり。人毎に一度二度は能き處へ行くとも、又忘れて常になる程によろづをしかためて退轉せぬやうに心を持てと申候にて候。

一急水上打二毬子一念々不レ停留と申事の候　急にみなぎつて流るゝ水の上へ手まりをなぐれば、浪に乗てぽつぽつとながるゝなり。その如く念々の一所にとゞまらぬ樣にす可しと也。

一前後際斷と申事の候　前の心を不捨、又今の心を跡へ殘すが惡敷候。前と今との際をたちきつてのけよ、今の心をあとへつながす、たちきつて退けよと云ふ心なり。是前後際斷と申候。際はあひだとよみ斷はきると讀み候。前後の間をきつてはなせよと申儀也。心とゞめぬ儀にて候。

心こそ心迷はすこゝろなれ
こゝろに心こゝろゆるすな

正德五未十月十一日

幡龍庵にてうつし申候

一語錄四則

一利休居士曰く、茶は喝を止むる爲なり。其上にて種々の事をなし茶の湯と名づく。去れども之れ我本意の茶の湯と見る可し。故に茶器其外手前等何事にても、其宜しき樣にし宜しからざるを嫌ふ。見事と能きといふとあり。見事とは能きには劣りたるものなり。畢竟音も無く香もなき所なり。此心を元として茶の湯を始め、茶を點て道具をも用ゐ候時は五常なり。五常も時によりて理に背くことあり。其背くを理と見ること能く〳〵工夫ある可きことなり。上より下萬民に至るまで不用と謂ふことなし。茶の湯の樂み擧て謂ふ可からず。至れる哉云々〳〵

一未世の人、修行なくては成就し難き趣意は、先づ佛法に於ても上根上智の時代は、佛拈華微笑或は捧下にして悟り、或は言下にして大悟し、經を聽て了し、達磨大師の不立文字其規矩なし。段々〳〵其後に至りて、益々規矩法度を以て修業あること、或は座禪觀法參學問答誦經念佛等なり。是皆高きに登るの足代なり。悟る上には此道具不用なり。茶道も亦復斯の如し。珠光紹鷗祖先居士の如來法、下根の人何を以て登るべきや。先づ一心確かにして、修行の足代に登らずんば有る可からず。依て教諭の爲めに、傳來家記の箇條の中を少し書き拔きて拙舌に換ふるのみ。

一心中には悟道を定め、外には茶の湯の業を顯はし、內には智仁の法を定め、外には禮儀を顯はし、內には神の信を納め外には衆生の信を顯はす、一句了然として意趣百僚を越え、一所透脫すれば千所萬所一時に通る。機輪轉變大自由を得む。其汎きこと計る可からず。且らく道は心氣と事と合體なして行はる、之れ中道の眞なり。心に異ひ口に違ふ時は中道にあらず。事は盡くるとも心氣は盡く可からず。譬ば幼童も說かは說く可し、又老翁も行ひ難し。

一茶の湯は平生の事なり。道心禮儀第一なり。火は能く湯の沸くを專一とし、掛物は古則偈頌を見て己が道に進む事を思ひ、花は生けたるまゝを入れて、清き天然自然の花の清きを心に移して己れを樂しむ、點前は事を能く用ひ、働き拍子も無く、唯生れながらの體にして己れを樂しむ。かりにも人と我とを離るゝことなかれ、我と人と兩身に在ては茶道にあらず。現に茶は人の呑みかけを呑みて禮とする意なるは、二となり主となり、主客とも一致に正直なるを以て進むを願ひ衆生一所六根清淨にして、本法世間相常住して樂しむが誠の茶なり。

一南坊錄拔粹

南坊錄中に於て、苟くも茶と佛敎即ち茶禪に干するものを妙に摘拔すれば

○宗易ある時集雲庵にて茶湯物語ありしに茶の湯は臺子を根元とする事なれども心の至る所は草の小座敷にしくことなしと常々のたまふはいか樣の子細にて候と申すに宗易の云小座敷茶の湯は第一佛法を以て修行得道することなり家居の結構食事の珍味を樂とするは俗世のことなり家は漏らぬほど食事は飢ぬほどにしたる事なり是佛の敎茶の湯の本意なり水を運び薪をとり湯をわかし茶をたてゝ佛に供へ人に施し吾ものむ花を立て香をたく皆々佛祖の行ひの跡を學ふなり猶委しくは己僧の明めにあるへしとの給ふ

○宗易へ茶に參れは必ず手水鉢の水を自分手桶にて運ひ入て向ひ附けられ候程に子細をとへは易の云露地にて亭主の初の所作に水を運ひ客も初の所作に手水をつかふ是露地草庵の大本なり此露地にむかひ向はるゝ人互に世塵のけがれをすゝく爲の手水鉢也寒中には其寒をいとはす汲はこひ暑氣には淸涼を催しともに皆奔走の一なりいつ入たりともしれぬ水心よからず客の目の前にていかにもいさぎよく入てよし云々

○或人爐風爐夏冬茶湯の心持極意承はりたきと宗易に問ふ易答に夏はいかにも涼しき樣冬はいかにも暖かなる樣に炭は湯のわく樣に茶は服の能樣にこれにて秘事は濟み候よし申されしに問人不興にして夫は誰も合點の前にて候と云けれは又易の云さあらは右の心に叶ふ樣にして御覽せよ宗易客に參り御弟子になるべくと申されける同座に笑嶺和向ありしか宗易の申され樣至極せりかの諸惡莫作諸善奉行と鳥窠のこたへられたる同然との玉ひし也云々。

○前畧　掛物程第一の道具はなし客亭主ともに茶湯三昧の一心得道の物なり墨跡を第一とす其文

句の心をうやまひ筆者道人祖師の德を賞翫するなり俗筆の物はかくる事なきなりされども歌人の道歌など書たるを掛くる事有四疊半にもなりては又一向の草庵とは心得違ふよく〳〵分別すべし佛語祖語の筆者の德と兼用るを第一とし重寶の一軸なり又筆者は大德にはあらねども佛語祖語を用てかくるを第二とす繪も筆者によりて掛るなり唐僧の繪に佛祖の像人形多し人により持佛堂の樣なりとて掛ぬ人有一向の事也一段賞翫して掛くべし歸依あるべき事別てなりと易の給ふ

○飯臺は机のごとくして二人三人四人も臺一にて食する是禪林日用の作法也然るを紹鷗宗易大德寺南宗寺衆を茶の時折々飯臺を出されし也一疊臺目抔はあまりにせまき故出し入なりがたし二疊三疊別て四疊半に吉茶立口の外に今一つ口ある座席ならでは茶立口よりは出し入不好事なり亭主先づ臺を席へ抱へ出しふきんにて清めさて食の椀にもつその飯を入れ蓋をし下に汁の椀をかさね如レ斯客の數次第引盆に並べ運び出して臺の上にあげ汁は汁次にて出す菜も鍋にても鉢にても出す其品次第の見合せ酒は三返にてすむべし食椀の蓋にしたる物にて呑むなり客の食ひ樣別て奇麗に喰へし總て飯臺の料理は殊更かろくする事なり汁一つ菜一つ強て二つ茶うけの物抔も出さすもよし又一樣は食椀汁椀蓋此三つを銘々青染の木綿ふくさにつゝみ出しもつそは鉢は入てはこひ出し亭主銘々客へ配る客も椀を出してうくる仕樣あり勿論飯臺は魚肉料理の時の事にてはなし云々

○野掛狩場抔にて茶會を催すこと有易大善寺山にて御茶上られしには愚僧も供して勝手を仕しゆへよく〳〵所作を見申也宗易のたまふは野かけ抔は定りたる法なければ根元の格は一々備へずしてはなりがたし第一景氣にうはれて茶會しまぬ物なり別て客のこゝろもとまる樣にする本意なり夫故道具も別て秘藏の茶入抔よし大善寺山にては尻ふくら茶箱に仕込れしなりよく〳〵勘辨すべし箸物抔はすゝぎてさはやかにするを第一とす興を催し過候得ば雜席の樣になりうと〳〵しければ景氣にうばはれる也よく〳〵巧者の所作ならでなりかたし

○野かけは就中其土地のいさぎよき所にてすべし大方松陰河邊芝野抔しかるべし主客の心も清淨潔白を第一とす然れば此時斗清淨にするにあらず茶一道本より得道の所濁りなく出離の人にあらずんばなりかたかるへし未熟の人の野かけふすべ茶湯は眞似をするまでの事なり手藝諸具ともに定法なし定法なきが故に定法大法有其子細は只一心得道の所行形の外の業なる故なまじいの茶人かまへてあやまる事無用なり天然と取行ふへき時を知へし紹鷗佗茶湯の心は新古今集の中定家朝臣の歌に

みわたせは花も紅葉もなかりけり
浦の筈屋のあきのゆうくれ

此歌の心にてこそあれと被申しとなり花紅葉は即ち書院臺子の結構に喩たり其花紅葉をつく〳〵と詠め來りて是れは無一物の境界浦の筈屋なり花紅葉を知らぬ人の始より筈にはすまれぬなり詠じてこそ筈やの澁すましたる所は見たてたれ是茶の本心なりと云はれし又宗易今一首見出たり迚常に二首書付信せられしなり同集に家澄の歌に

はなをのみ待らむ人に山さとの
雪間の草の春を見せはや

是又相かまへて得心すへし世上の人にそこの山かしこの春の花がいつ〳〵咲へきがと明暮外に求めてかの花紅葉も我心にある事を不レ知只目に見ゆる色斗りを樂也山里は浦の苫屋も同前の澁住居也去年ことしの花も紅葉も其雪の埋つくして何もなき山里になりて只澁すましたまでは浦の苫屋同意なり扨又彼無一物の所より自から感を催す樣なる所作か天然と端々にあるは埋つくしたる雪の春になりて陽氣をむかへ雪間の所々にいかにも春やかなる草がほつ〳〵と二葉三葉もえ出たとく力を加へずに眞なる所の有道理を取れしなり歌道の心は子細もあるべけれども此兩首は紹鷗利休の茶道にとり用ひらるゝ心入を聞覺てしるしをくなり箇樣に道に心さしふかくさま〳〵の上にて得道ありし事の愚僧等か及ぶべきにあらず誠にありがたき道人茶道かとおもへば則祖師佛の悟道也殊勝々々〳〵

○易の云濃茶の手前に一段と草あり薄茶の手前に極眞あり此差別能々心得へし時により所によること也輕きやうにて秘事也と云々〳〵

蓋子陰陽のかねを以て百千萬の飾草茨きの佗座敷まで此法にもるゝことなき事の子細は多年修行の處なりさて又佗の木意は清淨無垢の佛世界を表して此露路草庵に至ては塵芥を拂却し主客ともに眞心の交なれば規短寸尺式法等あながちに云べからず火を起し湯を湧し茶を喫するまでのことなり他事ある可からず是即佛心の露出する所なり作法挨拶に抱るゆへ種々の世間の義に墮して或は客は主のあやまちを伺ひ譏り主は客のあやまちを嘲る類になり又此子細を熟得了悟する人を待に時なし趙洲を亭主にし祖大師を客にして利休居士と此坊か露路の塵を拾ふ程なれば一會は調へきか大笑々々斯云ても天下の人を達磨にも趙洲にもなしかたしなさまほしく思ふも又一著あり

よし々々三界出離の人は却て三界に安座すと云へり爰に於て迷惑朦朧たり休居士の得心いかがと一問申したれば休の云其祖大師佛の大悟に於ては愚盲の宗易何としてか御坊に及ぶべき但御坊は佛教經論に依て却て迷を生するものか易は茶のことにて申へし臺子を始め諸事の法度は百千萬なり古人も爰に止りて是を茶湯と心得られたると見るたり各法度を大切にすることのみ秘書に記しおかれたり客は其法式を階子にして今少し高き所にも登り度志有て大德寺南宗寺なとの和尙達に一門問取し旦夕禪林の清規を本とし彼書院結構の式よりかねをやつし露路の一境淨土世界を打開き一字草庵二疊敷に佗すまして薪水のために修行し一盌の茶に眞味あることをやう〳〵ほのかに覺候へども時々水の濁りをなすことは易が誤所也又客たる人得道なき故主も又ひかれて迷ことありさればこそ例の三和尙たち御坊など入來のとき易か誤は凡有まじきに只恐るゝ所は數奇の人世に多くなるほど師匠も多く口々に指南し或は大名高家の交には草庵を書院の如く取捌き其本意を尋るに及ばず或は大食大酒の人は草庵にても酌盛の興をなし其心に叶はざれば佗數奇いやに思ふ也世を渡る師匠どもは大名の氣に入茶會に長ずるを專らと心得銀持分限者此こと好むを幸として欲心より進る茶湯なれば只今さへ思外なる振廻多しましてや末代の茶思ひやられて是非に及ばず百年の後再び生れて世間の茶の成果たる有さま見申度こと也と云々

予か云されば又いかやうに指南仕てか道の正しく立行ことは候へきと云易云さま〳〵思案してもあきらめかたき所なりせめては書院臺子の法を習べきと云人に不知と云て不教草庵のことばかり安々と傳授してかねなどをいはず大方を疊の目數に覺させ崇續次第より濃茶只一通りにして佗の心を何とそ思入て修行するやうにさへ仕立たらば其內十人二十人に一人も道にさとき人は道に入べきか道に入る程の人にならば其時望み次第臺子をも得心させて立返りて品々の規矩を修行せば一日二日にも事濟べし然ども此思案もとげがたき子細あり能相の傳授の末々珠光紹鷗の弟子熟不熟いか程もあり此頃所々に峰起してさま〳〵筋も知れぬ飾置合をして人に珍らしがらし夫を美目にし誰は此飾をして客をしたるに其客は何某の弟子なるか夫を不知して赤面しつる何某の弟子は能知て首尾したりなど云程こそあれ師を取替て出入を絶する類多し夫ゆゑ師も思ひ思ひさま〳〵のことをたくみ出し古傳に違ひたることいくつと云數を不知十年を不過茶の本道捨る可しすたると雖も世間には却て茶湯繁昌と思へき也世俗の遊ことに成てあさましき成果今見るが如し悲哉宗易和漢ともに古來無レ之露路草庵一風の茶を工夫し恐らく趙洲の意味にも可レ叶かと思ふ

に末世相應せず程もなく正道斷絶すべきこと口惜しきこと也二疊しきも頓て二十疊しきの茶室に
なる可し易は三疊敷をしつらへたるさへ道のさまたけかと後悔なりとにかく加樣に思ふも茶道の
執着なり佛祖聖賢の大道さへ時有て衰へ衰ふ聊悲む可からす末世出現の佛もなきに非ず此道に
於ても得心の人後代に出來し御坊や休か志を感通することもある可しさやうの人に一服の茶を
手向けられたれば百年の後たりとも骸骨潤を得て亡魂などか受悅ばざる可き必茶道の守神と
なる可し佛祖もなとか力を添玉はざらんとねんころに物語ありつる其日は天正十七年二月二十八
日其夜小雨しめやかに降夜たけなはに及たる既に過し十九年辛卯同月同日横難に逢玉ふ悲歎無限
此坊か回向日々の茶湯ならでは深切の人も有まし此坊が無き跡もおこたりなく回向申可きよし鑑
板に殘置なり云々

○住吉屋宗無は古風眞乎なる茶人にて喩ば此茶入には此茶盌此水指と日頃夫々吟味して定め置合
なども常住一樣にせられし故未熟の輩の見所すくなく無興のやうに人々思けれども其日其夜の節
に應じ思入あることをせられしなり專ら夜會を好て年々熟しける故夜會一入殊勝に働かれし也禪
學の志深かりし故氣味面白きこと多し人により茶湯しめり過たりといへり休は一段譽られ今少
しはたらかせ度はあれとも働き過たる誤よりはその遙かに增なりと何れよりも賞せられたり

○宗易居士は理に通じ業に叶ひ大悟の茶人なりさるゆへに四季折々晝夜共に自由自在なりしなり
其本を明らめ其末をわきまへひたすら茶の正道世に傳んことを根本に深く志玉るは我か誤
をも隱す心なく人々にもわざ〳〵語り聞せ我に勝れる能ことあればいかなる初心の人の所作をも
感嘆して自他の無差別道に於て只深切なりし故交る人何れも睦じからぬは無かりし也

○玄關口に關守とて壺を置こと小座しきに玄關付ての後利休例の和尚達を御茶申されしとき壺又
は香爐など關にする及一問せられたる趣向なり一關透過の義なり戸の内に問語を書つけて出さる〻
假令ば一壺當レ關不二敢轉一和尚大慈示二透脫一などありしなり客着座して主出られたるとき答句あ
り今は何の子細も知らぬ人々關守をする當惑させ笑語のたよりと云へる沙汰のかきり也

○露地の雪隱は三位の一と云禪林にも百丈和尚の清規にこま〳〵と記たり數寄屋の桂窓の子な
どはいかにも粗相なるがよし雪隱はすきやよりわびにても柱などいかにも古きものを不用さはや
かにすべし亭主馳走には珍客には必雪隱作りかへ新きことあり又わびにても戸など改めかへ
かべぬりなをすもありその觸杖竹ばし箒なども改るなり其馳走を心付て見る第一なり會のとき

雪隱の内を見ることも禪林に便處の役を淨頭とて歴々の道人和尚のせられたる例多し修行の心持第一なり云々

休の露地せついんの内砂をたてをかるゝこと他人とは違たり客ありてかへると其まゝすなを取のけ掃除しをきさて又客來前とくと水を打掃除仕廻て其後かわき砂を手桶に取よせ山形に立其上に觸杖をさゝれたり夫故常に不斷見廻て雪隱を見るに砂なし不時其儘露地入したるとき初に砂なく中立前に砂入てあることもありし也休の云路次小路の清めにもかはき砂を盛立つるものなりさればこそ御幸御成の路筋辻などにもかはき砂勿論の古例也これは俄に小路いかやうの不淨あるべきもはかりがたし又は俄の雨に水たまり出來ることもありさやうの時そのまゝ清めけす爲めなり根本のほこりを取清淨をいたす心得也さて雪隱の内は露地のは小用所にて不淨あながちある可きにあらねども先は便所なるゆへ其用を便したる時かはきすなふみて不淨をいけゝすためにたてをく砂なり觸杖 其用意なりしかれば客のたび〳〵にかはき砂を改めて立る筈のことなり常住いつよりたてたるとも不知たてつめにするは砂たてゝ置たる詮あるまじかやうのことこそいかほどのわびにてもせいを出して心つかひあるべけれさて又すなを水うち置く人ありこれ尙不知人のすることなり昔より不淨をきよむる儲けにするは雪隱には限らずかはきすななど云へば水を打つものにてはなしそれゆへ雪隱の内よく〳〵掃除し水にてながし夏冬ともにあらひ清めて掃除仕廻たるとき砂を取ませて立つるなり

○茶を點つるに茶碗を茶巾にてふきて後もみ合て茶入茶杓を取て點つることあるとき笑嶺和尙利休に御尋ありければ右ごのとくせらるゝことといかやうの心得にてやと御尋也休の答に茶巾しめりたるものとりあつかひたる手なればしめりをかわかす爲めにつかまつる〻心得候由こたへられければ和尙いかにもさもある可し但客になりて茶入をとこいて見る時ももみ手にて取あつかわるゝほどにする人の人々によく〳〵尋候へ共只今休のいへるほどのこたへもなしきりながら僧侶の修業にあることにて我等よくしりたることなる間相傳申すべし修行の山こもりなどし難行する人高き山嶺つたいなどに柴をとり薪を運ぶ時佛を念じ禮拜などするは常のつとめなればいかなる所にても其時刻に及ば先薪をもをろし置て禮拜恭敬するなり水あれば手口をすゝぎ水なき所にては柴などにて手を清め心の清淨を拜むこと也それを本としてつねにも六時不斷拜かならずたびごとに手水せずとも手をもみ合せてあらたむるを柴手水と云也眞言宗抔は猶更常に幾度もるす

也これをもつて考ふれば大事の道具抔取あつかひことに一大事の茶に取かゝるときは手水無レ餘儀事と覺候由被仰休も始めて此事の根元承り不レ斜忝なき由被レ申し物毎根本を知る可きこと也不知してすることははづかしきこと也云々

○九條殿にて和歌の御物語に

思はしと思ふも物を思ふなり
思はしとだに思はしや君

と云ふ歌を吟ぜられしを休居士并愚僧も御席につらなりはべりて承りしなり彼かねをわすれたりと思ふ内はわすれがたくいつのことにか天然とわするゝとき至る先一度いさゝかの業少しのかね合をも忘れぬやうに打なし一遍に修行しもてゆきぬれば終に忘るゝ境に入るとかく始より構へを忘るゝ事にはあらず

○前畧草庵の茶の湯は臺子本式書院の格式を本とするとはいへども陰陽ともに用る子細あり書院臺子にも陰陽ともに用る子細に本づきての事なり其子細會得せざればかならず相違する事なりぬんごろに根本を極めぬればいかやうにも自由なる事と譬ば眞の文字を知て行草に到ればいかほど

自由にくづしやつしても本性たがはず草かなばかり習ては筆畫たがひ本性を失ふ事多し第一眞字鍛煉あるべきなりされども人々に依て執行かはるべし古人草字の妙を得行字の妙を得かな文字の妙を得たるあり草行かなも妙處を得る程の人はたとひ不得手にても眞字の本性を辨へる程にはあることなり眞より入行より入草より入る其入る所はかはれども奥義は同一なり其入所は人々の性質に隨ふべきなり或は老人世の人かならず眞よりとのみ心得書院臺子の事業一々手熟し鍛煉し畢て後草庵を執行す可しとぴたすらに取掛りては一生草庵の風味に至る事なし師たる人能々了簡可レ有事なり佛の衆生を度し玉ふごとく大乘の機小乘の機に應じて頓と漸との引導あるごとく諸具のあしらいなどくわしく知らんとするゆへ却て物に依てひが事をするなり只草庵露地の主にても客にても始終の大法を一通習ひ覺え道具も一具二具を極め我所持のしかるべき道具師に相談して組合せ置方かね合取扱一通りを覺る事は老人世務の人もなる事なり其上に本心の會得を深切にすれば終行のはかゆきて間もなく茶になる也此終行書院方とはかわる分別あるべし返〳〵茶湯の深昧は草庵にあり眞の書院臺子は格式法儀の嚴重を調へ世間法なり草の小座敷露地の一風は本式のかねを本とするといへども終にかねをはなれわざを忘れ心味の無味に歸する出世間法なり斯いへ

ばとて壯年又はいとまある茶人心味だてをして知るべき事を知らず取扱ふことふつゝかにては不相應の事なるべし實は事と理と別々にあらず事熟すれば心熟し心熟すれば業熟す業は能すれども心はまだ到らずといふは業もいまだ妙處にいたらざる故なり心は熟したれども業いまだ至らずといふも心いまだ妙に入ざる故なり是佛の道にもふかく了會の一段なりと云々

一休居士老後に十一のかね陰陽差別なく置合せ玉ふこれほど不審なることなし度々尋ね申けれども年老て物忘れなりとのみの玉ふかの去々年の正月五日のことなり閑に我れ獨客にて茶を給りし時此事を申出したれば機嫌能くさらば此物語り申すべしかまへて他言あるべからず世間の衆に聞かせては法の乱るゝこと也茶一道の傳のまゝさしをきたるがよし笑嶺和尚あるとき閑なる夜話の次でに和尚仰られけるは休居士の茶味中々古來茶人の見解にあらず禪法の眞味と他事なし我らも茶を飲むことすきなるゆへ度々茶會に遇ふて巧者に成て色々のことを耳にふれ候それに付不審して心得承たく被仰候何事にてか候と申ければ陰陽のかね晝夜の差別吉凶の飾とやらん度度承ることにて候が書院臺子の飾などは勿論さなくては叶はぬことと覺へ候草庵の一風は居士專ら取たてられ禪林の新規引合せ〳〵露地數奇屋賓主の次第諸具萬般詳かに埒明き候

これ迄にても濟べく候へ共今一重の關をこへられたらば廣くやすく成玉ふべしと三祖大師の信心銘を始より終まで懇に讀聞かせ玉ふこれは御坊の御存の書却て休の物語に不及とかく揀擇する心增愛の心二邊に成ては不二心信信心不二の處會得すべからずさて和尚の玉ふは賓主も陰陽なり水火も陰陽なりこれらはいかゞ去りきらひ給ふや所謂唯須息見。不住二見。愼勿追尋。纔有是非。紛然失心。由一有一。亦莫守一。心不生萬法無咎。陰陽未動前は只一なりこの一も亦守らざれば即陰陽に於て自在なり草庵の規矩に於て陰陽去きらひなき筈なるへきかこれ相應の働ならん露地の茶と打出してとり行はるゝ程ならば萬一世間知辨の人來て一問したるとき答話おぼつかなくとこそ示されしに感心不斜多年の關門一言に通達しうれしさかぎりなく是老後の一大安樂にて御座候と禮拜申けるそれより百千萬の本式を心の一つかねにさとりおさめてつらつら明め見れば陰陽は天地の二氣日月のごとく晝夜の如くされば善惡吉凶の沙汰に不及陰陽を合て十一のかね心次第に用てこそ小座敷の一風なるべけれ數年の間このかねにくびられ心外の至なり眞臺子草の座敷こゝにて明かなり歡喜あるべし草庵の一風に於ては鵡の得心も成就せず漸々に此休が心に悟りあきらめて思ふやうにせよ鵡なき世なりとも一體同心の子弟いさゝか疑ふこと勿

れと幾度も〳〵申されしなり和尚の示敎にて大悟の茶に至ること生々世々本望 不過し是御坊に見出さるゝことこれにかぎらずさらば御坊と休ばかり 如し此仕るべし他人にさすることにてはあるべからず其心得至りたる人は各別なれども今の世に思ひもよらずと語り王ふ此坊信心銘にては讀覺えたれども鈍痴のかなしさ今日迄思ひよらず此物語を聞て誠洞然明白とはこのときなるべしとよろこび申ける其後かならず堺へ下り候へば萬法無咎の一服可し仕と約束申けるに其二月不慮ゆえ其後は一服を參せざること殘念至極也

右同時在京同月八日夜會に休の王ふは我も七十に滿る齡なれば堅固也とて賴がたし子供もいまだ茶道未熟なり今より二十年もつとめたらば器用次第茶にもなるべし其中此一大事相傳をいづれの子供なりとも傳へ玉へとて印可の一卷取出し傳授し玉ふ我ことも辭退申べけれども世間むきにていかゞとしいて披見に及びまことに茶の一道大切の所とこそ云ふべからず

○山水草木草庵諸具賓客庵主歷然として前に有しりへにあり其規矩陰陽の五六小かねの七つ一尺四寸一尺五寸八分と云一句に在て千變萬化自由自在也五十六十のかざり所作は只此枝葉の至なり本規に至べきとの階子なり又大秘事と云はかの山水草庵主客道具法則規短ともに只一ケに打擲し去て一物の念なく無事安心一樣の白露地利休宗易大居士的傳の大道と知べし云々〳〵

一 利休の一枚起請

唐土我朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の茶の湯にもあらず又學問して會の心をさとしのむの茶の湯にもあらず只のどの渴をやめむ爲には湯だに沸ぬれば必やむぞとおもひとりてのむ外に別の子細は候はず但し數奇といふ事は我胸さへ奇麗に候へばよろず其中にこもり候也此外に興す可き事を存せば二人の隣にはづれ數奇者とはいはれまじ此道を信ぜん人はたとへ和漢の學得たりといふも一文の愚鈍の身になりて尼入道の無智の輩に同じくして數奇の振舞をせず只只一向に湯をわかすべし

茶の湯とはたゞ湯をわかし茶をたてゝ
のむばかりなるものとをしるべし

一 小堀遠洲公書捨文

夫れ茶の湯の道とても外にはなく君父に忠孝をつくし家々の業懈怠なく殊には舊友の交をうしなふ事なかれ春は霞夏は青葉がくれのほゝとぎす秋はいとゞさびしさまさる夕の空冬は雪のあかつきいづれも茶の湯の風情ぞかし道具とても珍らしきによる可からず名物とてかわりたる事なし古きとて其むかし新らしたゞ家に久しく傳はりたる道具こそ名物なれ古きとてかたちいやしきを用ひず新らしきとてかたちよろしきは捨つべからず數多きことをうらやまず少なきをいとはず一品の道具なり共幾度ももてはやしてこそ末〳〵子孫迄も傳はる道もある可し一飯を進むとも心ざしあつく多味なりとも主たるものゝこゝろざしうすき時は早瀬の鮎みな底の鯉とても味ひある可からず籬の露山路のつたかずら明暮れ來ぬ人をまつの葉風の釜のにへ音たゆることなかれ

一 澤庵和尚壁書

飯は何のために喰ふものぞ、ひだるきを止む爲にくうものか、ひだるきことなくば喰ふていらざるものよ、然るに添物なくては飯はくわぬと皆人の云ふも辟言なる可し只偏に空腹を止む爲めの謀なり役に喰ふ食にあらず、そへ物なくてはくはれぬはいまだ飢の來らざるなり、うえ來らずば一生喰はであらん、若し飢來らば其時において糟糠を撰ぶ可からず、況んや飯に於てをや、何の添物かいらん、受食如二服藥一せよと佛も遺教たまゐし。

一 光廣卿御壁書

萬のことさわらずかゝわらずわずらひなき身となり春秋の花もみじをともなひ己がまゝに抔をかたむけ世をうしとも樂しとも思はず靜かに座をしむる折からは一枝の花を生け一炷の香をくゆらせよき茶抔のみ古さ文を友としてもし心あらむ人の訪ひ來る事もあらば古へ今の道のかたはしをもかたりなぐさむこそこよなふみとけからまじかゝる業をなさん事は山林の中に住でなどいへど山の奥はやしの中とても名利の心はなれずばいかでやすかる可き只市の中にすむともあながち所をえらびかたちを改む可きにあらず僧は僧のまゝ俗は俗のまゝ柳はみどり花はくれなゐ

まどはぬもまどふもおなじみなもとの
こゝろを見ればたゞありのまゝ

一 夢庵戯歌集の一節 （大我和尚孤立道人と號す）

眼をむき出す達磨も臂ゝ打きりし惠可も柳はみどり花はくれなゐ瓜は甘く瓠に苦し迦葉の顔を破るも阿難の竿を倒すも乾屎橛を佛陀と悟て拭瘡紙を貝葉と敬ひ主人公を呼で莫妄想と嘖りつゝ五蘊の浮雲むなしく去來し三毒の水泡いたづらに出沒するごとに南無佛〳〵と申す可しこれを悟了即童といふ此外に作畧を存せば佛祖の禪にたがい魔魅の業になる聞き釋迦に心經ながら槃犢が口號をかいて拈華にかへ微笑に備ふるのみ

一瓜は甘く瓠は苦く釋迦達磨おなつ精十郎も同じあんばい

一繪にかきし餅の看板見るからにおもひついてもくはねばひだるし

一煩惱の皮が其まゝ菩提あん饅頭くへばあまいだ阿佛

一お釋迦でも達磨でも見よ本の色柳はみどり花はくれなゐ

濃茶を振舞はれて後の朝よみてつかはしける

一口とりの菓子もすきやの茶ばなしにたちわすれてぞにざりさがりぬ

別儀といふ茶をたまはりけるかへし

一阿彌陀佛となふる外に別儀なきおしえちや耳をふりたてゝきけ

一　無難禪師法語の中道歌　（至道庵と云）

一心より外に入る可き山もなし
　しらぬ所をかくれ家にして

一世の中を思ひはなれて聞時は
　入相の鐘も濱の松風

一ねても夢おきても夢の世の中を
　夢としらねば夢は覺けり

一世の中はふくべの尻になますの尾
　おすが如くにねたるべうなり

大道を問ふ人に

一天地の外までみつる身なれども
　あめにもぬれず日にもてられず

大道の元を問ふ人に

一おもはねば思はぬものもなかりけり
　思へば思ふもとゝなりけり

大道を聞き得て行きぬ人に

一とく法に心の花はひらけども
　その身はなれる人はまれなり

法を說く法師に

一ころせ〳〵我身をころせ殺しはてゝ
　何もなき時人の師となれ

迷ひふかき人に

一己が身にばかさるゝをば知らずして
　狐狸をおそれぬるかな

ある法師

一悟りても身より心をしばり繩
　とけざる内は凡夫なりけり

大法のかたきを

一世の中の人のかたきは外になし
　おもふ我が身はわがゝたきなり

物をくるしむ人に

一何事も修行と思ひする人は
　身のくるしみは消へはつるなり

庭前柏樹子

一草も木も國土もおなじ法の道
　げに有り難きおしへなりけり

麻三斤

一佛はと問へは答ふる麻三斤

なにか佛の名にもれぬべき
諸行無常是生滅法生滅々己寂滅爲樂
一いきながら死人となりてなりはてゝ
思ひのまゝにするわざぞよき

右に抄出したる十五首の道歌茶道を讀みたるにあらねど自然茶道觀念のはしともなるべきか所謂茶禪一味能く〳〵味ひしるべきものなり松風を聽茶杓をとるもの必ゆるかせに思ふべからず（古今茶話）

一　大心和尚の記

一趙茶眞一味

趙洲從念禪師。問二新到一曾到二此間一麼。曰曾到。師曰。喫茶去。又問僧。僧曰。不二曾到一。師曰。喫茶去。後院主問曰。爲二甚麼一曾到也。云喫茶去。不二曾到一也。云喫茶去。これを以て趙洲の茶と云ふて禪修行の據とするなり省文にて趙茶とは申すなり趙洲は洲名なり和尚の號にてはなきぞ此時代は今のやうに道號別稱などなし趙洲に居られたる故に人より尊敬して名を云はずに居所をいふなり後代には尚更の事

一無味茶

碧巖三十則評。可レ謂二無味之談一。塞二斷人口一。凡そ禪法は總て味のなきやうに示すなり茶道は即ち禪規なるが故に無味を示して眞味を知らしむ是れを無味茶といふ可し

一　珠光古市播磨法印への相傳の略

此道第一のわるきとする事は心の我慢我情なり。巧者をそねみ初心の者を見下す事第一段無レ勿躰事共なり。巧者には近附きて一言をもきゝ又初心をば如何にもそだつる可きことなり。又當時ひつかるゝと申し初心の人體が備前信樂物を持てる人をゆるさぬとたけくらむこと言語同斷なり。一向叶はぬ人體道具にからかうべからず。如何樣のてとり風情にてもなげく所なく肝要にて候。只我慢我情が惡敷事にて候。又我慢なくてもならぬ道なり。諸道に曰く心の師とはなれ心を師とせざれと古人も云はれしなりと。

編者曰此文寫字の誤か意味不通の所あれ共他に參照す可き策もなければ原字のまゝを掲ぐ

一茶話抄附錄

（如心齋傳法）

此一卷一覽の處凡茶道の奥儀一二句にて盡せり予聞傳習ひ得たる事猶又書添申可く候へ共其數多し畢境言葉の替て其意同じきは無益の事なり法は秘といへども皆常の事なり古松談二般若一幽鳥弄二眞如一風に葉の動くまでも皆之れ法をあらはす依て隱すに所なく予が得たる所の秘事一兩句書添申候

或る人茶道の奥儀を問ふ答へて

茶の湯とはいかなることをいふやらむ
墨繪にかきし松風の聲

一軍法には守破離とあり是れ茶道の極意

守は下手

尤も常體の下手とは違ひ候事業をして工夫につながれたる物なり守レ狩待レ兎

破は上手

尤も常の破とは違ひ守て破るなり時によつて守るも法を破るる法なり見レ風使レ帆

離は名人

尤も常の離れたるとは違ひ事を盡し離れて守る應二無所住一而生二其心一

一金剛經　應下無所レ住而生二其心一　事終る者是工夫肝要也

夫れ茶道は在レ心不レ在レ術。心レ術不レ在レ心。心術雙忘。一味常顯。是茶道之妙用也。

一壺中爐談

器は器也天地は第一の大器にしてしかも上下陰陽日月晝夜の歌あり數奇の數奇たるに渉らざる所なし人々其器に於て欲を生ず專らつゝしむ可き事なり其分を安じ一簞一瓢の足ることを知り身の外の願をなす可からず少欲知足の本意を了悟せざる故に一を得ば二をねがひ三つが五つに成ることを覺ずしらず他の寶をかぞへうらやみきたなくあやしき心に成もて行こと目前に其類多し云々

一路居士は一休と同時の人なり或る時一休和尚一路に向て云萬法路有り如何なるか是一路々々答へて云萬事休す可し如何なるか是一休と一路詩をよくし五山の僧と贈答多し和歌も詠せり佗茶を以て名あり手取釜の歌にて名あり

身をかくす庵の軒の朽ちぬれば
生ても苔の下にこそすめ

手とりめよ己は口がさしでたぞ
雑煮たくと人にかたるな

編者曰右手取釜は一路居士なりとも粟田口善法なりとも又丿貫なりとも傳ふ蓋し各時代を異にす其何れが眞なるを尋究するに由なし

一一問故實

小座敷に玄關附けて後利休例の和尚達へ御茶被レ申し時一問せられしより發れり利休今日始開二小玄關一。勢二煩老和尚笑嶺和尚一。透二脱雲關一活路通到頭勘辨老趙洲

又壺香爐等を關にすへ一問をかける趣向あり一關透過の義なり戸の内に問語を書付て出さる譬へば一壺當レ關不二敢轉一和尚大慈示二透脱一抔有りしとかや客着して主出たる時答句あり今は何の子細も知らぬ人關守さへ當惑させ笑話のたよりとする沙汰の限なり

編者曰當世關守とて露地の飛石に小石を据へること何い意味もあらず只廣き露地の道しるべにすへる迄なり即ち關守のある路は通過す可からずとの意なり

一露地清茶規約

一賓客腰掛に來り同道の人相揃はゞ版を打て案内を可レ報
一手水の事專心頭をすゝくを以て此道の肝要とす
一庵主出請して客庵に入べし庵主貪にして茶飯の諸具不偶美味も亦なし露地の樹石天然の趣其心を得レ不輩は是より遥に歸り去れ
一沸湯松風に及び鐘聲到らば客再び來れ湯合火相の差ひとなる事多罪々々
一庵内庵外に於て世事の雑話古來禁レ之

一賓主歴然の會巧言令色を入べからず
一一會始終二時に過ぐ可からず但法話清談に時うつるは制の外也

南坊在判

天正十二年九月上三

右七ヶ條は茶會の大法なり嗜レ茶輩不レ可レ忽レ之者也

宗易在判

一吸江の齋號

千宗左吸江齋の號は天德寺寅賓和尚の撰なり

馬祖大師一日龐居士問曰不下與二萬法一爲上レ侶者是甚麼人大師曰待三汝一口吸二盡西江水一即向レ汝道居士於二言下一頓二玄旨一也千宗左需二齋號一因摘二吸江二字一授レ之他時老成之日參二得這公案一爐頭獲二安樂一矣

千宗左需二花押一山僧雖レ未レ解二所由一據下被レ褐懷二珠玉一之意一以二玉字一爲二花押一應二厥需一爾

一茶話眞向翁（籔の内竹隱の著）

昔或老人目うとく耳とをくなりて物書く事も得せねば苦るしかねて師の僧に餘命何をかせむと問ひしに茶をのめと答へられしかば茶をのみていかにかせむと重ねて向ひしにたゞ茶をのめ〳〵とばかりに示されしと云々〳〵

實に人目耳うとくなりては何をかなさん萬事休するに加かざる可し唯茶をのめ〳〵と示されしは止る所に止れとの敎ならん易經艮彖曰止也時止則止時行則行動靜不レ失二其時一其道光明也云々〳〵されば達磨大師觀三中國一有二大乘根器一得々として來りて見二梁武帝一對譚するといへども帝敎を尊み常に持二論眞俗二諦一仍而不レ契逐渡レ江至レ魏過二小林一面壁九年也帝若契レ心禪を尊び師を敬せば他何ぞ面壁九年に及ばむ時未だ大乘の根機開けざるを見て則ち止まるなる可し是道の光明也二程全書曰看二一部華嚴經一不レ如レ看二一艮卦一斯れ是等を云ふなるべし

愚人は生涯利路に走つて止る時を不レ知不レ得レ求休することなし是に示す夢窻國師の歌に

思ひ出のなき年月にこりもせで
なほ行末をたのむはかなさ

或人子に問て曰、茶禮は禪法にもとづくと聞けば、禪學をせずんば茶の蘊奥には至りかたからむか、予答て曰く茶に道心なし、翫ぶ人に道心あり、禪者は茶禪一味と賞し、儒者は敬禮の一端とし、道者は可有無の境とせん、何ぞ禪のみを茶道とせむ、或人云、茶祖珠光は一休に參禪し紹鷗利休共に禪者なり、古溪和尚利休居士へ西江水の話を示されしを、居士言下に開悟して、茶の妙境を得られしとぞ、然るにより古織は釜に鑄させられ、三齋翁は吸江の額を數奇屋に掲げ賜ひしとぞ、今も千家籔内共に禪宗也、然るに茶に心なし、翫ぶ人の受持する道を茶道とするといふは、此道の新規といはむか、答て曰、利休居士禪味と茶味とを一椀裏に喫得して、清規とせられし正風は、予もとより仰ぐところなり、然れ共、三教は云はず、慈延師眞向翁の序に、佛道の十宗をかゝけて三學をのべられたり、其くさ〳〵の御法源は同じといへども、各其旨とする所ありて、天台は眞言にあらず、眞言は禪にあらず、十宗各異なり、然るに禪鄙を得ずして茶の蘊奥に至りかたしと云はんには、十宗はしばらくいはず、專修一向の門徒は、淨土信仰の外は餘事雜業としてかゝはらず、日蓮宗徒は、禪法天魔と破して捨れば、茶禪一味の茶は啜らじ、予が如き不學者は、神道之唯一、佛家之三學、儒家の五常といふことをも知らぬに、いかなる緣しにや茶といふことにかゝづらひて、先達の跡を枝折に、曹溪の端をも歩み踏まよはじとたどるなりみるは、猶眇なるべけれど、彼の一眼國師の遺偈、利生方便七十九年とか云ふ語を拜して思ふに、分けのぼるふもとの道も、唯是利生方便にして同じ、雲井の眞如實相の月見ん外はあらじとぞ思ふされば、茶の道行學校は、任他貴賤をつとめ、事理言行一致に眞向かん茶人を我は眞の數奇者とせん、腹に萬卷の書ありとも、言行齟齬せば何かはせむ。穴賢々々

一珠光問答

將軍義政公召レ光問曰茶事可二得聞一耶。光曰。一味淸淨。法喜禪悅。趙洲是知己。陸羽豈得到二其佳境一耶。（中畧）其入二此室一者外離二人我之相一內蓄二柔和之德一。至二交接相見之間一。和兮。敬兮。淸兮。寂兮。及二卒天下泰平也一。源公忻然恨二逢之晩一云々

一澤庵和尚茶亭之記

此記は柳生但馬の茶亭へ小堀遠洲候と來話の節書れしと云ふ